

LIXIL *eye*

建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌「リクシル・アイ」

no. 7

February 2015

- | | | | |
|----|---|------------|------------------------------|
| 特集 | 1 | 新・生き続ける建築 | 長野宇平治 |
| | 2 | 建築ソリューション | 大多喜町役場 |
| | 3 | まちづくりの今を見る | 産業観光でまちおこし「おおたオープンファクトリー」の挑戦 |



風景をデザインする 国内編

屋外に広がる学生ラウンジ

福岡県福岡市

九州産業大学は福岡市の東に位置する総合大学で、2010年の開学50周年を迎えるに当たり、キャンパス・ランドスケープの再整備を行った。私たちは再整備計画の提案に際して、従来のキャンパスによく見られるような格式や形式などとは異なる視点から、キャンパスの新しい在り方を提案できないかと考えた。

学生たちがキャンパスを自由に行き来し、憩い、活動しているような、多様で賑わいに満ちた環境をつくることを目指した。ファニチュアは賑わいを促す重要なファクターと捉え、学生たちが積極的に使いたくなり、さまざまな使い方を試したくなるような魅力あるものとした。また、動線空間とファニチュアを配した滞留空間とを一体化することにより、さまざまな活動が自然に混ざり合うような関係性を築こうとした。

つまり、ファニチュア単体としての在り方と、ファニチュアによって周辺環境とどのような相互作用を生み出せるかということと同時に考えていった。

新たなランドスケープによって、多様な活動が生まれ、それらがキャンパス全体の賑わいへと発展することにより、ランドスケープ全体が屋外の大きな“学生ラウンジ”と呼べるような風景となっていくことを期待した。

古家俊介

Shunsuke Furuie

プロジェクト概要

名称：九州産業大学開学50周年記念事業

キャンパス環境整備

所在地：福岡県福岡市

主要用途：教育施設(大学)

発注者：学校法人中村産業学園

ランドスケープ設計：久米設計九州支社、デ

ザインネットワーク(協力)

敷地面積：22.047ha

工期：2010.11-2012.11

ふるいえ・しゅんすけ——ランドスケープアーキテクト・建築家/1980年生まれ。2007年、慶應義塾大学大学院理工学研究科修了。2008年、デザインネットワーク入所。

主な作品：福岡山王病院ランドスケープ[2009]、福岡市こども病院ランドスケープ[2014]など。



人、自然、ペーパメント、ファニチュアが有機的に混ざり合うランドスケープ【写真：岡本公二】

表紙写真：
大多喜町役場
[撮影：フォワードストローク]

次号[LIXIL eye]no.8は、
2015年6月発行予定です。

「LIXIL eye」はバックナンバーを
インターネットでご覧いただけます。
http://archiscape.lixil.co.jp/lixil_eye

02 [風景をデザインする 国内編]
屋外に広がる学生ラウンジ —— 古家俊介

04 **特集1 | 新・生き続ける建築 — 7**
長野宇平治

04 [本論] 悔いなき建築人生 —— 松波秀子
08 [作品] 三井銀行下関支店(現・山口銀行やまぎん史料館)
日本銀行岡山支店(現・ルネスホール)
大倉精神文化研究所(現・横浜市大倉山記念館)
14 [年譜] 略歴 | 主な作品

15 **特集2 | 建築ソリューション | 保存・再生・継承へ | — 7**
大多喜町役場

22 [序論] よみがえった大多喜町役場 —— 千葉学が今井兼次と対話して —— 夏目勝也
24 [鼎談] 新時代に挑戦した先駆者
何を継承し何を変えるか…。
おおらかな空間と手業の魅力を次世代につないだ大多喜町役場。
—— 糊沢成明 | 千葉学 | 古谷誠章

37 [鼎談後記] 環境やそこに暮らす人々と一体となる建築への愛情が、受け継がれている。 —— 古谷誠章

38 [ARTIST at HOME] — 7
画家・仲田智さんの巻 —— 中村好文

42 **特集3 | まちづくりの今を見る — 7**
産業観光でまちおこし「おおたオープンファクトリー」の挑戦

44 [論考] モノづくりのまち大田、動き出す
—— 「大田クリエイティブタウン構想」とその実践 —— 岡村 祐

46 [コラム] まちづくり活動拠点「くりらぼ多摩川」の取り組み —— 野原 卓

52 [座談会] 「おおたオープンファクトリー」の未来
—— 川原 晋 | 栗原洋三 | 佐山行宏 | 山本大地 | 高橋麻里奈

58 [素材を語る]
“煉瓦らしい煉瓦”の新しい遣い方 —— 武井 誠

60 [TOPICS]
ひとりにいい、みんなにいい。「LIXILユニバーサルデザイン」 —— 高橋邦長

64 [INFORMATION]
建築・まちづくりの情報ポータルサイト「アーキスケープ」のご案内
LIXILからのご案内 | ギャラリー+イベント | LIXIL出版 新刊案内

68 [新・建築家の往復書簡] — 7
箱の離散が作り出す隙間の多様さが快適さの源泉 —— 長谷川逸子 | 西沢立衛

LIXIL eye no.7
2015年2月20日発行

発行：株式会社 LIXIL
編集発行人：野口恭平
日本マーケティング統括部
LIXIL eye 編集室
〒100-6011
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング 11階
Tel: 03-6273-3628
Fax: 03-6273-3539
制作：株式会社森戸アソシエイツ
協力：フォンテルノ(02.42-57頁)
デザイン：松田洋一
印刷：竹田印刷株式会社

*本誌記事の無断転載を禁じます
*本文中の敬称は省略させていただきます

特集 1

新・生き続ける建築― 7

長野宇平治

建築家、デザイナー、建築評論家。1871年、上野国上杉郡上杉町（現・新潟県上越市高田本町）に長野孫次郎の長男として生まれた。長野家の遠祖は古代から中世にかけての上野国の豪族[1]で、その出自は関東に下向した在原業平の後胤が吾妻郡長野原に居を構えて長野姓を名乗ったと伝えられるが確証はない[2]。長野家は町名主を務めるなど高田の有力者であった。祖父・孫次右衛門は旅館、父・孫次郎は酒造業を営んで財をなし土蔵を連ねる屋敷を構えていたが維新後相場場で財を蕩尽。長男・宇平治は秀才ながら中学進学も危ぶまれたが親類縁者の支援により尋常中学を卒業した。明治17年[1884]おそらく優秀な学生が選抜されたのであろう、長野ら3名が旧藩主一族の大平氏に従い上京した。高崎までは徒歩で数日かかり、前年開通した日本鉄道の高崎停車場から汽車に乗った。明治18年大学予備門へ入学、翌年、同校は第一高等中学校予科に改編され第二級に編入、同級に塩原金之助（夏目漱石）、正岡常規（子規）がいた[3]。明治21年[1888]予科を終え本科に進級する際、第一部か工科志望の第二部か迷ったが、建築も多少考えにあって第二部に進んだ。同級には、共に造家学科に進む三橋四郎、塚本靖、大倉喜三郎、鷺田篤二、両角保蔵の他、土木学科の那波光雄ら^がいた[4]。

古典主義建築の第一人者と称された長野宇平治。工科大学造家学科では辰野金吾に学び、真面目で優秀、デザイン・図面のうまさは群を抜いていた。その頃、辰野は浪漫主義的なゴシック式を禁じ、ルネッサンス式を良しとしていた。当時の長野はそれを不満に思ったというが、後に厳格で正統な古典主義建築を極めていく。工科大学卒業後、横浜税関嘱託、奈良県嘱託を経て、1897年、辰野に呼ばれ、日本銀行技師となる。日銀時代は、辰野のもと、大阪、京都、名古屋などで設計監理にあたった。辰野が日銀における後継者と期待するほど、長野のデザイン思考、技量は優れていたという。一連の日銀支店建設が完了し、1912年、長野建築事務所を設立。日銀技師として働き始めてから15年の歳月がたっていた。独立後は、これまでの実務経験を活かし、日本各地に多くの銀行建築を残した。日銀時代の人脉によって銀行建築の依頼が半数を超え、銀行建築家とも言われた。

後進の建築家がセセッション、アールデコ、表現主義、そしてモダニズムなどに傾注していく中、長野は古典主義建築を買いた。その卓越したデザインは、日課であった書齋での研究に裏付けられていた。そこには、欧米の建築家と同等の学識を持って世界共通の道を進みたいという信念があったという。今号は、40年余の彼の建築家人生をひも解いていく。

Uheiji Nagano



【所蔵：フェルナンデス家】

特集 1【本論】

悔いなき建築人生

生い立ち

長野宇平治は、慶応3年9月1日、越後高田の下呉服町（現・新潟県上越市高田本町）に長野孫次郎の長男として生まれた。長野家の遠祖は古代から中世にかけての上野国の豪族[1]で、その出自は関東に下向した在原業平の後胤が吾妻郡長野原に居を構えて長野姓を名乗ったと伝えられるが確証はない[2]。長野家は町名主を務めるなど高田の有力者であった。祖父・孫次右衛門は旅館、父・孫次郎は酒造業を営んで財をなし土蔵を連ねる屋敷を構えていたが維新後相場場で財を蕩尽。長男・宇平治は秀才ながら中学進学も危ぶまれたが親類縁者の支援により尋常中学を卒業した。明治17年[1884]おそらく優秀な学生が選抜されたのであろう、長野ら3名が旧藩主一族の大平氏に従い上京した。高崎までは徒歩で数日かかり、前年開通した日本鉄道の高崎停車場から汽車に乗った。明治18年大学予備門へ入学、翌年、同校は第一高等中学校予科に改編され第二級に編入、同級に塩原金之助（夏目漱石）、正岡常規（子規）がいた[3]。明治21年[1888]予科を終え本科に進級する際、第一部か工科志望の第二部か迷ったが、建築も多少考えにあって第二部に進んだ。同級には、共に造家学科に進む三橋四郎、塚本靖、大倉喜三郎、鷺田篤二、両角保蔵の他、土木学科の那波光雄ら^がいた[4]。

建築家を志す

第一高等中学校本科第二部に進級して、米国コーネル大学建築科卒業の英語教師・小島憲之と閑談する機会があり、欧米建築の写真を見せられ話を聞き、なかでも中世に着工し、いまだ工事中というケルン大聖堂の偉容に心打たれ建築を修めることを決意する。その頃は「人生は短けれど芸術は永へし」の格言を知らなかったがそのような意味で感心したのであろう、その写真は今も鮮明に憶えていると後年述懐している[5]。この頃、漱石も建築を志し第二部を選んだが、同級の米山保三郎[6]に意見され文科志望に変更した。結局、第二部に進まなかったのが長野と共に欧米建築の写真を見ることはなかったと思われる。

明治23年[1890]、工科大学造家学科に入学。謹直で優秀、絵が得意で、デザインと図面の巧さは群を抜いていたという。辰野金吾は設計にゴシック式を禁じルネッサンス式を良しとしたが、長野は厳格なクラシック式より奇抜で奔放なゴシック式でやりたかったと述懐している[7]。後に厳格で正統な古典主義様式を極める長野の当時の思いは興味深い。この自由で奔放な浪漫主義的な志向は、卒業後奈良に赴任して設計した作品群に開花する。

奈良へ赴任

明治26年[1893]工科大学卒業後、横浜税関嘱託となり、妻木頼黄設計の横浜税関監視部出張所の実施設計、現場監理を担当。完成までの1年間、妻木の傍らにあってその緻密で周到な現場監理を学んだ経験は後に役立つ。翌年8月、妻木の周旋で奈良県嘱託となり赴任した。奈良での仕事は奈良県庁舎及県会議事堂[1895]の設計。新庁舎は古建築の淵叢で風致の美しい奈良には似而非西洋建築でなく和風を折衷した洋館たるべし、と県議会で議決された条件附で予算は甚だ少額、前例のない設計に挑んだ。軸組や外壁は洋風だが、屋根に日本建築特有の妻破風を用いて和風を強調したファサードにまとめた。長野はこのトラジショナル・スタイルが現今の地方の公共建築に適用できる可能性に触れているが、早速、東京の日本勧業銀行[8]に影響を与えた。同条件下の奈良県物産陳列所[9]、奈良ホテル[10]は言うまでもない。次の奈良県師範学校[1896]は県庁舎ほど和風の主張はないが、出隅入隅の多い平面に対応して屋根の棟を入り組ませ幾つもの妻壁と塔屋でファサードを構成するピクチャレスクな外観（武田五一によれば「日本建築の趣味を取り入れた木造ルネッサンス式」）にまとめている。奈良県を辞める前後に設計した関西鉄道愛知停車場[1898]はさらに進化する。当時、関西鉄道社長・白石直治は名古屋大阪間の捷路完成にあたり、官営鉄道に負けない立派で魅力的な駅舎を求め、第一高等中学校本科同級の同社土木技師・那波光雄の紹介で長野に設計を依頼。これに応えて急傾斜の屋根が印象的な瀟洒な駅舎を設計した。長野の作風を語る際、後年の古典主義様式の銀行建築と並んで外せないのが、これらの和洋を自在に処理した浪漫趣味あふれるピクチャレスクな外観意匠である。短い奈良滞在の間に、思いもかけない創作の場を与えられたのである。もう一つ、奈良では重要な邂逅があった。後に日本銀行大阪支店[1903]から大倉精神文化研究所[1932]まで長野作品の装飾彫刻を手がける水谷鉄也との出会いである。

明治30年[1897]に古社寺保存法が制定されるのに先立ち、奈良県下の古社寺修理が始まり、その調査と修理の設計監督の内命を受ける。しかし、西洋建築の設計を志望する長野は、後任に同郷高田出身で帝大後輩の関野貞が決まり、明治29年帰京した。

日本銀行へ

辰野は横浜正金銀行本店を設計する心算で長野を帰京させたのだが、設計は妻木に決まり、しばらく無職となるが、明治30年[1897]11月、辰野の推挙で日本銀行技師となる。明治33年[1900]11月、日銀大阪支店の建築中に辞職する葛西萬司を継いで技師長となり下阪。同支店完成後の明治36年[1903]本店に戻り、日銀京都支店と名古屋支店[共に1906]の設計にあたる。両者はほぼ同様の意匠で、赤煉瓦の壁体に白い石材のバンドコースを配した辰野式、辰野葛西事務所による東京海上保険会社、第一銀行京都支店と共に最初期の辰野式である。辰野は明治32年[1899]1月、建築工事監督から同顧問に退いており、長野が全面的に辰野に従い製図をしたとは考え難い。辰野の発想に戸惑いながらも尊重し長野なりの工夫を加えて手堅



奈良県庁舎[1895]

小屋組、軸組も洋風木造架構だが、屋根の葺き方と妻破風などに伝統的な手法を用いて日本風の印象を強調。外開き窓、付柱、付長押などを付した洋風の下見板張り外壁に不思議と調和した和風外観に全体をまとめている【出典：『日本の建築[明治大正昭和]3 国家のデザイン』】



関西鉄道愛知停車場[1898]

比類ない急傾斜のスレート葺屋根を架け、時計台、装飾的な屋根窓を配したピクチャレスクな外観意匠。壮観を呈し、人々の目を引いたという。ここでもファサードの上半分以上を占める屋根の意匠が外観のポイントとなっている。ちなみに長野は1899年3月、『建築雑誌』に「屋根の形」を寄稿している【出典：『日本の建築[明治大正昭和]3 国家のデザイン』】



【5】 「長野博士回顧談」【工学博士長野宇平治作品集】後年、長野事務所の応接室にはゴシック寺院のエッチングが掲げられていたというからケルン大聖堂かもしれぬ

【6】 米山保三郎[1869-97]

『我輩は猫である』の「天然居士」のモデル。『処女作追懐談』によれば、漱石は将来就く仕事を考え、建築ならば衣食住のひとつで世の中になくてはならぬと同時に立派な美術である。元来美術好きな自分の趣味に合うと共に必要なものだと考え、建築にしよう決め、米山に話すど彼は、「今の日本でどんなに頑張ってもセントポール寺院のような大建築を後世に残すことはできない、それよりも文学の方が生命がある」と言った。自分の考えは食べるという打算を基点としているが、彼の説は、衣食問題などはまるで眼中になく大きい事は大きいに違いない。自分はこれに敬服し、その晩即席に自説を撤回し文学者になることに一決したという。ちなみに、子規も米山に圧倒され哲学志望を断念し国文科に進んだ。米山は哲学科に進み将来を囑望されたが29歳で夭折した

【7】 前掲「長野博士回顧談」

「将来の建築は復興式たるべき氣運に際して居るから、學校では其方針で學ばせねばならないとのことだ。然るに、(中略)クラシック式の様な嚴格で束縛的なものは面白く無い、然るにゴシック式は奇抜で奔放で我儘な氣分に投合するから遣て見たいと思はせる、それを遣らせて貰はないのは残念で耐まらない、(中略)在學中終にクラシック式の味を知ることが出来ずに了った」とある

【8】 設計：妻木頼黄・武田五一、竣工：1899年 武田は追悼文「長野宇平治博士を偲びて」(『建築雑誌』1938.3)で、長野の設計に大いに刺激されたと述べている
【9】 設計：関野貞、竣工：1902年、現・奈良国立博物館仏教美術資料研究センター【重要文化財】
【10】 設計：辰野金吾、竣工：1909年
【LIXL eye】no.5.2014.6. p04～参照

[[]*特記のない写真は、フォワードストローク



Giovanni Battista Piranesi「Vedute di Roma」(1770-80)

長野の書齋には、ヴィトルヴィウス、バラディオ、ヴィニョーラなど、16-18世紀に出版された稀覯本がずらりと並んでいた。なかでもピラネージのエッチング画集は稀有なもの。「Antichita di Roma」(1770-80)もある。これらの貴重な蔵書は、当時早稲田大学助教授・今井兼次らがその譲渡を懇願し、長野の厚意と内藤多仲らの尽力により早稲田大学建築学科教室に移管され「長野図書」として継承されている[所蔵：早稲田大学建築学科、出典：「明治建築をつくった人々―その二」]



六十八銀行奈良支店(現・南都銀行本店) [1926] [国登録文化財]

長野によれば希臘(ギリシャ)式。岡山産龍王花崗石のイオニア式円柱のベース上部をフリーズに見立て、バウラニウム(牛頭飾り、ここでは羊頭)とフェストゥーン(花綱飾り)をつなぎ、ロゼッタ(花紋)を添える。この彫刻も水谷鉄也による[出典：「明治建築をつくった人々―その二」]

長野の書齋。右奥の壁には、18世紀の建築家ヴィトルヴィウスの『建築十書』の挿絵が貼られている。

〔11〕 「銀行建築と公衆溜所」『建築世界』1916.4 広い営業室と客溜は長野の特色。客溜は客を遇する空間たるべしという見識ある銀行家の意見によるとる

〔12〕 「装飾士の獨立を望む」『建築世界』1921.11 装飾士を裝飾屋、裝飾商人と區別し、建築士と同等の知識を持つ装飾士の出現が望まれる。されば、建築士は建物全体に目配せし本来の建築設計に専心できる、としている

〔13〕 「東京朝日新聞社社屋を見て」『建築世界』1927.6

石本喜久治による表現主義風の作品について、建物用途に対する熟慮が不足し、外観に対して間取りや内部の建築意匠の不備を批判している

〔14〕 「我国将来の建築様式を如何にすべきや」『建築雑誌』1910.8

〔15〕 水谷は彫刻科で、建築における装飾彫刻をいう。実際に制作する過程で、古典主義様式の装飾について詳細に教えられたのであろう

〔16〕 水谷鉄也「長野先生の靈に捧ぐ」『建築雑誌』1938.3、「長野宇平治君追憶の座談会」『建築士』1938.4

〔17〕 「辰野紀念 日本銀行建築譜」[辰野紀念事業第二部編、墨彩堂／1928]

この時の実測調査が、本館改修と増築の設計に大いに役立つことになる

〔18〕 「日本銀行第一期増築成る」『建築雑誌』1932.6

〔19〕 別稿で、日本銀行本店は辰野の筆であり、このひとつつて他の辰野作品のすべてに匹敵すると述べている

くまとめたのであろう。京都支店、名古屋支店の、にぎやかながらも抑制され端正な印象を与える外観は後の辰野式には見られない。東京駅を始め辰野式の建築を全国に数多く展開させたのは辰野葛西事務所と辰野片岡事務所であり、長野は辰野式の誕生に関与した一人だが、これ以降辰野式を採用していない。

辰野は明治36年辰野葛西事務所を東京に、明治38年辰野片岡事務所を大阪に開設している。以前、辰野は無職となった長野の就職先を探すも話のあった口を即斡旋するのではなく長野の力量に鑑み将来を見据え慎重であった。その頃、日銀技師長の葛西萬司や同技師の片岡安と事務所を開設する心算があったのか定かではないが、長野の洗練された意匠力と技量、日銀での働きを見て日銀における自分の後継者として期待したと思われる。そして、葛西と片岡には長野とは異なる才能と才覚を見い出し、共に設計事務所を設立したのであろう。

長野建築事務所

一連の支店建設が完了し、明治45年[1912]7月、日銀解職。翌年2月、長野建築事務所を開設する。所員の大半は長野と一緒に解職となった日銀技師の部下たちで、日銀の外郭官庁組織としての役割も継続した。15年に及ぶ日銀での実績はもちろんのこと、民間銀行役員に転出した日銀人脈の関係で銀行建築の依頼が過半を占めた。銀行建築家と称される所以である。また、卓越した古典主義様式の作品を手がけ古典主義者とも称された。

長野が傾注するのは古典主義様式のファサードだけではない。平面計画や内部意匠にもこだわりがあった。銀行建築の理想は一軒一室で、一室の中に営業事務室と公衆溜所(客溜)を設けるべしとし、客溜は寛潤で一種の応接室と見なすべしと述べている**〔11〕**。また、インテリアデザイナー(装飾士)の職能についても述べている**〔12〕**。大正末期から、分離派など新しいデザインを志す若手建築家が台頭する中、近頃の建築には、月並みな外観でなくユニークで目立つことを求めて外部意匠に力を入れ、相応のプランニングや内部意匠が伴わないものが多いと憂えている**〔13〕**。デザインテクニックではなく、求められる建築の本質について、施主、ユーザーと理解を分かち合うことの重要性を説く実務家としての長野の一面を見ることができる。

長野の古典主義様式を支えたもの

「詠む書に心はひとり座を立ちて スキツチ入る間も猶惜しき」佐々木信綱が指導する歌会にほぼ皆勤だった長野が詠んだ歌である。娘の記憶では、夜は12時頃まで、朝は女中より早く起き書齋に入るのを日課とした。長野の書齋を訪れた信綱は、蒐集した貴重な蔵書に驚き、単なる建築家の枠を超え、歌のごとく研究熱心な優れた学者であることを実感したという。長野の古典主義建築の卓越したデザインは、その深い研究に裏付けられていたのである。「我国将来の建築様式を如何にすべきや」**〔14〕**で長野は、欧羅巴の今日の建築は段々世界共通になって顕著なナショナルリティは失われつつあり、日本も世界と同一の軌道を進むと述べている。世界共通の道を進むには、欧米の建築家と同等の学識を持つべきとの信念が古典建築研究に傾注させたのであろう。

長野作品の装飾彫刻の多くは彫刻家・水谷鉄也の作である。長野が奈良に赴任した頃、コーネル大学土木科出身の奈良県技師・杉文三宅にいた水谷は、郡山中学へ通う傍ら彫刻界の大家・森川杜園に師事し木彫と絵画を学んでいた。長野は時々森川の工房を訪れ水谷とも知り合った。その後水谷は東京美術学校を卒業し大阪博覧会の仕事をした際、日銀大阪支店の長野と再会、同支店の装飾彫刻を手がけ、爾来長野作品を彩る主要な彫刻は水谷が制作することとなった。工部美術学校の頃は、ヴィンチェンツォ・ラグーザが建築装飾を教えていたが、水谷が美校にいた頃は建築装飾**〔15〕**を教えられなかったので、長野の指導を受けて制作した。東京美術学校の教師となった水谷は建築装飾の必要を感じ、教えるようになったという。長野からは、装飾を取り付けるごく些細なところまでも千年も二千年も永久に残るのであるからどこまでも念入りに丁寧にやらなければならぬと始終教えられた。長野はいつも、「人生は短かけれど芸術は永へなり」という真意を心として設計に努めていたと述べている**〔16〕**。長野作品を特徴付ける質の高い装飾彫刻は水谷によって支えられていたといえよう。

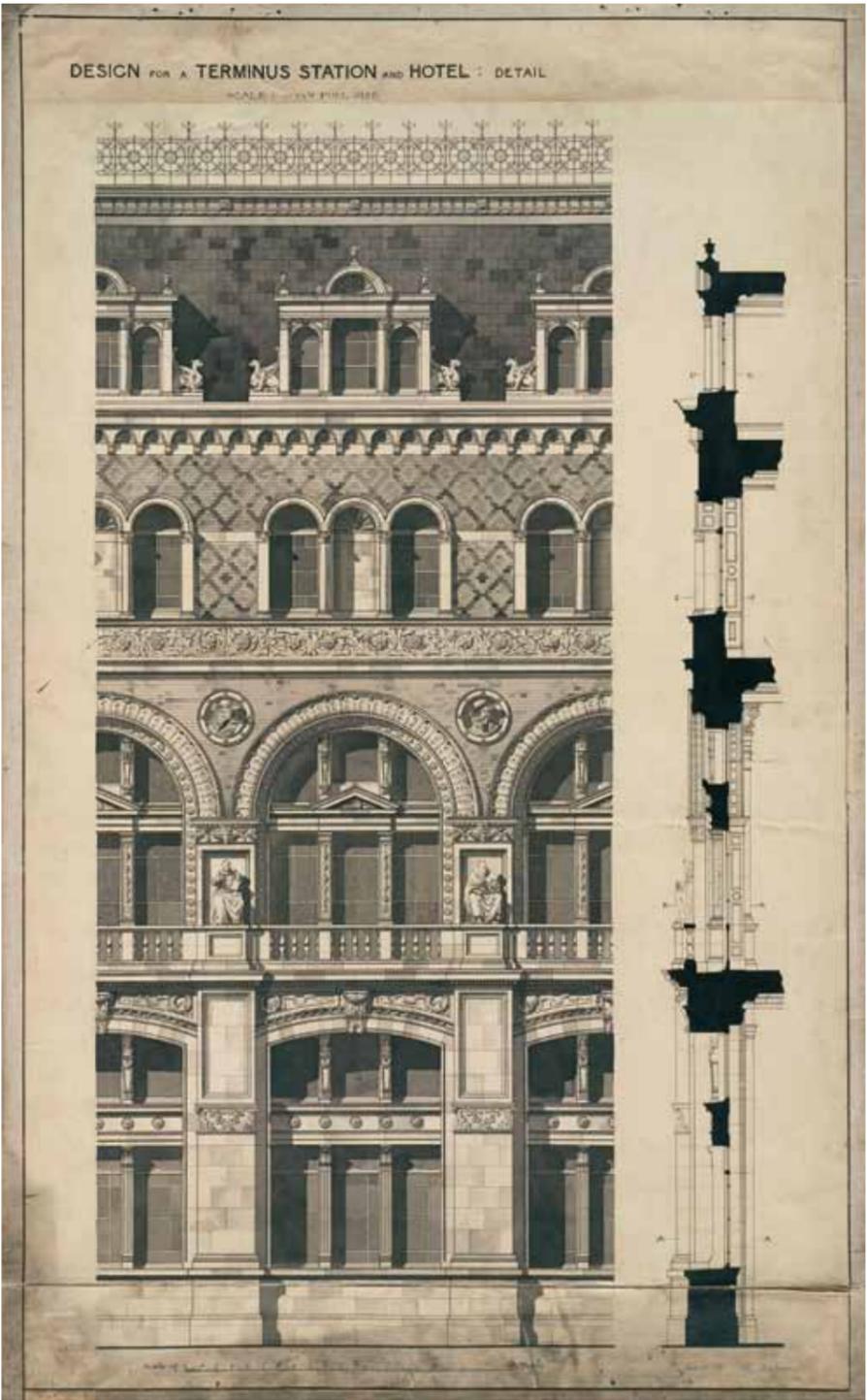
再び日本銀行へ

昭和2年[1927]、日本銀行本店増築が決定した。明治の本館新築以来の大プロジェクトである。長野は、技師・技手90名を擁する日銀臨時建築部の技師長に就き、陣頭指揮を執ることとなる。井上準之助総裁から「絶対に壊れない建物」を厳命され、最新のオフィスビル仕様にすると思いきや、辰野の本館を踏襲し調和させることにこだわった。このこだわりは前年に完了した震災復旧工事にさかのぼる。本館復旧を任された長野は、曾禰達蔵、中村達太郎、横河民輔、葛西萬司、塚本靖を招集し審議を重ねて修復計画の方針を定め、外観を始めオリジナルをできる限り保持し、被災で判明した不備な部分を改良することとした。また、復旧工事中に本館を実測調査して、震災で焼失した図面を復刻し『日本銀行建築譜』を刊行した**〔17〕**。長野は日本銀行本店増築第1号館の解説**〔18〕**で、まず、本館を日本人による最初の西洋建築と位置付け**〔19〕**、辰野に設計が任された経緯、辰野が欧米出張して銀行建築の調査をした経過を詳述し、自身の増築設計に関する所感は一切述べていない。それは文化財修理における建物の史的評価のような叙述である。日本銀行本店増築1・2・3号 館[1932、1935、1938]の構造、設備は最新だが、立面には辰野の本館正面や側面の写しを用いている。しかし、決して単なるコピーではない。新設と写しが絶妙に調和した新たな外観は本歌を凌駕するほどで、長野にしかできないものである。近年の表面的な歴史的復元とは全く異なる。辰野へのオマージュが長野の遺作となったことは、極めて意味深い。昭和12年[1937]12月14日、日銀本店増築3号館の竣工を俟たず、長野は逝った。小島憲之に感化され、辰野らに続いて日本の近代建築を支えた悔いなき人生であった。「四十年を同じ生業守り来つ 顧みすれば悔はあざざり」(晩年の自詠)。

日本銀行本店増築3号館の竣工式。右から左へ、辰野、小島憲之、曾禰達蔵、中村達太郎、葛西萬司、横河民輔、塚本靖、井上準之助総裁。

まつなみ・ひでこ―特定非営利活動法人歴史建築保存再生研究所理事／1972年、名古屋大学工学部建築学科卒業。1974年、同大学大学院修士課程修了。博物館明治村学芸員を経て1990-2014年、清水建設技術研究所。近代建築史専攻。歴史的建造物の調査・保存修復に従事。

主な著書:『東海の近代建築』[共著、中日新聞本社／1981]、『建築史の想像力』[共著、学芸出版社／1996]、『建物の見方・しらべ方―近代産業遺産』[共著、ぎょうせい／1998]、『築地居留地―近代文化の原点 vol.1』[共著、亜紀書房／2000]、『日本近代化遺産を歩く―産業・土木・建築・機械、近代を語る証人たち』[共著、JTB／2001]、『写真集成 近代日本の建築「清水組工事年鑑」(全7巻)』[ゆまに書房／2011]など。



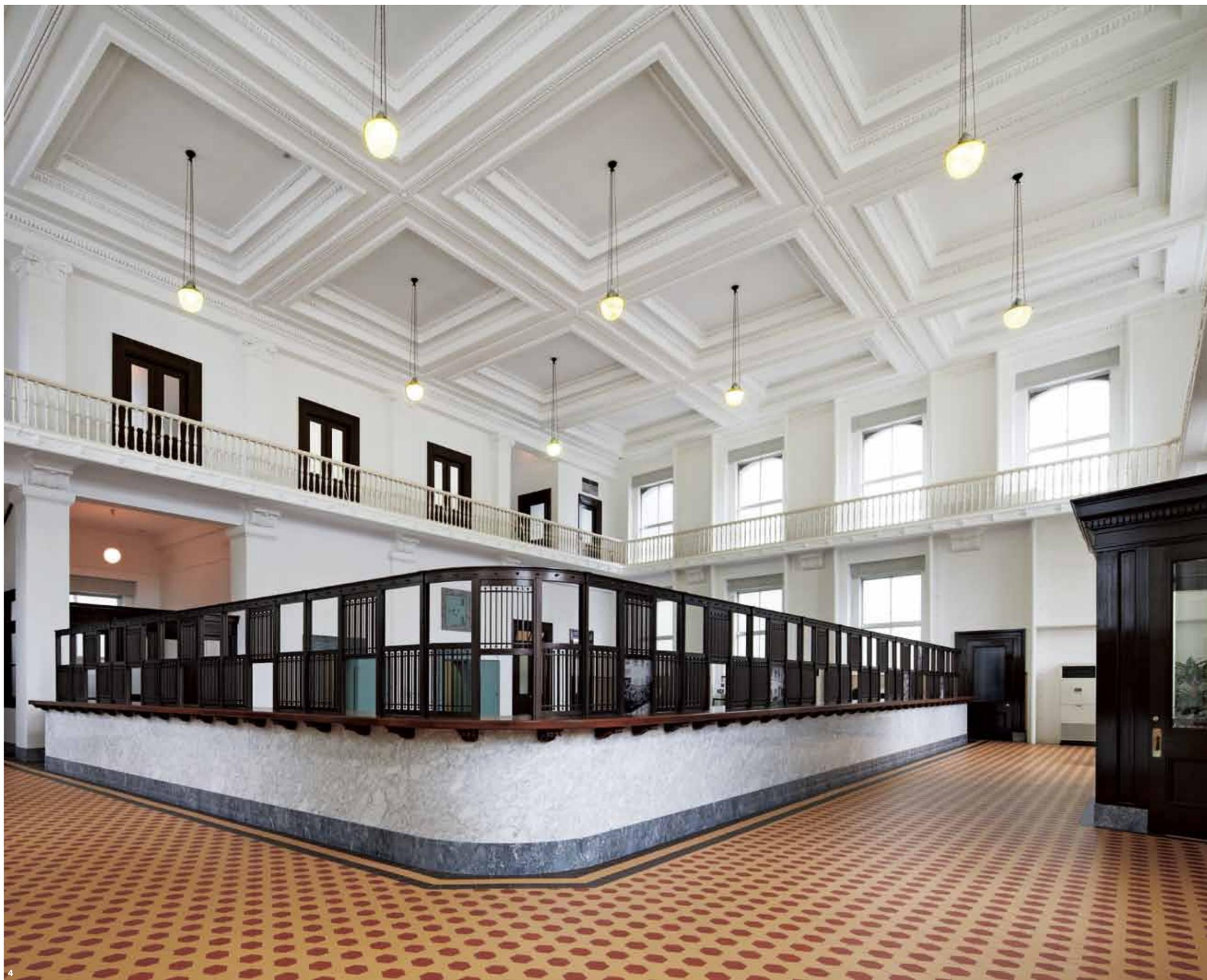
卒業設計「A TERMINUS STATION AND HOTEL」詳細図には長野らしいディテールの緻密さがうかがえる。ゴシックとクラシックの折衷様式だが、後年の長野作品に共通するのびやかな(西村好時によれば「雄大な」、今井兼次によれば「鷹揚なゆったりとした」)外観意匠。鈴木禎次は、「長野宇平治君追憶の座談会」(前掲)で、長野の卒業設計は断然異彩を放ち、当時の唯一の参考雑誌、『ビルディング・ニュース』の図版のようで、いわゆるデザインということ表現する図面なるものの荘重さが分かったように思ったと述べている[所蔵：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻]

**三井銀行下関支店
(現・山口銀行やまぎん史料館)**

竣工年：1920年
所在地：山口県下関市観音崎町10-6
構造・規模：煉瓦造および鉄筋コンクリート造2階建、地下1階
【山口県指定文化財】



- 1 正面全景
ルネッサンス様式を基調とする。上下階を貫く8本の付柱はコンゴジット式。各柱頭の間には窓額線の要石、バクラニウム、フェストゥーン、ロゼッタの彫刻を施すなど、長野の古典建築の深い造詣と語彙の豊富さを物語る
- 2 南階段
客溜から上階の応接室、役員室へ至る。優美な曲線を描く手すりは機製ワニス塗。ジュート製絨毯は当初のもの
- 3 廻廊下の持送り
背面側金庫室前廻廊下の持送りは、アカンサスとスクロールを組み合せた石膏彫刻。側面側廻廊下の持送りは壁中央に付す(写真4)
- 4 展示室(旧客溜・営業室)
梁成2m余のカーン式鉄筋を採用して柱のない大空間を実現。関東大震災でカーン式の脆弱さが判明したが、関東以外にはこの構造の建築が残る。カウンター、亀甲タイルの床は2004年の修理時に復元。同修理でボード天井の上に隠れていた創建時の六層の繰形を重ねた豪壮な格天井が現れた。壁の細い筒型の突起は構造補強の鉄骨柱



日本銀行岡山支店 (現・ルネスホール)

竣工年：1922年
所在地：岡山県岡山市北区内山下1-6-20
構造・規模：RC造+石造+煉瓦造2階建
【国登録文化財】

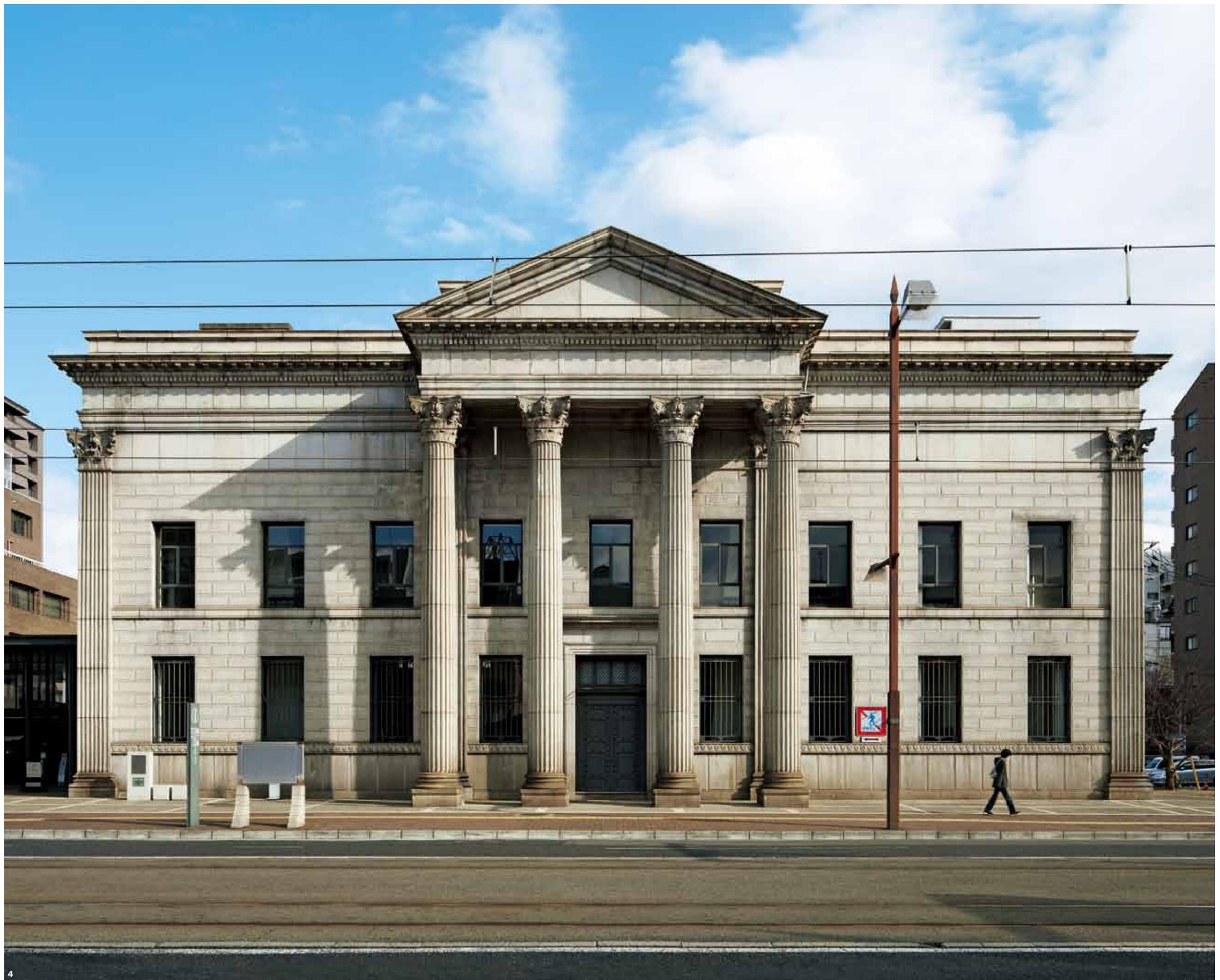


1 多目的ホール(旧客溜・営業事務室)
カウンターを撤去し(稲田石の天板は東側広場のベンチに活用)、一室のホールに改修した。四隅にL型の鉄骨メガ柱を新設し天蓋全体を支持補強。この柱の入隅に照明、スピーカー、空調吹出しを設け、新たな用途に対応させている

2 多目的ホール西側面
新たな活用のため大胆な改変と構造補強をする一方、ホールだけでなく転用された他の室についても既存の材料と仕様をできる限り維持。石材は、幅木：甲斐産紫斑石、腰石・袴石：常陸産霞石、柱長押：秩父産蛇紋石、窓簾板：福島産霞石、玄関・旧客溜敷石：長州産薄雲石敷石が用いられていた

3 公文庫カフェ
文字どおり当時の公文庫をカフェに転用。ルネスホールは市民に人気が高く、稼働率が良いとのこと

4 正面外観
長野によれば羅馬(ローマ)クラシック式。正面中央の玄関は二層の高さの華麗なコリント式の列柱を前面に突出させて設け、装飾を抑えた本体壁面から際立たせている。円柱は備中産北木島花崗石。道路のかさ上げて足元のベースが1尺ほど沈み、当初の完璧なオーダーの比例が変わり安定感が少々失われているのが惜まれる



大倉精神文化研究所 (現・横浜市大倉山記念館)

竣工年：1932年
所在地：神奈川県横浜市港北区大倉山2-10-1
構造・規模：鉄骨鉄筋コンクリート造2階建て、地下1階、塔屋1階
【横浜市指定有形文化財】



- 1 エントランスホール、大階段
正面入り口を入ると大階段が迫り、その上から注ぐ金色の光に圧倒され、一瞬にして異空間に入ったことを感じさせる。正面階段先の殿堂入り口上部の三角は、ミケーネ特有のもの
- 2 エントランスホール吹抜け見上げ
上層四周の列柱下にはテラコッタ製の獅子と鷲の像を交互に配し、像の向きと表情はすべて異なる。原型の彫刻は水谷鉄也による。東京美術学校教授の彫刻家で、長野建築に施された装飾彫刻を多く手がけている
- 3 殿堂内部
ミケーネ式下細りの木柱の上には日本建築の斗拱のような木組。星形天井の角材も然り。星形や窓上と舞台下の三角はミケーネ。東西の古代様式が不思議に融合し、厳かな空間を創出している
- 4 正面外観
中央正面は三層からなる。下層の裾細りの柱はミケーネ式、柱上のフリーズにはクレタ起原の連続螺旋文様、ペディメントの正倉院御物を模した八咫鏡(やたのかがみ)と鳳凰の彫刻は水谷による。上層の列柱はミケーネ以前のクノッソスを思わせる。両翼の裾細りの付柱、窓上下の三角の装飾もミケーネ式。晩年に詠んだ「アテネより伊勢にと至る道にして神々に出あひ我名なのりぬ」には、創設者・大倉邦彦の理念と長野のこの建築に対する思いが込められている



略歴 Biography

慶応3年	9月1日[1867.9.28]、越後高田下呉服町(現・新潟県上越市高田本町)に長野孫次郎の長男として生まれる	明治29年[1896]	11月、奈良県嘱託辞職、帰京	就任、長野建築事務所は荒木孝平を残し継続。国際聯盟会館コンペに参加	
明治16年[1883]	尋常中学校卒業	明治30年[1897]	1月、塚本靖らとスケッチング倶楽部(木葉会の前身)をつくり初会合。9月、工手学校講師。11月、高峰讓吉の姪・竹橋千代子と結婚。同月、辰野金吾の推挙で日本銀行技師	昭和3年[1928]	6月、『工學博士長野宇平治作品集』建築世界社より刊行
明治17年[1884]	旧藩主の一門大平に従い上京、英語塾共立学校に入り受験準備	明治33年[1900]	11月、葛西萬司の後任として日本銀行大阪支店に転勤、技師長に昇格	昭和12年[1937]	12月14日、逝去(71歳)。長遠寺(上越市寺町)に埋葬
明治18年[1885]	大学予備門へ入学	明治36年[1903]	1月、日本銀行本店に転勤	昭和13年[1938]	長遠寺境内に長野宇平治頌徳碑建立
明治19年[1886]	9月、大学予備門は第一高等学校予科に改編。同校予科第二級に編入。同級に塩原金之助(夏目漱石)、正岡常規(子規)同校本科第二部(工科志望)に進級、同級に造家学科に進む5名の他、那波光雄ら。小島憲之の影響で建築家を志す	明治40年[1907]	明治37、38年戦役記念靖国神社境内及附属建築物コンペに参加		
明治21年[1888]	同校本科第二部(工科志望)に進級、同級に造家学科に進む5名の他、那波光雄ら。小島憲之の影響で建築家を志す	明治42年[1909]	台湾総監督府庁舎コンペに参加		
明治23年[1890]	工科大学造家学科入学。同級に三橋四郎、塚本靖、大倉喜三郎、鷺田篤二、両角保蔵。教授：辰野金吾、小島憲之、野呂景義、田辺朔郎、井上哲次郎、助教：中村達太郎、石井敬吉、井口在屋、講師：木子清敬、曾禰達蔵、松岡寿ら	明治44年[1911]	日本大博覧会コンペ、三菱会社本社コンペに参加		
明治26年[1893]	6月21日、卒業論文『建築に於ける鉄の応用史』提出。7月30日、卒業設計『A TERMINUS STATION AND HOTEL』提出。同月、工科大学卒業。9月、大蔵省技師・内務省技師、妻木頼黄の紹介にて横浜税関嘱託	明治45年[1912]	7月、日本銀行技師長解職。8月、台湾総監督府嘱託。9月、大阪市公会堂公開指名コンペに参加		
明治27年[1894]	8月、横浜税関嘱託解職。同月、妻木頼黄の紹介にて奈良県嘱託、高田の親類の星野義宇子を伴い奈良へ赴任	大正2年[1913]	2月、三井合名会社貸事務所長に長野建築事務所開設		
		大正3年[1914]	9月、台湾総監督府嘱託辞職		
		大正4年[1915]	工學博士の学位を授与される		
		大正6年[1917]	日本建築士会会長に就任。以後、中條精一郎らと共に建築家職能確立に尽力		
		大正7年[1918]	横浜正金銀行東京支店設計取り調べのため渡米。翌年2月、帰国		
		大正12年[1923]	関東大震災で三井合名会社貸事務所焼失、事務所を竣工間近い三共ビルに移転		
		昭和2年[1927]	8月、日本銀行本店臨時建築部技師長に		



家族肖像
長野家は子沢山の家系で知られ、高田では宇平治、ヨリ、ソイなどと兄弟の名を連ねたはやし歌があったという。左から長野、次男・齊治、三女・三枝子、次女・宣子、六女・礼子、五女・百合、三男・寛治、四男・元治、妻・千代子(長女・婦美子は不在、長男・隆平、四女・武子は早世) [所蔵：フェルナンデス家]

主な作品 Works

●印は現存 ※印は辰野金吾と共同設計

明治28年[1895]	奈良県庁舎及県会議事堂(奈良)	中央バス本社(北海道)【小樽市指定文化財】	大正12年[1923]	明治銀行大阪支店(大阪)
明治29年[1896]	奈良県師範学校(奈良)	●日本銀行小樽支店(現：日本銀行旧小樽支店金融資料館)(辰野金吾、岡田信一郎と共同設計)(北海道)【小樽市指定文化財】	大正13年[1924]	明治銀行本店(愛知)
明治31年[1898]	関西鉄道愛知停車場(愛知) ※日本銀行ポート部向島艇庫(東京)	※日本銀行福島支店(福島)	大正14年[1925]	日本銀行本店北分館(東京)
明治33年[1900]	住友銀行東京支店(東京)	大正博覧会台湾喫茶店(東京)		三共ビルディング(東京)
明治34年[1901]	※日本銀行本店東分館(東京)	志立鉄次郎邸(東京)		●三井銀行広島支店(現・広島アンデルセン)(広島)
明治35年[1902]	信濃銀行本店(長野)	三井銀行神戸支店(兵庫)	大正15年[1926]	●鴻池銀行大阪本店(現・三和今橋ビル)(大阪)
明治36年[1903]	●日本銀行大阪支店(辰野金吾、葛西萬司、片岡安と共同設計)(大阪)	●台湾総督府(原案のみ)(現・中華民国総監府)(台湾)		●六十八銀行奈良支店(現・南都銀行本店)(奈良)【国登録文化財】
	関西鉄道一等車両内装	横濱正金銀行神戸支店(兵庫)	昭和2年[1927]	日本銀行神戸支店(兵庫)
	関西鉄道大阪博覧会仮停車場(大阪)	横濱正金銀行青島支店(中国)		横濱正金銀行東京支店(東京)
明治39年[1906]	●※日本銀行京都支店(現・京都文化博物館別館)(京都)【重要文化財】	明治銀行金沢支店(石川)		亀島広吉邸(東京)
	※日本銀行名古屋支店(愛知)	明治銀行東京支店(東京)	昭和3年[1928]	藤井栄三郎邸(東京)
	●菅原神社(本殿のみ現存)(新潟)	鴻池銀行東京支店(東京)	昭和7年[1932]	長野野々園(群馬)
明治40年[1907]	※日本銀行広島支店(初代)(広島)	横濱正金銀行下関支店(山口)		●大倉精神文化研究所(現・横浜市大倉山記念館)(神奈川県)【横浜市指定有形文化財】
	※日本銀行本店附属分析所(東京)	明治銀行名古屋西支店(愛知)		日本銀行本店増築1号館(東京)
	●周防銀行本店(現・柳井市町並み資料館)(山口)【国登録文化財】	●三井銀行下関支店(現・山口銀行やまざん史料館)(山口)【山口県指定文化財】	昭和10年[1935]	日本銀行松山支店(愛媛)
明治41年[1908]	※日本銀行本店永代宅日本家(東京)	日本興業銀行大阪支店(大阪)	昭和11年[1936]	●日本銀行本店増築2号館(東京)
	※日本銀行本店永代宅洋館(旧開拓使物産売捌所)改築(東京)	日佛銀行東京支店(東京)		●日本銀行広島支店(広島)【広島市指定文化財/被爆建物】
	※日本銀行金沢支店(石川)	三井銀行日本橋支店(東京)	昭和13年[1938]	●日本銀行松江支店(現・カラコロ工房)(島根)【国登録文化財】
明治42年[1909]	菅原小学校(新潟)	●日本銀行岡山支店(現・ルネスホール)(岡山)【国登録文化財】		●日本銀行本店増築3号館(東京)
明治44年[1911]	※日本銀行函館支店(北海道)			
明治45年[1912]	●北海道銀行(現・小樽バイン&北海道)			

※この頁は、『日本の建築[明治大正昭和]3 国家のデザイン』をもとに、筆者と編集部が制作したものです

参考文献：『日記簿(明治27-45年)』(日本銀行金融研究所アーカイブ)、『工學博士長野宇平治作品集』[建築世界社/1928]、『日本の建築[明治大正昭和]3 国家のデザイン』藤森照信著[三省堂/1979]、『明治建築をつくった人々—その二』[博物館明治村編、名古屋鉄道/1986]

取材協力：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻/日本銀行文書局技師 中村茂樹/山口銀行やまざん史料館/横浜市大倉山記念館/ルネスホール
おことわり：08-13頁の作品名称のみ文化財指定名称とし、他は原則として竣工時の名称を使用しています

大多喜町役場

大多喜町は房総半島の中央部に位置し、農業と林業に支えられた静かなまちだが、歴史と伝統を持つ城下町でもある。1959年、町村合併を機に新庁舎が建設された。これが今井兼次が設計した大多喜町役場である。竣工1年後には日本建築学会賞(作品)を受賞し“名建築”と称された。町民はこれを誇りとし爾来50余年親しんできたが、徐々に老朽化が進み耐震性にも欠けることから、建て替えが検討された。しかし町民は現庁舎を保存し、使い続ける選択をした。

それを受け2008年、庁舎建設検討委員会は旧庁舎を改修し、機能的に不足する部分は増築する条件で、“公募型設計プロポーザル方式による修復・再生”を実施した。コンペにはベテランから若手まで幅広い分野の建築家が参加し、応募総数は104点にのぼった。2009年4月18日、公開審査会には約400名の聴衆が参集し、この事業への関心の高さを浮き彫りにした。

最優秀作品に選ばれたのは千葉学が主宰する千葉学建築計画事務所。今井兼次の慧眼と精神性、込められた空間の力と魅力を見極めて修復・再生し、2012年春、竣工した。50年前の建築が50年後に引き継がれた瞬間だった。古い建物が次々に解体の危機にさらされる今、次世代につながる道を拓いたこのプロジェクトは、2013ユネスコ・アジア太平洋文化遺産保全賞(功績賞)を受賞した。その意味は大きい。

竣工時の概要

所在地	千葉県夷隅郡大多喜町大多喜93
敷地面積	3,722.4m ²
延床面積	1,644m ²
構造	鉄筋コンクリート造
規模	地上1階、一部2階
工期	1958.7-1959.3
設計	建築：今井兼次 構造：猪野勇一
監理	中村 茂
施工	大成建設
設計協力	池原義郎・岩瀬邦生・棚沢成明・鈴木英子
彫刻・モザイク協力	田中 昇・竹内成志

改修時の概要

敷地面積	7,048.87m ²
建築面積	本庁舎(新庁舎): 1,009.49m ² 中庁舎(旧庁舎): 1,037.79m ²
延床面積	本庁舎: 1,325.55m ² 中庁舎: 1,224.31m ²
構造	本庁舎: 鉄骨造 中庁舎: 鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
規模	本庁舎: 地下1階、地上2階 中庁舎: 地下1階、地上1階、塔屋1階
工期	2010.9-2012.3
設計	建築・監理: 千葉学建築計画事務所 構造: オーク構造設計 設備: 環境エンジニアリング
施工	大成建設千葉支店



15頁一中庁舎(旧庁舎)正面玄関に架けられたキャンピー:総長25mの天井には蛇行する夷隅川を描いた梁が通り、3本の柱が千鳥状に立っている。正面の石の壁は地元産の蛇紋岩石積み。職員が海岸で集めたと言われている | 16-17頁一中庁舎正面全景:1959年竣工から56年を経過した中庁舎。2012年に耐震改修を行い、コンクリート面は洗浄し、最低限の補修が施された。バルコニーの手すりは老朽化によりPCで復元。高さも当時のまま650mmを維持した。後ろの塔はベルタワー。その右手が増築された本庁舎(新庁舎) | 18-19頁一まちの中心街、Cビル屋上から見た薄暮の大多喜町役場:中央が中庁舎。屋上のペントハウス壁面にモザイクタイルの壁画が見える。手前の民家は代々続く造り酒屋。右手奥は大多喜町の繁華街に続き、房総の小江戸と呼ばれる古いまち並みが続いている。左奥に大多喜城(舞鶴城)が見える | 20頁上一中庁舎地下1階大会議室:時には議場となり、外の庭から内部の様子を見学することができ、開かれた庁舎としても有名。瀟洒な細いサッシは、試行錯誤の末、当時使われていたものを再利用した。天井梁部分には、可愛い文様が描かれている | 20頁下一本庁舎外観:中庁舎の中央廊下を延長し、その軸線上に建設された。中庁舎と本庁舎は屋根付きのブリッジでつなげられている | 21頁一本庁舎事務スペース:2層吹抜けの大空間には、トップライトから自然光が木漏れ日のように降り注いでいる





よみがえった大多喜町役場——千葉学が今井兼次と対話して

1959年に建てられた大多喜町役場は2010-12年、修復・再生され増築も行われた。保存問題で存続が問われている状況が全国的に多々ある中で、確かな成果を示した一連のプロジェクトに対して、2013ユネスコ・アジア太平洋文化遺産保全賞(功績賞)が贈られ、大切に使い続けられることが約束された。

大多喜町は千葉県房総半島の内奥に位置し、農業と林業に支えられた静かなまちである。徳川四天王のひとり本多忠勝が、徳川家康の命を受けて城主となって大多喜城を築いた、歴史的なまちでもある。全国では1953-61年にかけて、行政事務の能率的処理のため昭和の大合併が促進され、1954年に合併し町域が拡大した大多喜町にも、新しい町役場庁舎が必要となった。早稲田大学教授の今井兼次へ設計が依頼され、1959年に完成。戦後民主主義のもとにおける、町役場庁舎にふさわしい建築とはこういう形、と目の前に示し、町民はもとより日本中を驚かせた。

今井兼次と大多喜町を結び付けたのは中村茂である。早稲田大学建築学科で今井の教え子であり、自身が町議会議員を務めていたことから初代・尾本要三町長へ進言。今井を大多喜町へ迎える原動力となった。

1959年度の日本建築学会賞(作品)を受賞し、爾来50年、町役場として使われてきた。2005-06年にかけて再び国が主導した平成の合併問題では、大多喜町も周辺市町との協議が行われた。建て替えの計画が持ち上がり、一時は存続の危機的状況を迎えた。しかし、多くの戦後の建築が失われる中、大多喜町役場が保存されるに至った経緯には、静かながら存続を願う地道で粘り強い動きがあった。

中村茂は歴代の町長と強い絆を持ち、今井のモダニズム建築の重要性を役場職員へ助言をしてきた。平成の合併に揺れた時も「役場を壊してはならん」と言い続けた。一方、公益社団法人日本建築家協会(JIA)の有志による、まちの外からの働き掛けもあった。彼らは戦後早くから注目された大多喜町役場を、年数を経てもモダニズムの時代を代表するにふさわしい建築と、認識を新たにしてきた。取り壊しの噂に憂慮し、2005年にはJIA保存大会を大多喜町役場で催した。そのシンポジウムでは町役場の大切さを訴えるときともに、改修して建物を使い続ける想定のもと、具体的な計画案と概算費用とを提案した。大会が終わった後まちを訪れると、庁内の建物への関心が高まり、空気が変わったことを実感した。

内外からの声を受けてまちは取り壊しから方針を変え、三代目・田嶋隆成町長は町議会で保存を視野に入れた検討を示唆した。一方、大多喜町は周辺市町との合

併協議が結果は白紙となり、単独で町制を続けることとなった。これも、壊すから残すことへ180度転換をする要因になった。

大多喜町役場の既存建物が地震などの災害に対して、安全であることに加え、町役場として機能や容積が不足なく使えるようにするため、改修と増築の事業計画を策定し、実行した。そして、2008-09年にかけて設計者選定のプロポーザルを公募型で行い、全国から集まった104点の応募の中から、千葉学+千葉学建築計画事務所の提案を最優秀案に選んだ。

ここで注目しておきたいのは、戦後に建てられたRC造建築の、オーセンティシティを確保しながら修復・再生と増築事業を、公募型プロポーザルにより行ったことである。戦後に建てられ、50年を過ぎた建築が壊滅的に失われる中、保存したくても扱いに苦慮している状況を救う、他に例を見ない手法だった。スクラップ・アンド・ビルドへの警鐘が忘れざられがちな今日、特に公共建築において実行されたことは特筆に値するだろう。

先に述べたように、今井は戦後民主主義にふさわしい地方の町役場のありようを世に問うた。隅々に至る無駄のない建築形態で、モダニズムを代表する建築空間を表した。例えば、町役場の機能を窓口と管理、会議(町議会を含む)との3部分に分けて平面を合理的に計画している。また必要な機能を直載に平面へ反映させ、12mワンスパンが4m間隔で15列並ぶ構造架構へと連結させた。当時、まだ建築系の雑誌は多彩な建築で賑わっていた時代ではなく、発表される建築の数少ない中、大多喜町役場の大胆で先端的な技術の鮮やかさに目を奪われた。立面も装飾を排除し風雨を避ける大庇を設け、水平線を強調して建物の表情を決定付けた。合理的な空間づくりを行う一方、今井の真骨頂とも思われる造形作家としての一面も見せた。それは彫刻的なオブジェや特徴のあるトップライト、手仕事の扉金物や照明器具、木部に彩色された手描き模様、デザインされた人造石研出し床など。まちを取り囲むようにして流れ、大多喜城の自然要塞でもあった夷隅川の蛇行をイメージさせる、曲線を用いた梁を持つ入り口の庇を見ることもできる。そして、その庇に導かれて建物に入り、さらに突き抜けた動線の先にブリッジとベルタワーを設け、今井はまちの発展に伴う増築への道標とした。それらで構成された建物全体の形体は“鶴”がモチーフであり、他にもデザインされた扉金物など、同じイメージで表しているものを見つけることができる。

アントニオ・ガウディを日本に紹介したことで知られ



る今井が初めて試みたのが、大多喜町役場の屋上ベントハウスの壁面と屋根面、トップライトに施した陶片モザイク画である(屋根面は残念ながら失われている)。陶片は近隣から集めた和食器や甕、火鉢などのかけらが使われ、その他にも近くの海岸で採取した蛇紋岩を、外壁に使って地域性を演出している。

大会議室は敷地の高低差を利用して地階に設け、多目的に使われるよう計画され、この空間を有効に活用している。ある時は町議会議場となり、ある時は新年会や若者たちのクリスマスパーティーの会場となった。スチールサッシの見事なまでの細い枠と棧の先は、屋外のサンクンガーデンへと視界が連続する。外から会議室の内部を見下ろせば、全体を鳥瞰的に見通すことができる。会議室の使われている状況、特に町議会が催されている時に望見すると、審議の行われている様子を手に取るように見ることが出来る。実に透明感のある、オープンな町政を彷彿とさせる。長年、大多喜町役場を観察している目から見ると、これは戦後民主主義が定着し、更なる醸成を願う、今井のはなむけだったのではないかとさえ思わせる。

改修に当たっては、あたかも今井と対話を交わす思いがあったと千葉学から聞く。原設計図と実在する建築とは異なる箇所があり、なぜそうなったかを探っていくと、今井が語り掛けてくる声を聞くような錯覚があったとも。

千葉は空間と各部位とを吟味し、今井の意図を丹念に読み込んだ。基本的には大きく変えず、壁の塗料まで同じ材料で補修。変えても最低限にし、痕跡を記憶として明白に残した。まちの人々もこれほど見事によ

みがえったことに驚くとともに、もとのままある姿に安堵感を強くしている。RC造のモダニズム建築の改修方法の規範とするものが少ない現在、巧みにオーセンティシティを守った大多喜町役場の手法は高く評価できる。特に戦後につくられ、再生・修復では同様の問題に悩まされる建築への波及が望まれる。

増築を計画するに当たって千葉は、今井が示したコンセプトはもとより、大多喜町の自然環境や風情、町屋の佇まいをも題材にした。町屋の大きな梁からインスピレーションを得たという、30m四方の正方形平面に45度方向に架け渡した大梁と、7mの高さの空間を創出した迫力ある構成は、かつて今井がもたらした12m大スパンの動的で活力ある感動を、改めてそ

そった。広がりのある平面と高い天井の空間は、町役場の多様な使われ方に対応可能な柔軟性を持つ。それほど余裕を持たない全体であるにもかかわらず、いつもどこかに余白を残し、使い方を強要しない自在な空間づくりをしている。

それらは今井の残した遺伝子を引き継ぎ、まさに千葉学が今井兼次に捧げたオマージュではなかったか。プロポーザルから完成までの4年間、今井の作品と濃く接して恵まれた時間を過ごしたことであろう。

なつめ・かつや——建築家/1940年生まれ。1963年、日本大学理工学部建築学科卒業。1963-73年、佐藤武夫設計事務所。1973年、夏目設計事務所設立。大多喜町役場公募プロポーザル審査副委員長。主な作品:オルガンハウス[2002]、福祉複合施設「じゅら」[2003]、特別養護老人ホーム「淑徳共生園」[2007]、グループリビング「ももとせ」[2007]など。

特集 [鼎談]

新時代に挑戦した
先駆者



●聞き手●
古谷誠章
Nobuaki Furuya
建築家

●ゲスト●
棚沢成明
Nariaki Kurumisawa
建築家(左)
千葉学
Manabu Chiba
建築家(右)



何を継承し何を变えるか…。 おおらかな空間と手業の魅力を 次世代につないだ大多喜町役場。

「大多喜町役場を設計してほしい」と 訪ねて来られた

古谷 | このシリーズは、日本の特に戦後近代の中で一時代を画した建築を取り上げて、その建築がどういう時代背景の中で成立したのか。そしてその後、建築界や広く社会にどのような影響を与えたのか。当時を知る方々にお話を伺う、それがひとつの枠組みになっています。戦後もだいぶ長くなりまして、当時の記憶も遠ざかりつつあるんですけど、次世代につないでいく意味ではそろそろギリギリのタイミングではないかというものが多くなりました。そんな中のひとつとして、今回は千葉県の大多喜町役場を取り上げることになりました。この作品は僕自身を含めた早稲田大学出身の学生にとっては建築を学ぶ時の原点みたいな建築になっています。というのは1年生の時の建築図法で、製図を習い始める最初は、必ず大多喜町役場の図面を模写することから始まりまして、これは今も続いております。そういう意味では世代を越えてある種共通の思い出と、そこから学ぶもの、教わるものとして、いまだに大きな意味を持つ建物です。本日は今井(兼次)先生[1]のもとで設計を手伝われていた棚沢成明さんに来ていただきました。よろしくお願いいたします。一方、大多喜町では、2008年に役場の新庁舎を増築することになりまして、プロポーザルが行われました。そうした中、旧庁舎を復元的に改修し、その両方を活かしたかたちで、新しい庁舎の設計、旧庁舎の改修設計を担当して下さった建築家が千葉学さんです。時代は隔たっておりますが、共に大多喜町役場に深くかかわられたおふたりをゲストにお迎えいたしました。最初に、今井先生のところに庁舎の設計依頼があったそもそもの話からお伺いしたいのですが、その辺りのことは、棚沢さんご存じていらっしゃいますか。

棚沢 | 僕は大学2年の初め頃から今井先生の研究室にいたのですが、ある時、大多喜町役場に勤めている早稲田の先輩で建築委員の一人だった中村(茂)さんという方が来られて、先生に「大多喜町の庁舎を設計してほしい」というお話があったんです。たまたま横の席にいたものですから、いろいろと話を聞いていました。僕はまだ2年生で、授業で習うだけで図面は描いたことがなかったんですが、先生方の指導のもとに大多喜町役場の平面図は、最終的には僕が描いた記憶があります。たしか平面図の横には「棚沢」と僕のサインが残っているはずですよ。

古谷 | そうなんですか？ 僕たちが模写した図面ですね(笑)。

棚沢 | たぶん、そうです。

古谷 | そうですね。今お話に出た中村さんというのは、今井先生の教え子でもあるし、それから義理のお兄さまに当たる方が、たしか今井先生とご同級の高島司郎さんという建築家で、まだお若かったと思います。もし彼がいたら大多喜のご出身でもあるし、彼がやるべきだと今井先生は思われたみたい

です。その高島さんの代わりに、今井先生が引き受けたと資料に書かれています。竣工当時の「新建築」[2]を見ると、設計協力として、棚沢さんらのお名前が書かれていますね。そして1959年に竣工して、60年に日本建築学会賞作品賞をお取りになられた。その時の受賞の感想文の中の最後に、研究室のみんなが頑張ってくれたおかげであると、とても強調して書かれています。

棚沢 | そうでしたか。

古谷 | 当時、今井先生は設計事務所というかたちではなく、専ら研究室で設計をされていたと思うんです。

棚沢 | その辺の事情は古谷さんよくご存じだと思いますが、研究室で設計料をもらって仕事をするのことに対して、社会的にいろいろと批判があった時代でした。それで、大学にお金が入って、そこから設計料をもらうやり方を始められたと思います。

古谷 | 今でもその形式がありまして、大学に委託を受けて大学が設計者を指名するかたちで担当する。そのシステムは今井先生がおつくりになったんですか。

棚沢 | 最初だったかどうかは不明ですが。

古谷 | そうですね。当時、今井先生は、授業ではどんな講義をされていたんでしょう。

棚沢 | 1年生、2年生にとっては、非常に分かりにくい話でしたけど、(アントニオ・)ガウディの話はいっぱいしてくれました。ただ、当時はガウディさんという人がどういう方なのか、全く分かっていなかったのです。それとステンドグラスのつくり方の話なども記憶にあります。

古谷 | 製図の指導の一環としてですか。

棚沢 | いや、今井先生が直接、製図の指導をされたことは、全く記憶にないですね。他の先生方は、指導していらっしゃいましたが、今井先生はデザイン関係では、例えばガウディ以前の19世紀までのヨーロッパのデザインの系譜とか、ウィーンの世紀末の建築の流れという話を時々されましたけど。

古谷 | では設計は専ら実作を通して教えられたのですね。

棚沢 | そうですね。とにかく、製図の授業は持っていませんでした。

大多喜町の環境性 “関東の大和”に引かれた

古谷 | 最初に敷地をご覧になって皆さんでくまなく町内を歩いて回られたとお書きになっていたと思います。棚沢さんもお一緒ですか？

棚沢 | いや僕は学生でしたから、現場に行ったのは工事が始まって、建物がだいぶ出来始めてからでした。

古谷 | 今井先生は最初に訪れた時、周りにある大多喜の自然の中にある「環境性」に強く引かれたとおっしゃっています。それを「関東の大和」とも表現しています。それこそ神宮外苑近くの、東京の真ん中で生ま

[1] 今井兼次[1895-1987]
1895年、東京都に生まれる。1919年、早稲田大学理工科建築学科卒業。1920年、早稲田大学助教授、早稲田大学附属工学校講師。1921年、日本美術学校講師兼務。1926年、早稲田大学留学生として、ソ連、北欧、その他欧米を研究視察。1927年、帰国。1928年、帝国美術学校(現・武蔵野美術大学)の設立に尽力。1935年、多摩美術学校(現・多摩美術大学)の創設に参加、同校講師兼任。1937年、早稲田大学教授。1948年、カトリック受洗。1956年、ガウディの会日本支部代表。1963年、渡欧、ルドルフ・シュタイナーのゲーテアヌム客員。1965年、早稲田大学名誉教授。1966年、多摩美術大学名誉顧問、関東学院大学教授。1978年、日本芸術院会員。1987年、逝去。
主な作品：早稲田大学図書館[1925]、西武ユネスコ村[1952]、疎山美術館[1958]、日本二十六聖人殉教記念館[1962]、桃華楽堂[1966]、遠山美術館[1970]
[2] 今井兼次「大多喜町役場」『新建築』1959.7

れて小さい頃からまち育ちだった今井先生としては、大多喜は非常に対比的で対極的なところだった。田舎的なものや自然に対して、憧れのようなものをお持ちだったのでしょね。

棚沢 | たぶん、そうですね。僕も大多喜に初めて連れて行っていただいた時、緩い盆地状の山を走っていて、山のこっちの方からクラクションを鳴らすと、バーツと反対側の山に消えていくような静かなところだったことが印象に残っています。本当に良い環境だという感じがしましたね。

古谷 | 大多喜の場合は、そういうのどかな自然環境もあるし、一方で江戸時代から続いているある種の歴史性というか風土、歴史の厚みがあると思うんです。

棚沢 | そうですね。大多喜町の自然と環境と歴史性のようなものが相当充実していたことが、役場が完成してからようやく分かった気がしました。

古谷 | この辺りで千葉さんに伺います。千葉さんは最初にお話したような経緯で大多喜にかかわられましたけど、大多喜に行かれたのは、プロポーザルの時が初めてですか。

千葉 | いや、学生時代にいろんな建築を見て回っていて、大多喜町役場も見えていたんですが、あんまり記憶には残っていませんでした。ただ、僕は自転車が好きで、房総半島はよく走ります。木更津の方から山を1つ越えて下っていくと大多喜町に入りますが、その時の光あふれる風景が非常に印象深く、コンペの要項が発表された時に、大多喜のあの役場の改修だ、と初めていろんな記憶が繋がって、コンペには何としても参加したいと思いました。

古谷 | 実はプロポーザルには、僕も本当に応募しなかったんです(笑)。それがJIA千葉地域会の夏目(勝也)さんに頼まれて審査員をすることになってしまいましたが、プロポーザルの時の千葉さんのプレゼンテーションはとてもよく覚えています。応募するに当たって、もう一度まちの中をくまなく見て回られていましたね。

千葉 | はい、応募するまでに役場にも2回ぐらい行きました。一体どう改修したらいいのか、どこから手をつけたらいいのかもよく分からない。とにかく今井先生の建物を改めてじっくり見ようと思ったんです。それで、何度も建物を見て回りました。まちのメインストリートも、その時に改めて見て歩いて、思いの外、江戸時代に栄えた頃の面影が残っていることにびっくりしましたし、町家もかなり残っていた。その雰囲気は魅力的でしたし、まちが補助金を出しながら積極的にまち並み保存に力を入れていたことも分かりました。そういうことも含めて、いろいろと考えさせられました。大多喜のまち並みとの調和も考えた方がいい。でも昔の町家の並んでいる風景と新しい庁舎をどう結び付けたいのか。ずいぶん悩みなが、町家の住まい方とか暮らしぶりも見せていただいた。

古谷 | 幹線道路からも高速道路からも遠かった。そういう意味では少し離れていたことが幸いして、江戸時

代からの情緒だとか営みみたいなものが、何かエアーポケットのように残っている。僕が特に印象的だったのは、千葉さんは今井先生の庁舎の何かを直接的にトレースするのではなく、大多喜のまちに立ち返って、そこにあるそれぞれの時代の町家のモチーフとか、そういうようなものを収集して、それらをもう一度新庁舎として作り直したいとおっしゃった。それがとても印象的でした。

千葉 | 正直、非常に悩ましかったのは、ああいう江戸時代からの町家がかかり良い状態で残っていて、しかもまち並みの風景も残っているようなところでまちづくりというのと、とかく「じゃあ役所は瓦屋根で作りましょうか」みたいな話になりがちですね。僕がその時に思ったのは、1959年に今井先生に庁舎をお願いした時、当然その頃の方がはるかにたくさん町家は残っていたと思いますが、そういう時代に今井先生に設計をお願いして、ある意味では時代を牽引していくような建物をつくった。そこが大多喜の魅力だと思ったんです。江戸時代のものもあれば、昭和のものもある。そういうさまざまな時代の建物が地層のように重なっている。そういう中で、何を受け継ぎ、何を棄てていくかを、むしろちゃんと考えなきゃいけないと思ったんです。今井先生の建物についても、その時代のモダニズムの精神を反映しながら、随所に手仕事の、魅力的な造形がある。ある意味で二面性があるんですね。そういうところが今井先生の魅力だと思った。今井先生の二面性と、その時代のまち並みと現在が、どう絡み合っていくのか。それが頭の中に一番最初にあったんですね。

古谷 | 確かに今井先生は大多喜の自然の中にある環境性、「関東の大和」に印象付けられたわけだけでも、でもつくられた形は非常に水平性の強いモダンなシルエットで、平面的に見ても直線状のかなりクールなデザインですね。あの大多喜の風景、風土の中にあるあの形は、直前に手掛けられた礫山美術館とは全然違うタイプだと思うんです。あれはどういう経緯だったのかは、棚沢さん何かお聞きになっていますか。

棚沢 | ちょっと礫山美術館のことを申し上げますと、礫山美術館が今の形になったのは、今井先生のお考えじゃないんです。今井先生はもって北欧の建築家、(グンナール・)アスプルンド的でクールな、コンクリート打放しのシャープな建物をデザインされたんです。

古谷 | そうなんですか？

棚沢 | 実は礫山美術館の委員会に芸大の彫刻の先生がいらして、その方が持ってきた絵の雰囲気です。設計してほしいと言われて、今井先生は悩んでおられました。その結果、今のような礫山美術館が出来上がったんですよ。

古谷 | じゃあ、あれは、本来の今井先生ではない？ それは衝撃的な話ですね。初めて知りました。

棚沢 | もともと打放しで片流れに近いシャープな形だったんです。研究室ではそれを知っていましたから、大多喜町役場が水平性を強調した建物になったの

は、よく理解できました。

古谷 | むしろ今井先生にとっては、そちらの方が自然なことだった。

棚沢 | 当時は、日本中の…というとおかしいですが、大学の建築科では、ル・コルビュジエ一辺倒でした。ル・コルビュジエを認めていながら、やっぱりル・コルビュジエ的じゃないものをつくりたいというのが、今井先生のスタートだったと思います。ですから、どちらかというロシア構成主義や分離派というスタイルが入っていたと思いますね。

古谷 | よく知られているとおり、今井先生は若い頃にヨーロッパに行かれた。きっかけは地下鉄の駅舎の設計を頼まれて、その先進事例を見るためでした。そして北欧にも回られて、(ラグナル・)エストベリのストックホルム市庁舎、ルドルフ・シュタイナーのゲーテアヌムの建築、それからスペインでガウディに出合った。当時、日本ではほとんど知られていなかった、いわゆるモダニズムの主流とはちょっと違う地域性とか精神性を持った建築に強く引かれて、それを日本に紹介されたことが知られていますね。たぶん、棚沢さんが先ほど、学生時代に難しかったという授業では、そういうお話をされていたのかなと思うんです(笑)。それから、今井先生は1925年に竣工した早稲田大学の図書館がありますけど、その頃にはむしろ…。最初の頃はやはりエストベリのことを直接的には意識をされていたような気がするんです。しかし、この大多喜町役場の頃には、むしろガウディに強く引かれて、ガウディの教えとか影響を、ご自分でもかなり意識された文章になっているんです。ただこれも不思議なことに、あのスツとした大多喜町役場のシルエットが、どうしてガウディからきているのかがよく分からない。これはどうお考えになりますか。

棚沢 | たぶんあの形はガウディじゃなかったと思います。ガウディの建物を見て、大多喜町役場ではベントハウスの壁面とかトブライトとか、そういうところに、ガウディを部分的に取り入れたと思います。ガウディがサグラダ・ファミリアの外観にタイルを使ったことなどは、全く未知だったと思うんです。先生がスペインに行かれたのは1927年で、ガウディが亡くなった翌年ですから。

ちょうど僕が研究室にいた頃、大学から研究費を頂きまして、ガウディの研究を始めました。当時は海外の雑誌が研究室に10冊以上、毎月届くんですが、その雑誌の中からガウディに関する記事をピックアップして、全部撮影してスクラップしました。というのは、今みたいにコピー機がないですからカメラで複写して、それを20号館の建物の暗室で現像し、台紙に貼る。それが僕の仕事だったんです。

古谷 | 全部複写なさったんですか。

棚沢 | そうです。それでガウディに関してはカタルーニャ語の資料が多かったものですから、カタルーニャ語が分かる上智大学の神吉(敬三)先生のところを持って行って、日本語に訳してもらった。ただ、神吉先生



中庁舎屋上ベントハウスのモザイク壁画「西の壁」

は建築のご専門ではないものですから、たまに僕のところに戻ってきて、建築用語に置き換える。それを池原(義郎)先生が最終的にチェックなさって今井先生にお渡しする。ですから今井先生としては、大多喜町役場を設計されて、そこでまずタイルの壁面をつくってみたい、どうしたらできるか。これが手始めだったと思います。

手探りで挑戦した モザイクタイルの壁面

古谷 | 竣工された時に、今井先生が大多喜町役場のモザイクの陶壁だけに関する文章を『建築文化』に書かれている[3]。とにかく、まずは「この建物が郷土の人びとの親和の象徴であって欲しい」というふうを考えてつくられた。その時にクスというか、つまり割れた陶片みたいな名も無いものが集まって、何かをつくり上げることに情熱と意義を感じられていたようなんです。その時に、「若い頃に深い感銘をうけた北欧の建築家ラグナル・エストベリやスペインのアントニオ・ガウディの制作態度の賜もの」として、私は深く印象付けられたと書いてあって、併せて「現代の建築についての抵抗がすかしながらこの庁舎ににじんでいるかもしれない」とも書かれている(笑)。

棚沢 | たぶん、そうですね(笑)。タイルの破片、陶壁、陶板の壁面については、大多喜町役場が一番最初でしたから、あらゆるものが手探りだったんです。例えば、先生の下絵をもとに、これをこういうふうに張ってほしいと言いますと、タイル屋さんの後ろに田中(昇)さんという二科の絵描きさんがタイルを張る監督としていて、その後ろに今井先生、さらにその後ろに僕たちがいたわけです。タイル屋さんは「こんな目地の通っていないタイルは張ったことがない。お酒でも飲んで来なきゃ、朝からこんな仕事はできない」と言っ



旧早稲田大学図書館[1925][写真:相原功]

[3] 今井兼次「描想」『建築文化』1959.7

ていました(笑)。

古谷 | お酒でも飲まないで張れない…と(笑)。

棚沢 | そう、こんなメチャクチャな目地のものは、酔っぱらってでもいなきや張れませんと。

千葉 | 屋上のペントハウスのタイルは、ちゃんとタイル屋さんが張っていたんですね。

棚沢 | そうです。田中さんが陶器を割ってそれを渡す。タイル屋さんはもうやけばちで張るわけですよ…(笑)。

古谷 | 学生さんたちが手伝う場面はありましたか。

棚沢 | 全くありませんでした。今井先生の描いた原画に田中さんがタイルを割って合わせて、タイル屋さんがそれを張っていくという状態でしたからね。

古谷 | タイルを集めてきたのは？

棚沢 | それは僕たちも、田中さんも集めましたし、あちこちのタイル屋さんにも集めていただきました。大成建設からももらったと思います。ただ、この後の長崎の二十六聖人のように一般から集めたりはしていませんでした。今井先生がここに張りたいたいというものだけを、集めたという感じですね。

古谷 | ペントハウスの壁面のタイルは、今回も修復をされていますよね。

千葉 | はい、しています。ただ、正直、かなり傷んでいました。ペントハウスの屋根面にも壁画があって、壁画は三面描かれていることを僕たちは知っていたので、最初はそれも含めて修復しようとしていました。現場に乗り込んだ時には、屋根面には防水がかけられていたんですが、おそらくその下に絵が眠っているだろうと思っていました。その防水をきれいに剥がせるかどうか、現場に入って早い段階から現場と検討していたんですが、いざ防水を剥がしてみたら壁画が残ってなかったんです。たぶん雨漏りがひどくて、ある時期の改修で壁画は外されたんだと思います。

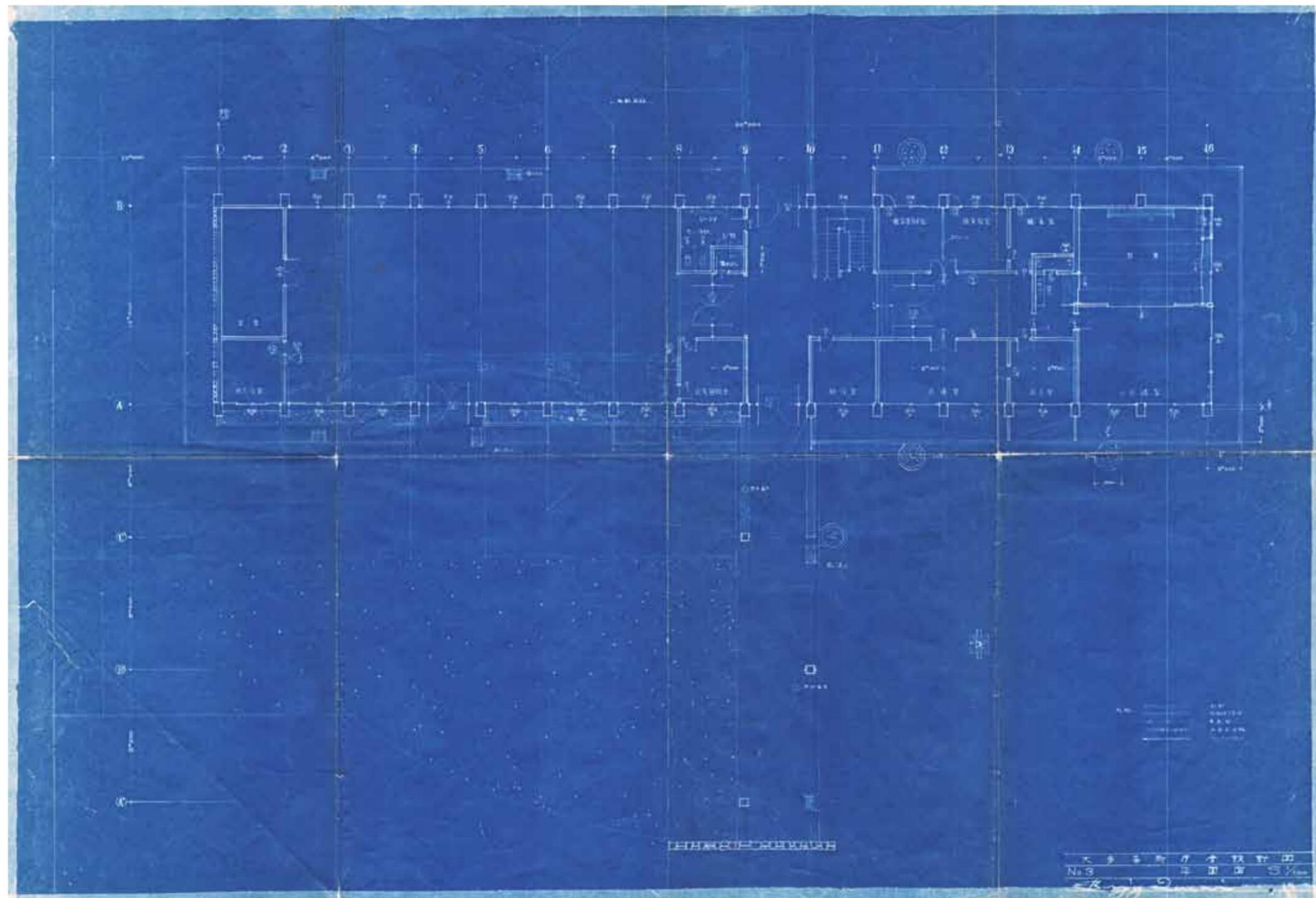
古谷 | それは残念でしたね。

千葉 | そうです。失われたものはしょうがないですが、壁の残り2面もかなり傷んでいましたので、そこも悩ましい点でした。表面を完全に樹脂みたいなもので固めて、今以上は劣化させないという方法も検討したのですが、それだとももとの良さが完全に失われてしまうために、僕たちは最終的に、表面にコンクリートの劣化を抑える材料を浸透させることで、水が浸入することだけを抑えるかたちをとって、今回は終えたんですね。

古谷 | あんまり手を掛けてはいないけど、コンクリート部分の劣化だけは防げる。そういう方法をとられたわけですね。

千葉 | そうです。タイルの表面が剥離して、どんどん水が染み込む状態になっていましたので、それぐらいは防げるのではないかと。

古谷 | 1959年に大多喜町役場のモザイクが出来て、61年には東洋女子短大、62年に長崎の二十六聖人です。立て続けにずっとモザイクに挑戦されていた。確かに大多喜町役場では、モザイク壁画の部分にはガ



ウディ的な雰囲気が出ていたのかもしれないけど、基本的には…。

棚沢 | 基本はやっぱり、いつも描かれているパステル画の今井先生の持っていた透明感とか、スカッとしたおらかなイメージ、それをつくりたかったのだろうと思います。

斬新だった 執務空間の構造

古谷 | 千葉さんが復元された時に改めて驚かれたという4m間隔で12mの大スパンのオフィス空間ですが、当時としてはかなり斬新だったと思います。その辺はどういう設計をされていたんですか。

棚沢 | 柱を建てなくても、それ用の梁背を使えば跳ば

せるというお考えで設計されたと思うんです。研究室の中では、池原先生が山下設計で実務をされていたから、先生を始め、みんなは全幅の信頼をおいていましたけど、僕らは見るのも聞くのも、全く初めてのことがありましたから、実はビクビクしながらやっているところがありました(笑)。

古谷 | 設計の技術的な面では試行錯誤というか、スムーズではない部分もあった。

棚沢 | そうですね。構造は今井先生の後輩だった猪野(勇一)さんが担当されていましたが、車寄せの夷隅川の蛇行を模した梁は、「もつのだろうか」とちょっと心配だったようです(笑)。

千葉 | あの庇は竣工後につくり直していますよね。

棚沢 | ええ、そうです。

千葉 | 庇は竣工直後に撤去してつくり直していまし

た。やっぱりいろいろあったんだなと思いました。

古谷 | もともと、石の壁と庇の間に挟んでいる支柱も、原設計にはないですね。

千葉 | 『新建築』の発表図面[2]では石の壁と庇はくっ付いていないんだけど、写真では支柱が挟まっていますね。それから、石の壁に近いところの柱も後からつくっています。型枠をバネコートでつくっている。スギ型枠じゃないんです。型枠を見ると庇はいろいろな時代が混じり合っていますね。経緯、詳細は分からなかったんですが、ただ、昔の資料に池原先生と香山(壽夫)先生の対談があるんですが、この辺りのことを詳しく話されていました[4]。

古谷 | なるほど。設計の技術的な面はそういうすつたもんだがあったのかもしれませんが、プランの内容とどうか、間取りとどうか、これは役場との間ではすんなり

大多喜町庁舎設計図 平面図(竣工時)[所蔵:大多喜町役場]
今井兼次先生による実施設計図。早稲田大学の建築学科の最初のトレース課題で今も使われているという有名な図面。12mという大きなスパンのコンクリートの柱梁の骨組みが4mピッチで15間並ぶ中に最小限の間仕切りが付加されて出来ている。一見すると実に単純明快なプランでありながら、庇の柱配置、石積み壁の水受けなど、実に味わい深い細部にあふれている[解説:千葉学]

[4] 「対談: 建築家を天職とした希有的人・今井兼次」(池原義郎×香山壽夫) [INAX REPORT]No.97.1991.12



日本二十六聖人殉教記念館「信徳の壁」[出典:『INAX REPORT』No.97.1991.12]



中庁舎正面玄関の石の壁とキャノピーの間の支柱



建設中の大多喜町役場の航空写真【所蔵：石井肇】
写真左下方の大多喜駅から南に向かう通りに面した農地に建設された町役場は、東西方向に横断する高低差が5mある谷の地形を活かし計画された。全長60mに及ぶ庁舎東側地階には議場を兼ねる大会議室が配置され、外から部屋全体を見わたすことができる、町民にとって開かれた庁舎となった。通りには茅葺屋根も多く見られ、また、東の方面（写真左上方）には徳川四天王のひとり本多忠勝が築城した大多喜城（舞鶴城）の城下町の面影を残すまち並みが広がり、現在も房総の小江戸として伝統的な和風建築が点在している【解説：大多喜町役場】



役場で打ち合わせをする尾本要三町長（左）、中村茂氏（中）、今井兼次氏（右）【提供：大多喜町役場】

【5】『大多喜町役場—庁舎の歴史と再生』【大多喜町／2014】

いったんでしょうか。

棚沢 | 具体的にはよく分かりませんが、たぶん今井先生のカリスマ的な調子で、すんなりいかしちゃうんじゃないですか。

古谷 | 先生は度々現地に赴いて、設計の打ち合わせをされていますね。

棚沢 | そうです。例えば会議室の天井の梁の絵とか、細かいところまで全部、先生が描いた下絵をもとに、現場で田中さんが描いていました。現場の工事用の図面でも必ず青焼きした図面にサインをされました。そういうディテールの集積が、やっぱり出来上がってから、良い建築になるんだなということを学生でも分かりましたね。

古谷 | でも、今の話は現場の話ですけど、設計を持って行った時は、かなりモダン建築だったわけですが、すんなり理解してもらえたんですね。碌山美術館みたいなことは起こらなかった。

棚沢 | そうです。

古谷 | そういう意味では今井先生のお考えがうまく伝わって、それが成功につながったんでしょうね。地元の方のご推薦もあって設計のご依頼があったから、最初から、尊重されたんでしょうね。今回まとめられた資料集【5】を見ると、昔の町長さんと中村さんと、今井先生が3人で打ち合わせをされている写真が載っていますものね。

棚沢 | 懐かしいですね。

古谷 | 和気あいあいと論じ合われている様子ですね。

そうすると、当時としてはかなり斬新で近代建築的な考えが展開されていたわけですね。今思いますと、大多喜町役場の庁舎は水平で、確かに一見、異質なことのように見えるかもしれませんが、敷地に傾斜がありますから、水平の庁舎はかえって外部空間を際立てて、対比的に美しい感じに見えますよね。

棚沢 | そう思います。出来上がってから庭の傾斜を下りていくと、こういう考え方が確かにあるんだと思いました。敷地をつくっちゃうのではなく、敷地をそのまま活かしたわけですね。

古谷 | お互いに活かし活かされるような関係が生まれているように思いますね。このプロポーザルのコンペの審査員の1人に地元の山口（みち子）さんという女性がいらっしゃるのですが、いつも下の方を犬の散歩で歩いて、そちらから見るのが気に入っていると言っていました。斜面の下の方から見上げると、こちら側に段々の庭があって、その向こうにスツと水平の建物がある。近代建築のある意味での単純さというか、シンプルさがありますね。庁舎を文化財として保存するだけじゃなくて、これから先、何十年も使っていけるように改修されましたが、これができたのもこのプランニングのおかげですね、きっと。

棚沢 | そのとおりですね、これからのいろいろと発展性のある、可能性を含めたところが、やっぱり良かったんじゃないですかね。

“冗長性”と“象徴性” 保存に耐え得る建築だったから…

古谷 | 旧庁舎は改修の直前までいろいろと小分けにしたり、間仕切りを入れたりして、逆に狭くて使いにくい感じになっていたんですが、今回、これを千葉さんが復元してもとに戻されたために大きな空間に戻って、今後の使い道にもつながっていった。千葉さん、増築棟をつくられた時に“冗長性”と“象徴性”とお書きになっていますけど【6】、どういふふうにお感じになりましたか。

千葉 | それは今井先生の古い庁舎を見て、出てきた言葉なんです。実際に50年たって、しかもこれをまた残そうと多くの方が思われたのは、もちろんそれまでのJIA千葉地域会の夏目さんを始めいろいろな方々の保存運動もあってのことでしたが、それだけじゃなくて、やっぱりこの建築が持っている空間そのものが、残すことに耐え得るものだったと改めて思ったんです。それは先ほども出てきた12mスパンという、当時としては大変大きな空間がつくれ、しかもそれがフレキシブルに使えるようなおおらかさを持っていた。その一方で、随所に人間の触覚に訴えかけてくるような豊かな造形があって、それが実に魅力的なんです。どうにでもなるような自由な空間、おおらかな空間をつくっていながら、一方で、非常に象徴的なところもあって、そのバランスが絶妙だと思いました。それは今井先生から僕が学んだことでもあるし、その精神こそ新しい庁舎をつくる時に継承しなくちゃいけない。そこから“冗長性”と“象徴性”というふうに思いました。

古谷 | 今井先生が『新建築』で竣工時に書かれた文章の中にはですね、単純さに関して「敷地の東西軸にしたがい、全長60メートルの新庁舎を—文字に単純に配置した。そして5メートルに及ぶ東傾斜の高低差を素直に生かすとともに、重厚なコンクリート肌打放しの外観と厚く深い軒とは周囲の山稜に照応させながら、つとめて素朴な姿となるように努めた」。それからもう一つは、主屋のこのポーチの配置計画に関しては、「庭全体の規模と景観とを妨げぬよう南面ポーチの柱の千鳥配置によって長大な庭を二つに軽く分断させた」というようなこと。それから「私は日頃から絵画・彫刻などを母なる建築に総合して統一化をはかるようにしているので、この新庁舎の各所に私なりにコンクリート彫刻や陶片モザイク、あるいは木梁面の紋様などをデザインしましたと書かれている【2】。やっぱりその中にある地形と呼応するような単純素朴な全体性、それから随所にちりばめられる絵画や彫刻が建築と統合するという全体像が物語られていますよね。

千葉 | はい。配置計画と地形の関係が見事ですけど、設計依頼時に敷地は決まっていたのですよね。

棚沢 | そうです。

千葉 | ちょうどS字にうねる梁の架かったキャノピーが江戸時代に栄えたまちの中心部に向かって落ちていく地形のエッジに配置されている。だから、役場に

向かって行くと柱の千鳥の意味もよく分かって、入り口からアプローチする側には柱がなくて、受け止める谷側にちゃんと柱がある。その地形の読み取りと大きなキャノピーは大変見事だと思ったんです。それから今井先生は当時から増築されることを想定していたんですよね。

棚沢 | していましたね。

古谷 | それは何か具体的に絵に描かれていたんですか。

棚沢 | いえ、全然なかったですね。ただ、将来的にはタワーの向こう側に増築する…と考えていらしたと思います。

古谷 | 『日経アーキテクチャ』の記事には、役場ですから将来、必ず増築の問題は起こるだろう。北側に軸を延ばしていたので…と書かれていますね【7】。

棚沢 | プロポーザルが決まって、千葉さんがいろいろとやられる前に、池原先生が…。

古谷 | 増築案をつくられていましたよね。あれはご覧になりましたか。

棚沢 | チラッと見た程度です（笑）。

千葉 | 僕は拝見していないんです。

古谷 | あの案は、阪田誠三さんと宮本忠長さんと池原先生と3人の講演会を早稲田のOB会でやった時にお持ちになったんです。ちょうど大多喜町役場を保存するかどうか問題になりかかっている時で、JIA千葉地域会の夏目さんたちが保存運動を盛り上げていた頃だと思うんです。昔、今井先生はこういう考えだったのではないかと…。

棚沢 | 僕は池原先生の事務所にお伺いした時に、たまたま先生のデスクの上に置いてあったのを見ただけなんです。

古谷 | そうですか。当初から地形としてみると、道路側はそのレベルのまままで横に延びていて、逆に反対側が崖地になっているというのは極めて自然なことだったんじゃないかなと思います。

では、細かい装飾の話に入っていきますが、これは可愛らしくて愛着があるんですが、『新建築』の文章によると、いろいろなところに施した小さなデザインは、すべて「大多喜町にゆかりあるものを象徴的に織り込んでみた」【2】とあります。

棚沢 | まずは、屋上にコンクリートの彫刻がありましてね、それは舞鶴像と称して、舞鶴城からきていまして、鶴の舞い降りる姿を今井先生はデザインされたんです。その形をもとにしているものがあちこちに使われています。

古谷 | アルファベットの“OTAKI”という文字を重ね合わせて鶴をデザインしていると、資料に書いてありました【5】。

棚沢 | 竣工の時に皆さんにお配りした記念品が風呂敷なんです、あのパターンをデザインしたのは僕なんです。よく憶えています。

千葉 | 全体の配置計画も、羽根を広げた鶴が舞っている形になっていますね。



中庁舎屋上の舞鶴像：「OTAKI」のアルファベットの文字を重ね合わせて、鶴が舞い降りる姿を表している

【6】千葉学「時間と空間を紡ぐこと」【新建築】2012.4

【7】「フォーカス改修：大多喜町役場」【日経アーキテクチャ】2011.1.10



竣工時の大多喜町役場【所蔵：石井肇】
モダニズム建築として装飾をそぎ落とした
打放し仕上げの鉄筋コンクリート造りの庁舎
は、手すりや庇などにより水平線が強調され
ている。それに対し、玄関入り口から延びる
3本の柱による玄関ポーチ天井には夷隅川
の蛇行を表わし、建物全体に少しでも柔らか
い要素を持ち込もうとしている。玄関ポー
チ南壁は地元の石材を使用することにこだ
わり役場職員が採取した蛇紋石を使用。屋
上左奥にはOTAKIのアルファベット文字を
組み合わせて鶴が舞い降りる姿を表したオ
ブジェ、また、屋上ベントハウスには陶片を
使用したモザイク壁画を施すなど、さまざ
まな工夫が見られる【解説：大多喜町役場】



早稲田大学會津八一記念博物館【1998】
【写真：浅川 敏】

棚沢 | そうです。それと話は飛びますが、大会議室の
サッシは、当時はスチールサッシだったんですが、それ
に先生は濃いグリーンを塗りたいと言われた。ベンキ
屋さんに来てもらって、当時は色ナンバーなんてない
ですから「この色とこの色を混ぜて塗ってくれ」と言う
わけです。それを何か所かに塗って、すぐに検討する
んですが、結局、乾かないと分からないという話になっ
て、そのままベンキ屋さんを待たせるわけです(笑)。
それで夕方見に行き、「やっぱり一番最初に塗ったの
が良かった」という話になるんです。サッシの色1つ
でもそういう状態で決めていました。ですからベンキ
屋さんもタイル屋さん大変だったと思いますね。

千葉 | 僕たちはその色を忠実に再現できているのかな
(笑)。一応サッシに塗られていた塗料は全部削りまし
て、一番下に出てきた色に合わせて塗ったんです。

棚沢 | そうだったんですか。

古谷 | 千葉さんの改修で特に素晴らしいと思っている
のは、オリジナルのスチールサッシを全部リフレッシュ
して使われていることです。プロポーザルをする頃
から、あんな細身のサッシをどうやって再現するかとい
うのが問題だった。スチールは、今の曲げてつくるや
り方ではつくれないので、難しいだろうと話していまし
た。ただ私はたまたまですが、今井先生の作品であ
る早稲田大学の図書館を會津博物館に改修するデザ
インをさせていただいたんですが、図書館にも同じよ
うなサッシを使った大きなアーチ状の窓がありました。
これよりはるかに古い時代の型鋼とパテで止まってい

る窓だったんですが、その時は今回の千葉さんほど執
念深くやれなかったんです。でもあの見付け、あの奥
行き、あのプロポーザルを再現するにはもうステンレ
スでやらざるを得ないと思ひまして、やむなくステン
レスでつくり直したんです。ステンレスに合う塗料をの
せて、鉄パテの代わりに抑え縁も小さなステンレスを
曲げて、遠くから見るとプロポーザルは変わっていな
いようにつくった。それをやった自信がありましたの
で、今回もできるというお話をしたんです。そうしたら
千葉さんは、さらに深く検討しているうちに、これはそ
のまま使えるんじゃないかと思われたんですね。そこ
が素晴らしい。

千葉 | たしかプロポーザルの時には「全部スチール
の型材でもう一回つくり直します」とお伝えしていまし
た。当然、水密性も気密性も劣化していると思ってい
ましたから。

古谷 | すでに開かないのもありましたからね。

千葉 | そうです、全部つくり直さなくちゃいけないと
思っていました。実際、設計も終えていたんですね。
現場に入って、メーカーの方とやり取りを始めて、さら
に見付けをどれぐらいまで近付けられるかを散々検討
したんです。メーカーの方もこれじゃガラスののみ込
みシロが取れないとか、そういうやり取りが散々あっ
て、やっぱりもとのサッシの見付けが、どう頑張っ
ても実現できない。果たしてこのまま続けていいのか
どうか。そこでまたしばしば悩みまして「残すことを考
えてみる手もあるかな」と思い直しました。それでサッシ

屋さんと改めて現地を見て回りまして「再利用の可能
性はないだろうか」と言いましたら、「いったん持ち帰っ
て、鉄の状態を調べてみます」ということで、サッシを
撤去して工場に持ち込んで、塗装も落としてさびの状
態もチェックしたところ、これだったらまだいけるとい
う話になった。「ならば残そう」と方針転換をしたんで
す。ただレールとか金物類、戸車とか、その辺の細々
したものは全部取り替えてやり直すことにしました。
実は現場判断して方針転換したことが山のようにある
んです。ただし、これは大多喜の方々のおおらかに
支えられたところがあります。まちの方々から「新しく
してもらわないと困る」みたいな意見が出るかもしれま
せん。で、ドキドキしながら「サッシはもとのまま使いた
いんですけど、いいですか」と聞きましたら、「いいで
すよ」と、意外とあっさりOKしてくれた(笑)。そうい
う経緯があって、何とか残せたんです。

棚沢 | 大変ご苦勞をお掛けして、本当にありがとうござ
います。

千葉 | ただ、大庇が架かっていたところは、そんなに
傷んでいなかったんですが、例えばベントハウスのサッ
シは全部やり直さざるを得ませんでした。

古谷 | 外壁コンクリート面の、大庇で覆われているコ
ンクリートの部分は雨ざらしじゃないから、長年たっ
ているとは思えないほどきれいな状態で残されていま
したけど、バルコニーの先の手すりも、雨が上から下から
当たりますから、相当爆裂していた。

千葉 | 基本的な躯体はほとんど大丈夫でした。やっぱ
り一番傷んでいたのは、大庇の外側のコンクリートで、
かなり風化も進んでいますし、爆裂している。その辺
の手直しには一番気を遣った部分です。

古谷 | 庇のデザインは、モダニズムではあるけれ
ど、いわゆるル・コルビュジエ的モダニズムとは違
いますね。

千葉 | そうですね。

棚沢 | やっぱり19世紀末、ウィーンの分離派がやった
デザインを今井先生はお好きでした。僕も研究室にい
たために、ル・コルビュジエは名前だけしか知らないで
卒業しました(笑)。でも、今井先生はル・コルビュジ
エの業績は、ちゃんと認めてらっしゃいました。研究室
にル・コルビュジエが来たこともありました。ル・コ
ルビュジエの直筆のサイン本も研究室に残っていました
から。当時の早稲田では、吉阪(隆正)先生がル・コ
ルビュジエの現場から帰って来て、学生に人気がありま
した。今井先生は、「頂点に達する手法として、ル・コ
ルビュジエの方法もあり、ガウディの方法もある」と話
していました。

『大多喜町役場一庁舎の歴史と再生』

増築・改修の全記録

古谷 | この『大多喜町役場一庁舎の歴史と再生』とい
う冊子は、すごく貴重な資料ですね[5]。つい最近届
いたんですが。

千葉 | これは、今回の一連の保存・改修が、ユネスコ
から賞を頂いて、せっかくだから今までの改修も含め
た経緯を全部記録しようという話になって、大多喜で
別途予算を組んでいただいたんです。ユネスコで賞
を頂く上で尽力して下さった金出ミチルさんが中心に
なってつくって下さいました。

古谷 | 相当いろんな資料が残っていたんですね。

千葉 | 改めて町役場をお願いしたら、写真とか初
めて見たようなものもずいぶんあって、良い資料が出
来たと思ひました。保存・改修の仕事は、建物をどう
残すかということも大事ですが、僕が今回の改修に携
わって、どこでどういう判断を下したかという、ある種
のドキュメントとしてきちんと残していくことが大事だ
と思ひまして、可能な限り資料を盛り込んで出来た冊
子です。

古谷 | そういう意味では本当に貴重な資料ですね。
まさに町役場だけど役場のオフィスとしてだけ使っ
ているのではなくて、住民のパーティー会場になったり
ホールになったり、共通の場をつくる雰囲気、この資
料にはよく出ている。最初から大会議室では、毎年
年末に地元青年団とクリスマスパーティーをやっていた
ことも書いてありました。

棚沢 | そうなんですよ。話は飛びますが、当時は会議
室の天井の梁に一体何のために絵を描くんだという話
なんかもあったんですよ(笑)。

千葉 | 会議室の梁も今回の改修では苦勞したところ
です。絵は本当に貴重で、僕たちが再現できるもの
ではない。ただ、梁自体もだいたい色あせてステインが全
く落ちてしまった状態でした。そこで絵だけ残してス
テインだけを塗り直したんです。塗装屋さん筆に近
いようなもので、絵以外のところにもう一度ステインを
塗り直してもらった。

棚沢 | 会議室で思い出したんですけど、入り口のド
アノブとか金物がたくさん使われていますが、すべて
デザインは今井先生なんです。今だったらデザインは
きちっと図面を描かないと発注できないですが、先生は
「こんな金物がいいな」と言って描くんです、図面の上
に。それを指でガーンとこすって真っ黒にしちゃうん
です。そしてそのまま見積もりに出すわけです。業者の
人は「これは何ですか」って質問するんですけど、「こ
んな感じです」とおっしゃるだけ。ですから大雑把な見
積りがくるわけですよ。最終的には業者が見積もって
来た10倍ぐらいのコストになるんです(笑)。金物は
出来上がるまで現場で図面を描いていました。

千葉 | 全部鋳物ですよ。

棚沢 | そうです。もうバーって描いて真っ黒に消し
ちゃって、線が見えるかどうかという程度です。

古谷 | その描き方は完全に今の早稲田にも踏襲され
ていますね、あの感じは。描いてから全部、指でこす
るんですね。

棚沢 | それから先生はコンパスで描いた円弧が嫌い
でね、原寸に近いものまでフリーハンドで描かれていま
した。今はないと思うんですけど、事務室のところに



中庁舎大会議室の天井の梁に描かれた絵



早稲田大学応接室で談笑する棚沢氏(中)、千葉氏(右)と古谷氏(左)

古谷 | 灰皿を…?

棚沢 | そう、出さないとポツと灰が落ちる(笑)。そんなことが日常的でした。研究室で作業をしていて、今井先生ならどう答えを出すのか、いつも考えていました。学生として当然だったと思いますし、先生のところで人間性というものをものすごく教わった気がします。ですから卒業してからも、本当は研究室でお手伝いしなくちゃいけなかったんだらうと思いましたが、事情があって松田平田坂本事務所に入って、足掛け10年実務をして、独立したんです。独立後はマイペースで、世の中のいろいろなことに動かされずに仕事をしようと思ひまして、ネパールに行って設計をしています。それも今井先生の影響だと思うんです。40年近くいまだネパールと付き合っ、小さな村おこしから建築の設計までやっているんです。そういうすべてのことが今井先生の教えといえますか、直接教えてもらったわけじゃないですが、先生から学びました。例えば、先生は図面の上では僕が描いたものは片っ端から直されるんですが、3年の終わりから4年になりますと、今井先生だったらこうやるだろうと大体予測できましたし、先生もそのとおりに直すんですよ。それから先生の奥さまのお墓の掃除と一緒に同行したり、深いお付き合いをさせていただきました。設計事務所に勤めてからも先生の誕生日には、かかわりの深い方々を集めて、誕生日をみんなでお祝いして、お身体を悪くされて入院なさってからずっとそうしていました。いろいろな思い出がたくさん出てきますが、吉阪先生が亡くなった時に、最後の最後まで講堂の端の方で吉阪先生のスライドをじっと見つめていらっやして「私の弟子だと思っていた吉阪先生が先に亡くなるとは思っていませんでした」とつぶやかれたことも印象的でした。最近、今井先生が思っていたことを伝えていかなければいけないと思うような心境になってきました。昔の研究室の連中ともそういう話をします。

古谷 | ぜひ、伝えていただきたいと思います。今井先生はあちこちで描かれていますけど。彫刻や絵を描いたりすることは、そのために描いているんじゃないかと、それを通して建築を考えたり、建築に活かす

ために描いている、そういうことがエストベリヤあるいはガウディの製作の態度から感化されたものであると。それから二十六聖人などを見ますと、表面的にはガウディのデザインと結び付けて見ちゃいますけど、今井先生が深く心酔していたのは、製作態度だったんです。

棚沢 | そうです。僕も「今井先生がガウディに似ている」とか安易に言われると、少しムカッとすることがあります。

古谷 | なかなか普通の人にはそこまで理解できないですね。こうやって深く辿って行ってやっつ分かる。

最後に千葉さんに伺います。千葉さんは、今井先生に直接会われたことはないですよね、どんな印象、感想でしたでしょうか。

千葉 | 直接、お会いしたことがなくて、建物を通じてしか知ることができなかったんですね。ひとつ幸せだったのは、今回、古い建物に増築するというプロセスだったので、増築をしている間は当然、旧庁舎には手を付けられない。ですから、ものすごく長い時間、僕は建物に通うことができたんです。自分で増築棟の現場をやりながら、一方で今井先生の建物に日々触れているような状態でした。行くたびにいろいろな発見がありましたし、当初持っていたイメージが変わることもありましたけど、長い時間、この建物に触れる時間があったことは、大変幸せだったと思います。その中でひとつ感じたことは、今井先生は、非常にユーモアのある自由な精神を持ち合わせていた方だということです。今井先生のそういう精神をなるべく受け継いでいきたいと思いました。例えば、ディテールひとつにしても、素材の使い方ひとつにしても、ここでこんなことをやっていたから、きっと他の場所でもこうだろうと思って見ると、全然違うことをやっていたり…(笑)。おそらく現場でたくさん時間を割かれて、現場での判断がたくさんあったのだらうと思いましたが、実際に出来上がっていく過程でいろいろと考えが変わっていったところがたぶんたくさんあったんだらうと、それは僕自身もそういうところもありますので、非常に共感しました。また、それが許された時代でもあったんです。そういうことも含めて、すごくいいなと思いました。あとこれは今井先生とは直接関係ないかもしれませんが、あの建物に注がれた時間というか、エネルギーの膨大さが人の心を掴むのだらうとも思いました。建築をつくるということはそもそも大変なことですが、そこで過ごした時間、考えたことの量の膨大さ、それが圧倒的で、そのことをちゃんと伝えられない。僕たちはそれをうまく解釈して次の時代に伝えるためには労力を惜しんじやいけない。それこそディテールの判断にしろ、素材の判断にしろ、とにかく可能な限り時間を割いて考え続けられないといけないということです。もしかしたらそれもひとつの今井兼次らしさの継承かなと思っていました。

古谷 | 最近ますますそういうことがやりにくい、設計の現場での変更がしにくい状況になってきているけど、

それは本当に大事なことです。そういうプロセスを経て、さっきの環境と一体化していく。そういうところがやっつぱり、机上で、図面の中で描かれたものでは決めきれないものが、必ずありますからね。

千葉 | 僕自身もう一つ思ったのは、建築はそれなりに年を重ねて、いろんな履歴も積み重なっていく。そういう履歴も大事にしようということです。今回の改修で手を加えるという履歴もまた大事だと思っていましたので、僕なりに今の目で見たいと思うものは残しましたし、これはやっぱりやっつぱりいけなかったんじゃないかという改修はやり直させてもらっているんです。逆に今回、手に入らない材料、今の技術ではできないものもたくさんあって、そういうものについては変なイミテーションやまねはしない。今の時代で手に入る材料できちんと改修し、履歴を残していこうと思ひました。いきなり具体的な話になりますが、一番悩ましかったのが、コンクリートの補修です。

棚沢 | そうでしょうね(笑)。

千葉 | 横(文彦)さんの豊田の講堂[8]では、莫大なお金をかけて30mm研って、55mm打ち増しするみたいな方法で改修されていましたが、今回は当然そんなことはできない。じゃあどうしよう。そこでスギ型枠の板材の幅ごとに時間差で補修をしようと考えました。マスキングをしてスギ板1枚分の補修を行ったら、時間を置いて、また隣の板材の幅の分だけ補修するという手間の掛かるやり方です。そういうことで、お金がないなりに、予算がないなりに工夫した。でも今井先生が掛けたエネルギーに負けないエネルギーを使うためには、そういうところしかないなと、そんなことを思ひたりしました。

棚沢 | ありがとうございます。

古谷 | 良い設計者を選ぶことができましたね。

棚沢 | 千葉さんのこういう努力を、僕らも周りの人に話していかなきゃいけないですね。

古谷 | そうですね。今日はおふたりから貴重なお話、貴重な証言をいただき、ありがとうございました。

[収録：2014年12月8日]

[取材協力] 大多喜町役場 / 銚子信用金庫

くるみさわ・なりあき——建築家 / 1936年生まれ。1959年、早稲田大学第2理工学部建築学科卒業。卒業時に村野賞。1959-67年、松田平田坂本設計事務所。1968年、アトリエドム設立。1969-71年、早稲田大学非常勤講師。1970年頃より、ネパールにて設計活動。主な作品：Hotel Himaraya [1988]、Hotel Sunset View [1994]、Lodge Thasan Villige [2005]など。

ちば・まなぶ——建築家・東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授 / 1960年生まれ。1985年、東京大学工学部建築学科卒業。1987年、同大学大学院修士課程修了。1987-93年、日本設計。2001年、千葉学建築計画事務所設立。同年、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻准教授。2014年より現職。主な作品：黒の家 [2001]、MESH [2004]、日本盲導犬総合センター [2006]、こどもの城 [2009]、工学院大学125周年総合教育棟 [2012]、教賀駅交流施設オルパーク [2014]など。

ふるや・のぶあき——建築家・早稲田大学教授 / 1955年生まれ。1978年、早稲田大学卒業。1980年、同大学大学院博士前期課程修了。1986年から1年間、文化庁芸術家在外研修員としてマリオ・ボツタ事務所(スイス)に在籍。近畿大学助教授を経て、1994年、早稲田大学助教授、NASCA設立。1997年より現職。主な作品：アンパンマンミュージアム [1996]、詩とメルヘン絵本館 [1998]、早稲田大学會津八一記念博物館 [1998]、ZIG HOUSE / ZAG HOUSE [2001]、近藤内科病院 [2002]、神流町中里合同庁舎 [2003]、茅野市民館 [2005]、高崎市立桜山小学校 [2009]、小布施町立図書館「まちとしよテラソ」 [2009]、早稲田大学理工カフェ [2009]、鶯庵 [2009]、T博士の家 [2010]、実践学園自由学習館 [2011]、熊本市医師会館 [2011]、中河原保育園 [2012]、ルビシア滋賀工場 [2012]など。

鼎談後記——古谷誠章

環境やそこに暮らす人々と一体となる
建築への愛情が、受け継がれている。

大多喜町役場の平面図や断面図、矩計図は、建築学科1年生であった僕が生涯で初めて出合った思い出深い建築図面である。生まれたてのひよこには、自分が初めて目にする動くものを母親だと思ひ込んでしまう「刷り込み」の習性があるというが、僕たちにとってはまさしくそれらの図面がそうだった。模写して描くうちに、単純明快な構成ながら、実に密度高く表現された建築の姿に、まだ建築設計のイロハも分からないながら、まずは図面を描くことの楽しさを教わったように思う。今回は今井研究室でまさに直接それを描かれたご本人からお話を伺うことができ、ひときわ感慨深かった。トレースに大変苦勞した鶴をかたどったモニュメントなども、棚沢さんに由来を聞くことができた。

建築というものは、さながら記憶装置のようなものだとつくづく思う。作者である今井先生にはすでにお会いすることが叶わないわけだが、手塩にかけて生み出された建築が目の前にあることで、今でもその声に耳を傾けることができる。伸びやかな大地に起伏の刻まれた特徴ある地形に対して、どうして真一文字の配置が想起され、また横深い軒に覆われた一線のスカイラインが描かれたのか、その場に立って建築に対峙することで、自ずと理解されるものがある。また随所にちりばめられた手仕事の刻印は、それらがそのまま、作者の現場での息遣いを感じさせるものとなる。しかしそれらをひも解く語り部があることで、そのメッセージはより明瞭に伝わるものだけということを実感した。改めて建築が保存されることの意義と、それを物語る言葉を遺しておくことの大切さを感じた。

さらに、半世紀以上の歳月を隔てて新庁舎を設計するに当たって、一からそれらと対話してくれた千葉さんの真摯な姿勢にも、改めて頭が下がった。その丹念な取り組みによって、旧庁舎は輝きを取り戻し、同時に現代の要請に応える新たな庁舎機能を、新旧の棟がシナジーを働かせて役割を果たす関係が組み立てられた。大多喜町役場が、これでまた今後もさらに次の世代を啓発する建築であり続けることができる。この建築を慈しみ、大切に思ってくれた多くの人々の情熱が結果としてそれを可能なものとした。

寡作とも言える今井兼次の建築作品の中であって、これほどまでに繰り返しの目に触れた設計図も他に例がない。心血を注いだ実作をもって多くの学生たちを育てた往年のその精神が、再び語り継がれることにつながるとすれば、この鼎談を企画したものとしても無上の幸である。

[8] 名古屋大学豊田講堂
[LIXIL eye]no.6.2014.10、p15~参照

画家・仲田智さんの巻

Satoshi Nakata

中村好文：文、イラスト
Yoshifumi Nakamura



画家の仲田智さんがご自分の住まいとアトリエをほぼセルフビルドで作られていることは、つとに有名で、私も友人や知人から断片的に話を聴いていました。

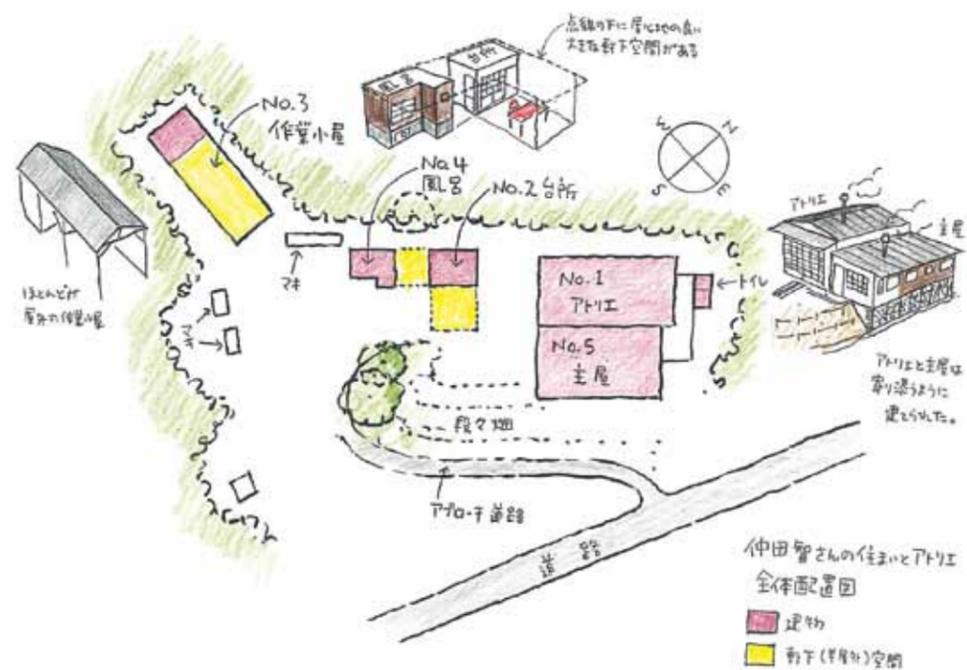
なかでも、いつも面白い企画展を開いているギャラリーのオーナー、土器典美さんは「仲田さんは素敵な人だから、ぜひ、会って見学させてもらったらいいと思う」と薦めてくれた上で、連絡先なども教えてくれました。じつは私もある雑誌で紹介されていた仲田さんの住まいとその暮らしぶりの記事を興味深く読んだことがあり、住まい作りとそこでの暮らしぶりに、生活まるごとを自分の素手で切り開いていく開拓者の印象を受けていました。

そして、自分の居場所を自分の手で作り出すことに特別な意欲を燃やす仲田さんを、私はたくいまれな「営巣本能」の持ち主として記憶にとどめていたのでした。

見学当日、仲田さんは最寄り駅の常陸大宮駅まで車で迎えに来てくれました。初対面の仲田さんの印象は「落ち着いた物腰」と

「穏やかさ」でしたが、スリムな体型と丸刈りの坊主頭のせいか、どこか少年っぽい面影も残っていました。「この人は、子供のころとあまり容貌の変わらなかった人かもしれない…」というのが私の第一印象でした。

駅から家までの道中、仲田さんは東京から住まいとアトリエをその場所に移すことになったいきさつを話してくれました。話によれば、もともと仲田さんの実家は茨城県なつか市にあるので実家に近く、東京への行き来のことも考えて、高速のインターチェンジからも近い場所を探していましたが、なかなか予算とイメージに合ういい場所が見つからず、だんだん実家からも遠ざかっていったあげく、現在の人里離れた山林に辿り着いたとのことでした。ほどなく車はメインの道路から脇道に入って山道をしばらく進みました。そして、あたりから人家が消えて、さらに奥へと進んだ雑木林を切り開いたところが、仲田さんの住まいとアトリエでした。あたり一帯が雑木林の山なので、どこまでが敷地か分かりかねましたが、仲田さんの手に入れた土地全体は700坪ほどあるそう



大きな庇に覆われた居心地良さそうな軒下空間が人の心を誘う。手前の板壁の建物が風呂小屋、そのとなりが台所。正面に見えるのがアトリエと主屋の建物



ロフトから見下ろした仲田さんのアトリエ。制作の熱気が室内に充滿している。床に飛び散った絵の具はジャクソン・ポロックの作品のよう

です。その土地に生い茂っていた雑木を切り倒し、斜面をブルドーザーで整地して家を建てる場所を確保するところから仲田さんは家造りを始めたのです。もともと電気も水道もない場所に建てたので、最初は「寝袋に寝て、焚き火で炊事をし、水はふもとから汲んでくる生活」だったといいますから、まさに「開拓者」という言葉にふさわしいスタートだったわけです。

そのスタートから現在の形になるまでに、大まかに5段階を経ていきます。

いっぺんに作り上げてしまうのではなく、その場に暮らしながら、ひとつずつじっくり時間をかけて、納得のいくやり方で普請していくのが仲田さんの流儀のようです。工事もときどきはプロの手を借りることもあるようですが、基本的には仲田さんの手仕事によるものだそうです。

参考までに、これまでの普請の経緯を簡単に整理しておきます。

第1段階目 最初に建てたのが、鉄骨造のプレファブ小屋です。当初、ここは住まいとアトリエを兼ねていました。2年半後に井戸を掘り、ようやく生活用水が確保できました(ただ、残念ながら飲料水には適さない水だったそうです)。

第2段階目 それまでプレファブ小屋の中にあつた台所を別棟を建てて移動しました。それが現在の台所小屋です。

第3段階目 さらに敷地の西北に溶接作業などをする作業小屋を建設。

第4段階目 作業小屋完成後にしばらくして風呂小屋が完成。それまでは近所の温泉施設を利用していたそうですが、これで、ようやく自家風呂になりました。

第5段階目 そうこうするうちに長男の安里くんが誕生し、いつまでもアトリエと住まいが一緒というわけにもいなくなり、プレファブ小屋に寄り添うように主屋を建設。

こうした経過を振り返ってみると、休みなく普請が続き、用途と機能に応じた建物が、ひとつまたひとつと増えてきたことが分かります。そして、今度は主屋の手前に作った半屋外のテラスに台所を移動しようと考えているところだそうで、すでにその工事が始



アトリエの自作の作品の前で、制作について語る仲田さん

まっていました。

建築的な視点からつくづく「面白いなあ」と思うのは、必要に迫られて用途の違う場所を作るときに、仲田さんがそれを別棟の建物＝小屋として建てていることです(5段階目だけは例外で、最初の建物にくっつけています)。そして、それぞれの建物に半屋外の軒下空間を設け、その中間領域を建物同士が気持の上で連結するための繋ぎの空間としていることです。もうひとつ付け加えると、この軒下空間が、単に庇に覆われた場所という消極的なサイズではなく、たっぷり大らかに作られているのが大きな特徴です。感覚的にいえばその軒下空間は居心地の良い「外の部屋」と呼びたいぐらいの場所で、たとえばちょっと離れた場所から台所の建物を望むと、大きな屋根に覆われた軒下空間が「おいで、おいで」と笑顔で手招きをしているように見えるのです。台所の前の軒下空間も、台所と風呂の間にある軒下空間も、実用的に大きな役割を果たしているのは一目瞭然ですが、それがこの敷地内に点在する分棟型の建物全体を心理的に結び合わせるコネクターとしての役割を果たしているあたりが、この分棟型の建物配置のいちばんの見どころかもしれません。

いま書いたことは、到着した直後に車から降りてグルリと見回し、真っ先に感じたことですが、ここからは、それぞれの建物で見たこと、感じたこと、考えたことを思い浮かぶまま「分棟式に」書きとめておきたいと思います。

最初は5段階目の主屋です。

「外は寒いので、中で話しましょう」と言って招き入れてくれた建物は、いちばん最近完成したという、主屋です。最初に建てたプレファブの建物に寄り添って建てられていますが、東南に向かって下がる斜面に迫り出すように建てられました。じつは、この建物にも半屋外のテラスがついていましたが、そのテラスが、いま、台所に变身しようとしています。入口ドアは仲田さんが鉄板をパッチワークのようにコラージュした魅力的な作品。引き違いのテラス戸は古い建具が上手に再利用されています。建物の中では薪ストーブが焚かれていて、部屋全体がストーブ暖房特有のほっこりとした懐かしい温かさに包まれていました。木の床と白い壁、簡素なテーブルと椅子、白い布で包まれたソファ、部屋の中ほどに象徴的に置かれた足踏みミシン…目障りなものもまったくない、「簡素」そして「静謐」という言葉そのままの室内です。白壁には古風なスチール製のサッシが嵌め込まれていますが、仲田さんのこうした古いモノを見る眼には終始一貫した「好み」が感じられます。ふと、壁に貼られている3枚の絵が目にとまり「これは、いつごろの作品ですか?」と訊ねますと「あ、それは子供の描いた絵です」と、返事が返ってきました。作者の安里くんはストーブの前のソファで気持ち良さそうにゴロゴロしていました。

つづいて台所です。

この台所、料理好きなら、覗いたとたん溜め息が出るかもしれ

ません。合理性や機能性を追求した今風の斬新なキッチンによそよそしく取り澄ました感じ、汚れるのを嫌がっている感じが、まったくないのです。实用一点張りのステンレス流しとやや無骨なコンロ、選び抜かれた必要最小限の調理道具、食器棚だって事務用のスチール家具です。そして、それが料理心をそそる格好のお膳立てになっています。いや、どうやら料理心ばかりではなくカメラマンの心もそそるらしく、先ほど書いた、私が眺めて感心した雑誌も表紙はこの台所の写真でした。そうそう、この台所で私が注目したのは、柱と梁の主要な構造材に丸太が使われていることでした。部屋の四隅や天井に白く塗装された丸太が見えているのが、台所全体に、柔らかく優しい印象を醸し出して、とてもいい感じでした。

台所と並んでいる風呂小屋にも触れておきます。

もちろんこの2つの建物の間にも軒下空間が挟んであります。仲田さんの話しぶりから、お風呂はちょっとした自信作らしいと感じました。薪で焚く五右衛門風呂のカマドと面倒な煙道の工事も見よう見まねで施工されたとのこと。タイルも塗装も清楚な白色でとても気持ちの良さそうなお風呂でした。

紙面の都合で作業小屋をパスして、最後は工事第1段階目の鉄骨プレファブの建物を紹介しましょう。

ここは仲田さんの仕事場で、床・壁・天井すべてを白色に仕上げた天井の高いワンルーム空間です。壁に掛けられた作品の数々、机や作業台の上や床に並べられた制作中とおぼしき作品、いずれは作品の一部になるであろう塗装された色片の数々、おびたしい画材、本、資料などが部屋中に「美しく散乱して」いました。そして、不思議だったのは、色とモノの氾濫するそのアトリエにいても、少しも騒がしい感じがしなかったことです。赤、緑、黄、紺、それぞれの色は原色に近く強烈ですが、仲田さんの配色の具合によって、色が暴れ出さないように制御されているということなのかもしれません。そして、ここに来たら、1枚1枚の絵に見入るより、このアトリエの空間全体を1つの作品として「感じる」べきなのだと思います。

ひととおり見学を終えてひと息ついたとき、仲田さんに「身体を張って、力いっぱい大工仕事をするのって、楽しいでしょう?」と話しかけますと、即座に「あ、楽しいですよ!」と嬉しそうに応え、半分照れたような笑みを浮かべました。「営巣本能」のおもむくまま、仲田さんがこの場所にどんな建物を作って、敷地全体をどのようなユートピアに育て上げていくのか、今後の変化と発展が大いに楽しみです。

なかむら・よしふみ——建築家/1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、栄道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。主な作品:三谷さんの家[1986]、REI HUT [2001]、伊丹十三記念館[2007]など。主な著書:『住宅巡礼』[新潮社/2000]、『住宅読本』[新潮社/2004]、『意中の建築 上・下』[新潮社/2005]、『Come on-a my house』[ラトルズ/2009]、『普通の住宅、普通の別荘』[TOTO出版/2010]、『建築家のすまいぶり』[エクステルッジ/2013]など。

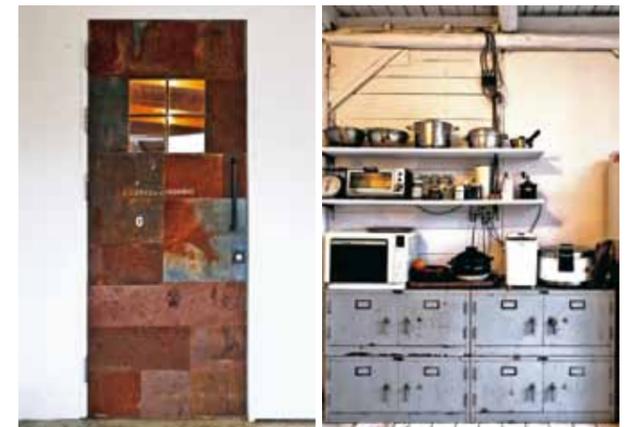
[撮影:相原功]



一番最近建てられた主屋。斜面に迫り出した高床の下部を新置き場にして、白く塗装した部分に台所を引っ越す予定



主屋の居間。床が上下二段になっていて、上の段にシンボリックにミシンが置かれている。古風なスチールサッシや古い建具が違和感なく再利用されている



左一居間入口の扉。塗装した鉄板を風化させコラージュした仲田さんの作品 | 右一台所の一隅。選び抜かれた調理道具と事務用のスチール家具が不思議と調和している



アトリエの一隅。作業台の上に積み上げられた色片やオブジェはいずれは作品の一部になるらしい

産業観光でまちおこし 「おおたオープン ファクトリー」の挑戦

最盛期には9,000軒もの工場を抱え、日本のモノづくりを担ってきた大田区。技能だけでなく、事業の継承が危ぶまれる中、生産現場を地域資源として捉え直し、モノづくり現場の再生や活性化を図るさまざまな試みが行われている。

2009年、観光まちづくりの実践の機会を欲していた首都大学東京と、地域振興に学術的視座を求めていた大田観光協会の思いが一致し「モノづくり観光研究会(現大田クリエイティブタウン研究会)」が発足。後に横浜国立大学、東京大学が参画。工場訪問調査を通して改めて工場の持つ技術の高さを実感した学生たちにより、工場をまちに開くイベント「おおたオープンファクトリー」が実現した。その後「大田クリエイティブタウン構想」にまで展開する彼らの活動は、地域連携による産業の再生、活性化への取り組みが評価され、2013年に産業観光まちづくり大賞の金賞を受賞した。

2014年11月29日に開催された第4回「おおたオープンファクトリー」の様子を伝えながら、モノづくりとまちづくりが両輪となった大田のまちおこし戦略を紹介する。

モノづくりのまち大田、動き出す 「大田クリエイティブタウン構想」とその実践

岡村 祐

Yu Okamura
首都大学東京大学院助教

モノづくりのまち大田の特質

町工場の連携による「下町ポブスレー」開発や、NHKの連続テレビ小説「梅ちゃん先生」の舞台となるなど、「モノづくりのまち」として盛り上がりを見せる東京都大田区。都内最大の工場が立地している(2011年時点で3,788件)。基盤技術と言われる切削、プレス、研磨などの機械金属加工による部品や試作品の製造が主力産業である。世界に誇るこのような技術集積だけでなく、工場同士のネットワークも大田のモノづくりの強みである。かつて、「蒲田のビルの屋上から図面を紙飛行機で飛ばせば、どんなものでもつくれる」と言われたほどで、この工場の連携によるモノづくりは、「仲間回し」や「自転車ネットワーク」と称され、地域における暮らしとも密接に結び付いてきた。まちとして人々が住み、近所で働ける環境があることも大田のまちの特徴なのである。それだけに、モノづくりの停滞・衰退が、まちの社会的・空間的環境に与える影響は大きい。実際、国内外への転出、あるいは廃業による工場跡地は、羽田

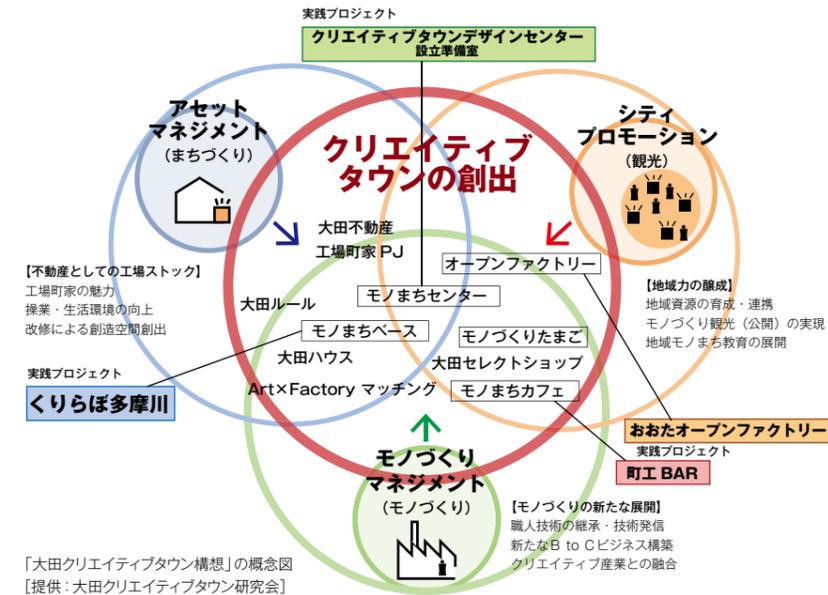
空港や都心部へのアクセスの良さから、次々と高層マンションや戸建住宅に転換され、「普通の住宅地」化が進んでいる。このような急速かつ無秩序なまちの変容は、いわゆる「住工混在」問題をより複雑なものにしている。町工場は、後からやってくる新住民への配慮のため、シャッターを閉めて操業しており、その結果、工場内部の様子がさらに見えにくくなり、地域住民にとっては、工場がまち中で操業し続けることの価値や意義を理解しづらくなるという悪循環も見えてくる。

大学と観光協会の連携による「大田クリエイティブタウン構想」

こうした大田のまちの将来構想を打ち立て、各種プロジェクトを実践してきたのが「大田クリエイティブタウン研究会」(2009年結成)である。本研究会は、一般社団法人大田観光協会と都市計画・まちづくりや観光などを専門とする大学研究室(横浜国立大学都市計画研究室/首都大学東京観光科学域)によって、構成されている。研究会では、初めに多様な資源

(製品、技術、職人、工場建築など)を浮き彫りにするため、70社程度の工場を訪問し、経営者や職人に対する聞き取り調査を行い、モノづくりの現場やまちの雰囲気を感じ取っていった。その後、まちの歴史や産業特性などの情報収集を踏まえ、モノづくりを基盤としたまちづくりの方向性や具体的なプロジェクトを示した「大田クリエイティブタウン構想」[1]を提起した。本構想は、モノづくり(産業)・まちづくり(生活やコミュニティ)・観光(誘客や発信)の各分野が抱える課題と資源を洗い出しながら、これらを統合的・創造的に考えつつ、さまざまな主体の力をつなぐことで新たな解決策を見い出そうとしている。そこで本構想では、次の3つの目標を打ち出した。

- ①モノづくりマネジメント：新たな創造産業の育成は、芸術や医療と工場との創造的マッチングを仕掛け、新規産業の開拓を行うものである。また、従来の企業間取引である「B to B (Business to Business)」に加え、消費者向けの「B to C (Business to Consumer)」も視野に入れることで、製造分野の枠を越えた新たな連携による製品開発のアイデア創出が期待される。プロジェクトとしては、新たな販路開拓や製品開発を期待する「大田セレクトショップ」や「Art×Factory マッチング」、モノづくり主体やクリエイターなどの交流の場づくり「モノまちカフェ」を提案している。
- ②シティプロモーション：モノづくりの裾野の拡大は、モノづくりの環境や歴史・文化を重要な地域資源と捉え、従来産業の近くにいなかった消費者や生活者がモノづくりのまちへ理解を高めることを目指す。モノづくりを消費者に近付けるためにカプセルトイを利用した「モノづくりたまご」や工場一斉公開プログラムである「おおたオープンファクトリー(略称：OOF)」が提案され、実現している。
- ③アセットマネジメント：魅力ある創造空間の再生は、操業中の工場や周辺空間の質を高め、空き工場の創造的利用を通して現役の職人の意欲を高め、また新たな担い手も引き付けられるような、魅力あるモノづくりのまちの形成を考え



るものである。工場を魅力ある不動産ストックとして見直しながら、創造の場として発掘・再生する「大田不動産」、新しい建築産業を大田の技術で生み出す「大田ハウス」などが含まれる。モノづくりのまち活動の拠点として活用する「モノまちベース」プロジェクトとして、「くららぼ多摩川」が実現している。そして、このような取り組みを円滑に実現するには、受け皿となる組織が必要であり、公(行政やNPO)×民(地域や企業)×学(大学や専門家)、それぞれの役割や特長を持ち寄りながら、創造的なまちづくりを展開できる「クリエイティブタウンデザインセンター(仮)」の設立を検討している。

「おおたオープンファクトリー」の実践

「大田クリエイティブタウン構想」のリーディングプロジェクトが、2012年2月に始まった「おおたオープンファクトリー」である。オープンファクトリーとは、ある特定のエリアにおいて、期間限定で複数の工場を一斉公開し、見学・体験プログラムやツアーを提供し、モノづくりおよびまちを地域内外にPRするイベントである。これまで、大田の中でも特に町工場が集積している下丸子駅・武蔵新田駅周辺エリア(東急多摩川線)を対象に、前述の研究会と地元工業会の工和会協同組合が実行委員会を組織し、企画・運営を

担ってきた。学生が参加工場の勧誘や各種企画提案・実施に深くかかわってきたことが、特徴として挙げられる。具体的には、①工場一斉公開では、普段は入れない工場内部での工作機械への接近や経営者、職人との触れ合いが最大の魅力である。②モノづくりにかかわる各種プログラムには、職人によるトークショー、製品展示を始め、とりわけ人気なのが「モノづくりたまご」である。学生のデザイン力と工場の技術の連携によるオリジナル製品をカプセルに詰め、販売している。③拠点施設としては、駅の旧キオスクを「インフォボックス」、工和会協同組合の事務所を「モノ・ワザ ラウンジ」として、総合案内所や各種プログラムの実施会場に活用している。また「おおたオープンファクトリー」をきっかけにオープンした創造的まちづくり拠点「くららぼ多摩川」は、カフェやワークショップなどの会場として利用している。2014年11月29日に開催された第4回では、「技の縁、ひろがる。」をテーマに新たな取り組みを試みた。①これまでの下丸子駅・武蔵新田駅周辺エリアに加え、大田区内の本羽田、東糀谷にある2つの工場アパート(多数の工場が入居する施設)を対象とした。②公開審査のコンペ形式により「モノづくりたまご」のアイデアを募集し、地元の専門学校を始め60名以上の学生から提案が

あった。また、区役所、鉄道・バス事業者、商店街など、さまざまな企業・団体の協力を得ることができた。③モノづくりの集積や連携を重視し、複数工程を経て製品(フライパン)を完成させる「仲間回しラリー」、加工技術を学びながら工場を巡る「職人の技ラリー」、参加企業の紹介冊子を製本体験できるワークショップ「MY OOF BOOKづくり」など、充実したラインナップを提供した。

「おおたオープンファクトリー」の展望

「おおたオープンファクトリー」では、毎回安定した数の訪問者、各種メディアによる報道や、産業観光まちづくり大賞金賞受賞(公益社団法人日本観光振興協会主催)など、地域外から大田のモノづくりへの関心の高さを感じている。加えて、参加工場にとっては、社員教育の場、営業活動の場、企業間連携の場、地域交流の場として、地域にとっては、教育・学習の場、地域価値の再認識の場として、有効であるという声が聞かれる。このような地域内外から評価を受けて、今後、「おおたオープンファクトリー」をその名のとおりに区全域に拡げていくことや、「くららぼ多摩川」を含めた先行プロジェクトを足がかりに、「大田クリエイティブタウン構想」に描かれた各種プロジェクトを進めていく予定である。また、オープンファクトリーは、全国的にも工場集積地の活性化手法として注目を集め、各地で開催の動きが見られる。すでに開催地同士の緩やかな連携も始まり、日本のモノづくりを世界にPRする手法として、オープンファクトリーが活用される日もそう遠くないと感じる。

[1] 本構想を「タウン」としたのは、大田には、特質のある小さな地域がひしめき合っており、各地域がそれぞれの創造性やアイデアを発揮してほしいという思いからである

おかわら・ゆう——首都大学東京大学院助教・博士(工学)/1978年生まれ。2004年、東京大学大学院都市工学専攻修士課程修了。2008年、同博士課程修了後、首都大学東京大学院観光科学域(自然・文化ツーリズムコース)助教。都市計画・都市デザイン・都市保全計画をベースとした観光まちづくりの教育・研究に取り組む。また、東京都大田区、豊島区、神奈川県茅ヶ崎市など実践的まちづくり活動に参画している。

まちづくり活動拠点 「くりらぼ多摩川」の取り組み

野原 卓

Taku Nohara
横浜国立大学大学院准教授

創造製作所「くりらぼ多摩川」

「くりらぼ多摩川(正式名称:クリエイティブタウンラボ多摩川)」とは、大田区矢口の工場長屋内にある、公(行政・観光協会)×民(工場・地域住民)×学(大学)協働で運営している創造活動拠点のことである。「モノづくりのまちづくり」の展開を目的とした「大田クリエイティブタウン研究会」を中心に、町工場の職人や社長、区民まちあるきガイドを育成している「大田・品川まちめぐりガイドの会」、地域の歴史を大切に「六郷用水の会」、学校教育やまちづくりの経験豊富なNPOなどをパートナーとして、それぞれが企画を担当しながら活動・プログラムを展開している。

かつては、小さな町工場が多数建ち並び、まちじゅうから機械油が放つモノづくりの匂いと、マシンの心地良いリズム音があふれ出していた大田区。現在、ピークの半数以下に減りつつあるとはいえ、今でも、町工場は集積し続けている。世界的なブランド製品のタグを刻印する企業や、医学と連携して人工心臓の開発に携わる先端企業などが立地しているにもかかわらず、新たに住もう人たちに気付かれずに、工場は音が漏れないよう周辺に配慮するという、いわゆる「住工混在」問題は続いている。一方で、近年、「創造都市」と呼ばれる、文化芸術やデザインの力を用いた新たなまちづくりの手法が国内外で注目されている。特にモノづくりを生活に近付けるという意味では、「ファブラボ」[1]や「ファブカフェ」といった施設に期待が寄せられているが、大田区では、既存の産業を担う町工場と連携することで、これまでとは異なる創造都市が育

成される可能性も高い。さらに、建築ストックとして見ても魅力的な工場空間が多く、我々が「工場町家」と呼ぶ、1階が生産の場で、2階以上が住まいとなっている町工場建築もそこかしこに見られる。日に日に町工場が失われつつある中で、無秩序に広がる住宅開発地としてではなく、リノベーションによって、地域住民には、モノづくりを身近に感じられる場、そして、モノづくり関係者やクリエイターなどにとっては、「職住近接」で活用できる新たな拠点を挿入することで、新たな住工共生の関係性が生まれるかもしれない。そんな「モノづくりのまち」を展開する創造製作所として、「くりらぼ多摩川」が設置された。

町工場の空気を受け継ぐリノベーション

実は、「くりらぼ多摩川」も、数年前まで町工場として活躍していた空間である。小さな町工場が集積する「工場長屋」の一角が空いているという情報を、同じくこの長屋に入居している町工場の職人から頂いて、この空間を発見した。面積にして、合計60m²程度の小さな場所である。通りに面した小さな旧事務所空間(くり棟)は、既存のオーニングも活かしつつ、白を基調とした明るい空間として、職人からクリエイター、地域住民が気軽に集まれる、地域に開かれた交流の場づくりを目指した。路地の奥にある旧工場空間(らぼ棟)では、ものづくりの現場が有していた空気感を大切に、下見板張りの壁面や土間の空間を継承しつつ、モノづくり体験やワークショップ、簡単な製品開発、イベントなどが可能な、価値創造の場となるように改修した。中では、町工場が使われ

ていた工具の展示や、「おおたオープンファクトリー」で製作したカプセルトイ「モノづくりたまご」製品の展示、そして、NHKの連続テレビ小説「梅ちゃん先生」のセット「安岡製作所」で用いられた機械が設置されており、小さなモノづくり観光の拠点ともなっている。

拠点として繰り広げられる活動

2013年12月にオープンして以来、「くりらぼ多摩川」では、「モノづくりのまちづくり」を進めるべく、さまざまな活動を展開している。例えば、大学生が大田の町工場と協力して行う出張モノづくり教室「くりらぼワークショップ」。「真空成形」という技術を体感すべく、家庭用の掃除機とヒーターを用いて、プラスチックのフィルムを紙粘土に押し当てて立体絵画をつくったり、プラスチック加工を行う工場と協力して、廃材プラスチックを用いてサンキャッチャーの飾りをつくったりと、子どもたちと一緒に楽しくモノづくりを体感するワークショップを開催した。そして、夜のとぼりが下りた後にも「くりらぼ多摩川」から灯りがこぼれていたら、「町工BAR」の開店の合図となる。町工場の力を結集してつくられた「下町ボブスレー」秘話や、蒲田切子と呼ばれるガラス細工とこれを撮り続ける写真家のトーク、手の切れない缶詰物語など、町工場の社長や職人などをお招きして、モノづくりにまつわる「ここでしか聞けない話」を、お酒を嗜みながら楽しめる(大田観光協会の企画・運営)。その他、学校教育やまちづくりの経験豊富なNPO法人による「こどもモノづくり塾」や、「大田・品川まちめぐりガイドの会」によるまちめぐりツアー

の拠点としてなど、さまざまに活用されている。

2014年11月29日に行われた第4回「おおたオープンファクトリー」では、地域の印刷会社と協力して、自分の好きなシートを集めてリング製本する「MY OOF BOOKづくり」や、大田でつくられた器に入ったおつまみやお酒を飲める「くりらぼCafé」、そして、町工場と音楽家がコラボレートして製作した楽器「bridge」を用いた生ライブ「くりライブwith bridge」も開催された。

モノづくりの まちづくり展開を目指して

この拠点に期待されるのは、「モノづくりのまちづくり」を実現する創造的活動全般だが、まずは、「モノづくり・まちづくり・観光」をきっかけとした活動の展開を考えている。これまで繰り広げてきた活動の中で、地域住民のモノづくりに対する関心は非常に高いことが分かり、これを伝えていくための体験やワークショップは、継続していくことが望まれる。モノづくりは産業としてだけでなく文化としても大変貴重であり、これを伝えるための取り組みや、これまで町工場が個別に受けていた工場見学を取りまとめる、見学ツアーの窓口機能なども期待される。また、モノづくりとデザインをマッチングさせ、「くりらぼ多摩川」発の新たな製品を生み出すためのクリエイターやデザイナーの活動・発信の場、あるいはクリエイターインレジデンスとしての活用なども望まれる。地元・大田発の魅力的なデザイン製品に囲まれて暮らすローカルファーストのライフスタイル、



くりらぼ多摩川(らぼ棟)内観:1階が工場で、2階が住まいとなっていた工場長屋の一部を「大田クリエイティブタウン研究会」と区内の建設会社とでリノベーションした。らぼ棟は、下見板張りの壁面や土間の空間を活かして作業場のような雰囲気に仕上がっている。ワークショップなどモノづくり体験の場などに使われている



くりらぼワークショップ:町工場と大学生による出張モノづくり体験教室。写真の回では、横浜国立大学の学生が講師になって、子どもたちがお菓子工場やロボット工場などを模型でつくった【提供:大田クリエイティブタウン研究会】



町工BAR:月に1回程度、「くりらぼ多摩川」で開催されている講演・交流会。夜、地元の酒店オリジナルのお酒を飲みながらモノづくりの話を楽しめる【提供:大田クリエイティブタウン研究会】

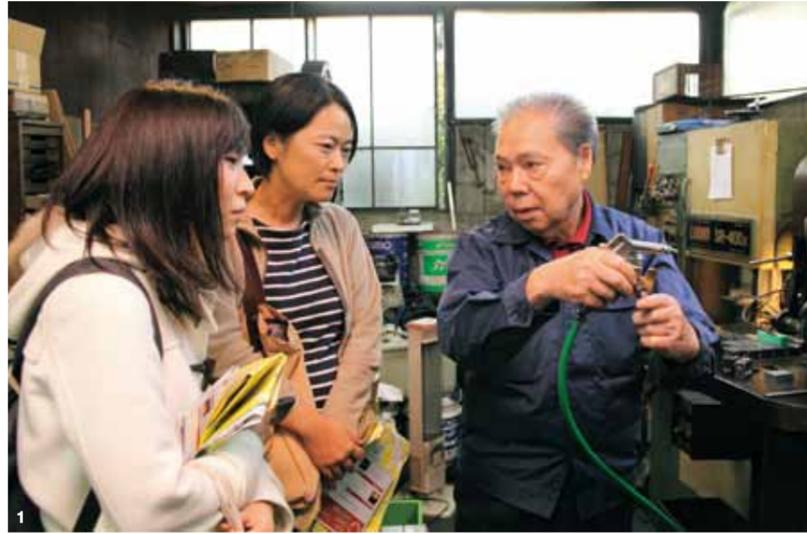
そんな大田に人々が集まってくる…、というような広がりを目指している。さらには、会議室や商談室を持たない町工場のための共用会議室として、職人や地域住民、クリエイティブワーカーが夜な夜な集まるカフェ・BARなどの交流の場としての活用、あるいは、「モノづくりのまちづくり」情報が集まるブックカフェ、そして、MAPや通信、SNSなどを駆使した情報発信の場なども期待される。先日の第4回「おおたオープンファクトリー」に合わせて、大学生がまとめた「くりらぼ通信」も、その一環である。

現在は、活動実施日しか稼働できない状況だが、将来的には、「とりあえずここに行けば、モノづくりのまちづくりに会える」という常設の場となることが望まれる。同時に、このような小さなモノづくり活動拠点が、大田区の他地域にもどんどん増えていくことが期待される。

[1] 2002年にスタートしたデジタルからアナログまでの多様な工作機械を備えた、実験的な市民工場のネットワーク。マサチューセッツ工科大学のニール・ガーシェンフェルド教授が著書「ものづくり革命 パーソナル・ファブリケーションの夜明け」でファブラボを紹介して以来、その考え方が急速に世界に広がった

のはら・たく——都市デザイナー・横浜国立大学大学院准教授/1975年生まれ。2000年、東京大学大学院都市工学専攻修了。設計事務所勤務の後、東京大学助教を経て現職。都市デザイン・まちづくり・空間計画を専門として研究を進めながら、岩手県洋野町、福島県喜多方市、岐阜県高山市、宮城県石巻市などにおいて、地域まちづくり・地域環境デザインの実践活動を行っている。

第4回「おおたオープンファクトリー」の様子



- 1 工場見学：「くりらぼ多摩川」などが並ぶ、工場長屋の一角にある三保金型製作所は、旋盤加工、フライス加工、樹脂加工などの工場。職人が機械の使い方や作業工程を丁寧に説明してくれる(マップ▲16)
- 2 新田神社境内に設けられた大田観光情報コーナー
- 3 「おおたオープンファクトリー」のロゴマーク：人・町工場・工具・工業製品を、大田の工業の特徴である「仲間回し」と大田の「O」を連想させる円形でまとめている[提供：大田クリエイティブタウン研究会]
- 4 若い女性や子どもたちで賑わったイベント拠点：写真左の「くりらぼ多摩川」では、イベントの全容をパネル展示した他、参加工場の情報が書かれたシートをお客さんを選んで集めてもらい、それを束ねてブックレットにするリング製本体験も実施した
- 5 ボランティアスタッフの皆さん：下丸子駅と武蔵新田駅改札間の総合案内所「インフォボックス」で、イベント案内やマップの配布などを行った
- 6 特設カフェ：「くりらぼ多摩川」では、当日限りのカフェもオープン。器・食べ物・飲み物がすべて大田区産の「大田セット」などを提供した
- 7 「モノ・ワザ ラウンジ」の展示品：工和会協同組合事務局・工和会館がイベント本部となった。珍しい製品が並び、興味深げに手を触れる子どもたち[写真：編集室]





8



9



10

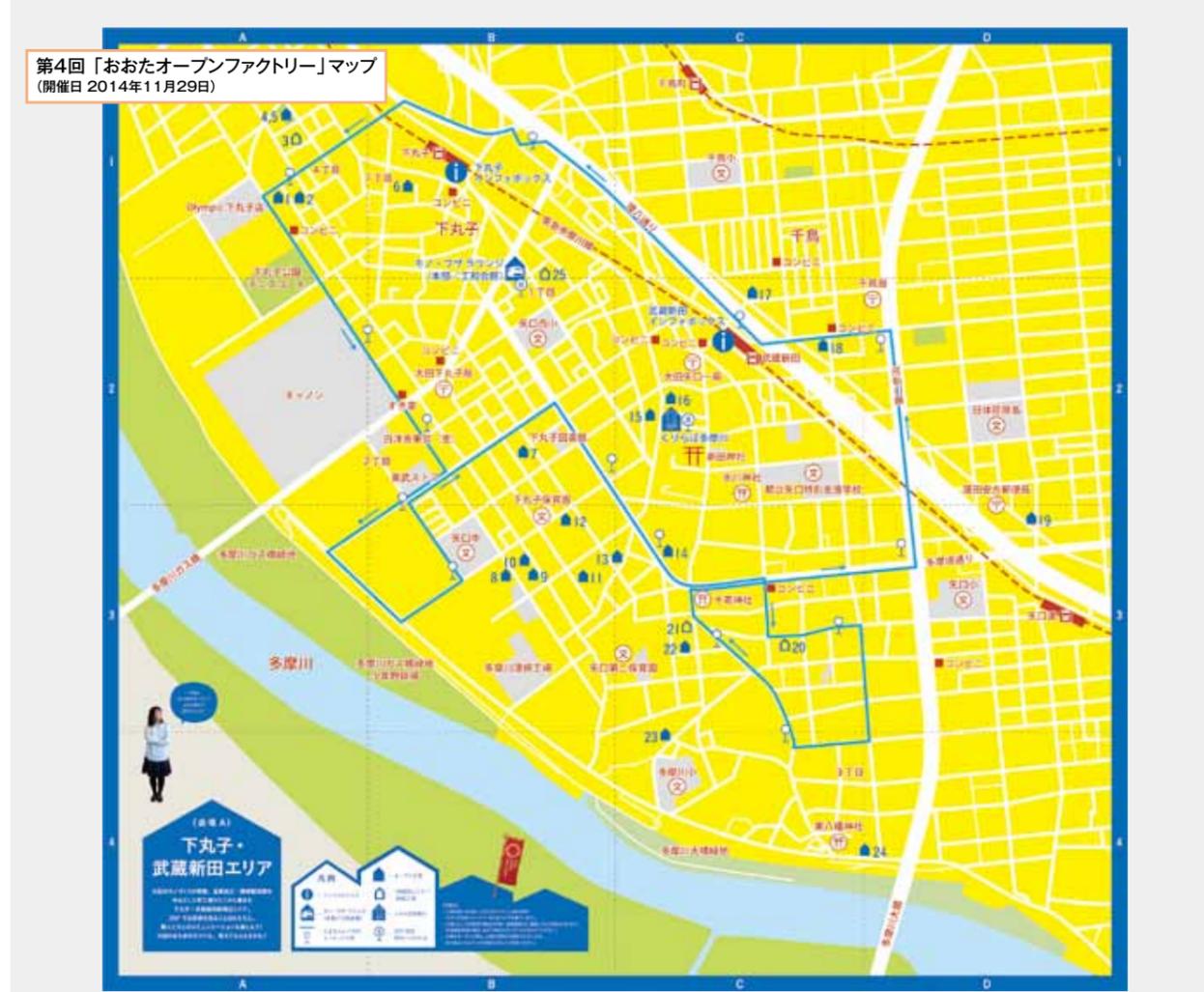
8 職人の話が楽しめる工場巡り：子ども連れの家族や学生など若い世代が多く見られた
 9 「仲間回しラリー」体験によるフライパンづくり：へら絞り加工で板状の金属からフライパン本体をつくる(マップ▶25)
 10 完成したフライパン
 11 職人の技ラリー：工場を巡り、スタンプを集めると缶バッジがもらえる
 12 切削加工のプラスチック製品：「職人の技ラリー」のスタンプの柄は、この技法で作られている(マップ▶20)
 [写真9・11・12：編集室]
 13 モノづくりたまご：メイドイン大田の製品が入ったカプセルトイ
 14 「おたオープンファクトリー」の旗が飾られた武蔵新田商店街



11



12



第4回「おたオープンファクトリー」マップ
 (開催日 2014年11月29日)

- オープンファクトリー(見学できる工場)一覧 ※△は、仲間回しラリー(フライパンづくり)体験工房
- | | | | |
|-----------------------------|---------------------------------|--|--|
| ▲1 (有)ウェディア 業種：ウエアプリント | ▲10 (有)伊藤精機 業種：切削加工 | ▲19 (株)アイエヌジー 業種：金属部品加工 | |
| ▲2 プレジジョンファクトリー(株) 業種：金属切削 | ▲11 (有)木村製作所 業種：NC精密金属加工一般 | △20 シノノ産業(株) 業種：プラスチック部品製作 | |
| △3 (有)共栄溶接 業種：溶接業 | ▲12 森井電業(株) 業種：電気機器具製造業・電気工事業 | △21 (有)多摩川飯金工業所 業種：精密板金加工 | |
| ▲4 佐久間工具製作所 業種：金属加工、切削 | ▲13 新妻精機(株) 業種：一般精密部品加工 | ▲22 (株)室賀シヨロ 業種：へら絞り・スピンニング加工など | |
| ▲5 スマイルリンク(株) 業種：3Dプリンタメーカー | ▲14 (株)稲葉製作所 業種：オフィス家具・物置の製造販売 | ▲23 東京高圧工業(株) 業種：アルミニウム・亜鉛ダイカスト品の製造販売 | |
| ▲6 (有)赤塚刻印製作所 業種：手彫刻印 | ▲15 栄商金属(株) 業種：検査業、リパースエンジニアリング | ▲24 睦化工(株) 業種：プラスチック射出成形・3Dデジタルルーターソリューションサービス | |
| ▲7 富士ダイス(株) 業種：超硬工具製造販売 | ▲16 ホワイハウス新田 業種：製造、コーディネーターなど | △25 (株)北嶋製作所 業種：へら絞り加工 | |
| ▲8 光写真印刷(株) 業種：総合印刷 | ▲17 (株)伊和起ゲージ 業種：精密加工業 | ※工場見学はイベント当日のみ実施 | |
| ▲9 (有)安久工機 業種：総合機械製作 | ▲18 千蔵工業(株) 業種：自動ドア開閉装置製造販売 | | |
- ① 総合案内所(インフォボックス) 東急多摩川線 下丸子駅 多摩川駅方面出口改札脇
 東急多摩川線 武蔵新田駅 多摩川駅方面出口改札脇
- 🏠 イベント本部 モノ・ワザ ラウンジ(工和会館)
 🚶 コミュニティバス「たまちゃんバス」ルート
 🚏 コミュニティバス「たまちゃんバス」バス停
- 📍 OOF特別無料バスのりば(本羽田の「テクノ WING 大田」、東糀谷の「OTA テクノ CORE」の工場アパート見学用に運行)
 [提供:大田オープンファクトリー実行委員会]



13



14



座談会は第4回「おおたオープンファクトリー」開催の翌々日に「くりらぼ多摩川」で行われた

とは確かなので、一番大切なものをなくしてしまうと、イベント会社がやるようなイベントになり兼ねません。うまく言えないのですが、それだと違ってしまふのですよ。

川原 | そこはいつも議論になるところです。良い意味で大学がかかわる余地を残しつつ、新しい展開を模索したいですね。クリエイティブタウン構想というからには、毎年新しい人が入ってきて、何か新しいことを成し遂げるというようにしたい。それに学生時代にこうした体験をさせてもらうと、社会に出た時に必ず役立ちます。

佐山 | やはり若い人でないと思いつかないようなものはたくさんあると思います。モノづくり系の業界としては、学生さんにはずっと継続してかかわってもらいたいと思っています。第3回に来訪されて、モノづくりの会社に入りたくなったと語っていた女子大生がその後、「下町ボブスレー」^[1]で広く知られるところとなった会社に就職しました。モノづくりファンをつくるということでは、とても良い効果を生んでいると思います。

栗原 | モノづくりの裾野を広げるという意味で、今年から観光協会では、産業観光サポーターを養成する講座をスタートさせて、大田のモノづくりについて詳しく説明できる市民ガイドさんの養成も始めました。全6回の講習を通じて、「おおたオープンファクトリー」の案内役になっていただきました。

川原 | 市民ガイドさんの案内役はすごく良かったですよ。親切に案内や説明をしてくれました。こうしたサポーターに加えて、より専門性を持つモノづくりマネージャー的な存在も、必要になってきますね。

佐山 | 昔は技術に詳しいブローカーさんがいましたが、IT時代に入って、中抜きは「悪」というイメージがついてからは、そういう仕事は「悪徳商社」などと悪口を言われる(笑)。ですがニーズと工場をつなぐ「モノづくりマネージャー」は今後も必要ですよ。

川原 | 佐山さんはまさにその役割ですね!

栗原 | 工場同士をつなぐ役割は必要で、オープンファクトリーはそうしたきっかけになりそ

うです。「テクノ WING 大田」は出来てから20数年たっていて、50社ほど入っていますが、横のネットワークは当初に比べて薄くなっていました。「OTA テクノ CORE」は4年前に出来た100%民間の工場アパート、というよりは立派なマンションですが、ここも横のつながりが薄いようです。オープンファクトリー後は、工場同士のつながりが深まったと理事さんたちに喜ばれました。次回はあそこで仲間回しができるかもしれませんね。

今後のオープンファクトリーに向けて

栗原 | 私は「日本のモノづくりは大田にあり」と思っています。2020年のオリンピックは世界中の人が日本を訪れますから、「ALL 大田」を舞台に、日本の技術をアピールしたいですね。そのためにも、一番大事なことは大学、学校と提携することだと思っています。**佐山** | 工場の側ではいつも「つくりたい」という願望がありますから、今後は「モノづくりたまご」のようなプロジェクトを推し進めて、数万円するような商品までつくってみたいと思っています。大田の工場が持つ技術は本当に優れています。「世界の試作工場・大田」と世界の人に言ってもらえる力があります。目の前に国際化した羽田空港があるメリットを最大限活かしていきたいですね。

高橋 | 若い女性の方がたくさんいらしていたのを見ると、女性にも来やすいイベントなのかと思います。町工場と住民や一般消費者を橋渡しする役目を果たせると実感しています。今後は「くりらぼ多摩川」をもっと普段からクリエイターの方たちと工場がコラボレートできるよう、アイデアを出し合える場所にしたいですね。

山本 | イベント当日は工和会館で展示の説明をしていたのですが、見学に来ていた地元の方から、「ボランティアとして参加するにはどうしたらいいか」と尋ねられました。工場以外の人が高い関心を持つことで、モノづくりの水準も高まると思いました。

川原 | モノづくりに関心のある人がここを選

んで住んでくれるようになるといいですね。大田区は都心に近いですから、工場跡地にはすぐマンションが建って、工場空き家は少ないのですが、その流れに逆らって、「モノづくり」という魅力で人々を引き付けたいです。全国でオープンファクトリーを実施しているところが10か所ほどありますが、そのうちの半分は、この「おおたオープンファクトリー」を参考にしたと言ってくれています。今回も、メディアや他地域の行政関係者向けに、オープンファクトリーの仕掛けを紹介する「まるわかりツアー」を企画し、私が案内させていただきます。すでに実施されている台東区や燕市・三条市だけでなく、新たに始めたいと検討中の行政の方からも応募があり、今後も広まっていきそうです。

最初は手探りだったオープンファクトリーという手法ですが、今は大いに手応えを感じています。工場一斉公開を基本にいろいろなオプションを各地の創意工夫で展開していただけるといいなと思っています。そして、今、各地のオープンファクトリーの開催者とのネットワークが出来始めているので、新たな展開も考えてみたいですね。例えば、開催地が増えて年間を通してどこかでやっていたら、海外からの観光客や国際会議と合わせて、オープンファクトリーに参加してもらうこともできます。大田は羽田空港があるので、MICE^[2]の発想で「ものづくりの国・日本」をアピールしたいですね。大田は、その拠点にもなれるはずですよ。

[収録：2014年12月1日]

[1] 下町ボブスレープロジェクトは、ボブスレーの国産マシンの開発をし、オリンピック日本代表を応援しようというプロジェクト。イタリア代表はフェラーリ、ドイツ代表はBMWといった有名企業がソリの開発競争を行っている。大田ブランド登録企業を中心とした大田の町工場とその趣意に賛同した東京大学がランナーの設計・開発をし、共同で日本初の2人乗りリリを開発した。2014年までに1-3号機が生まれ、国内外の試合に出場しながら、改良が続いている

[2] 企業等の会議(Meeting)、企業等の行う報奨・研修旅行(インセンティブ旅行)(Incentive Travel)、国際機関・団体、学会等が行う国際会議(Convention)、展示会・見本市、イベント(Exhibition/Event)の頭文字を取った造語。多くの集客交流が見込まれるビジネスイベントなどの総称で、ビジネストラベルの一形態を指す

日本各地に広がるオープンファクトリー

石見銀山や富岡製糸場など日本の近代を支えた産業地が世界遺産登録され、また“工場萌え”という言葉が出来るほど、工場の景観を愛好する人たちが増え、操業中の工場見学の人気も高い。産業観光に訪れる人は年間7,000万人に達すると言われ、地域全体で工場を一斉公開するオープンファクトリーも新しい観光手法としてその可能性が注目されている。

■ 各地のオープンファクトリーの特徴 (首都大学東京大学院 修士2年 豊田純子 調査より)

名称	台東モノマチ	おおたオープンファクトリー	スマファ	港北 OPEN! FACTORY
開始時	2011年5月	2012年2月	2012年11月	2013年2月
開催場所	東京都台東区	東京都大田区	東京都墨田区	神奈川県横浜市港北区
開催期間と参加工場数	3日間(約150社)	1日間(約70社)	2日間(約12社)	3エリアごとに1日ずつ 合計3日間(8社)
主な産業	貴金属、宝石、履物	金属製品、生産用機械	金属製品、繊維、なめし革、毛皮	金属製品
参加企業の 主な取り扱い製品	一般消費者向け製品 (ファッション雑貨、文具、日用雑貨ショップ) ^{*1}	試作品・中間製品	中間製品	試作品・中間製品
参加企業の 主な取引形態	B to C	B to B	B to B	B to B
主な企画者・運営者	ファッションデザイン創業支援施設 マネージャー ^{*2} 、地元工場有志など	観光協会、大学、地元工業会	地元企業有志(配財プロジェクトなど)、 墨田区	港北区役所

^{*1}()内はオープンファクトリー時に活躍する産業 ^{*2}第5回以降、運営事務局から外れている

名称	尼崎ものづくり博覧会	A-ROUND	燕三条 工場の祭典	川崎北工業会 オープンファクトリー	関の工場 参観日
開始時	2013年2月	2013年5月	2013年10月	2013年11月	2014年11月
開催場所	兵庫県尼崎市	東京都台東区浅草	新潟県燕市、三条市	神奈川県川崎市高津区	岐阜県関市
開催期間と参加工場数	2日間(16社)	3日間(約100社)	4日間(約60社)	1日間(12社)	3日間(22社)
主な産業	金属製品、生産用機械	なめし革、毛皮	金属洋食器、 刃物・工具等金属器物	生産用機械、電気器具、 金属製品	刃物・工具等金属器物
参加企業の 主な取り扱い製品	中間製品	一般消費者向け製品	一般消費者向け製品	中間製品	一般消費者向け製品
参加企業の 主な取引形態	B to B	B to C / B to B	B to C / B to B	B to B	B to C / B to B
主な企画者・運営者	尼崎商工会議所	地元企業有志、 まちづくり会社(個人)など	燕市、三条市、 地元企業有志、 クリエイティブディレクターなど	地元工業会、大学、 川崎フロンターレ	関市役所、 地元企業有志、 デザイナーなど

■ 台東モノマチ

台東区南部のモノづくりにかかわる職人、加工、材料、デザイナー、問屋など200社以上が参加する、モノづくりをテーマにしたまちおこし活動。2011年から始まり、2014年11月に第6回を開催した。多い時には延べ10万人を超える人が訪れ、モノづくりを体験・見学し、下町を散歩するなどして楽しんでいる。今年から、イベントだけでなく年間を通じた活動に移行。2015年は5月22-24日に開催予定。



[提供2点とも:台東モノづくりのまちづくり協会]

■ A-ROUND

浅草のまち全域を使って行われるモノづくりのフェスティバル。靴産業の発祥地であり140年の歴史を持つ浅草には、今も住宅のすぐ隣に町工場や問屋街があり、人々の暮らしに密着している。近年は、専門学校が開校し、若手デザイナーがアトリエを構えるなど、次代を担うデザイナーが行き交うまちに変貌している。2014年は10月の3日間にわたり、モノづくりマーケット、靴や鞆などの展示、まち歩きイベントやワークショップなど、さまざまな催しが行われた。



[提供2点とも:エーラウンド実行委員会]

東京都の製造業実態と事業所数・従業者数トップの大田区

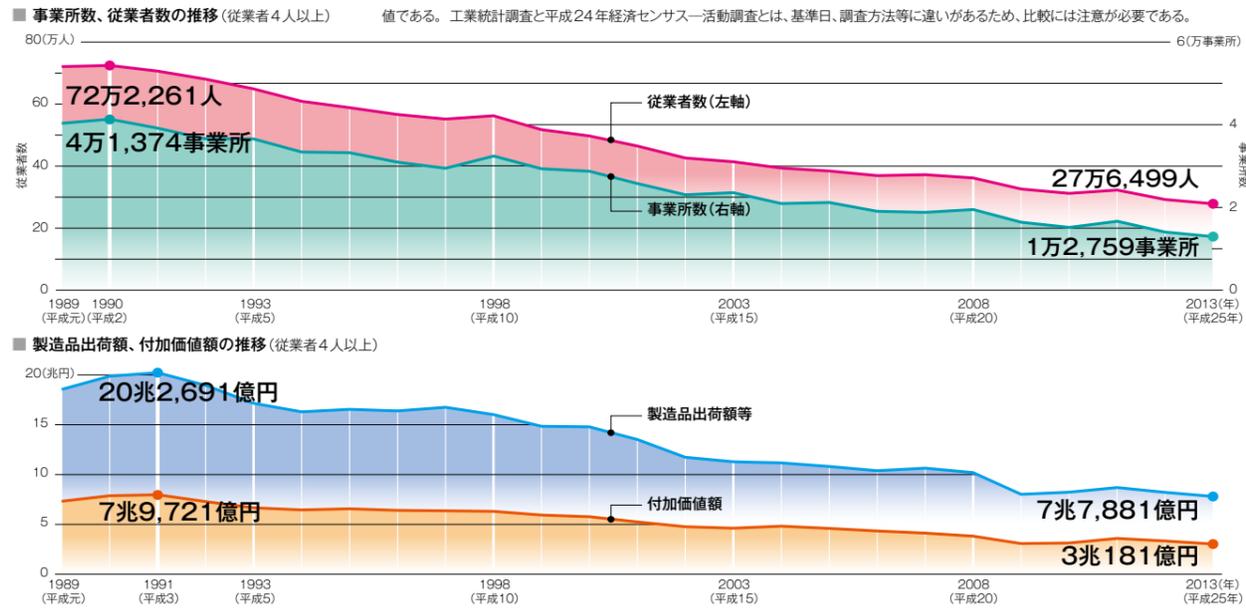
東京の製造業関連の事業所や従業者数は1990年をピークに減少が続いている。それに合わせて、製造品出荷額等や付加価値額(営業利益+人件費+減価償却費)等も、ピーク時より6割減少した。

従業者4人以上の事業所数と従業者数のトップはいずれも大田区だが、実際には、1~3人の小さな事業所が5割近い大田区では、事業所の実数はさらに多くなるとみられる。大田区の中でも大森・調布地区に比べて蒲田

地区には全体の6割近い事業所が集積している。「おおたオープンファクトリー」の舞台となった下丸子駅・武蔵新田駅周辺は、産業中別分類の機械金属系が8割を占めるなど、金属加工業に特化したエリアとなっている。

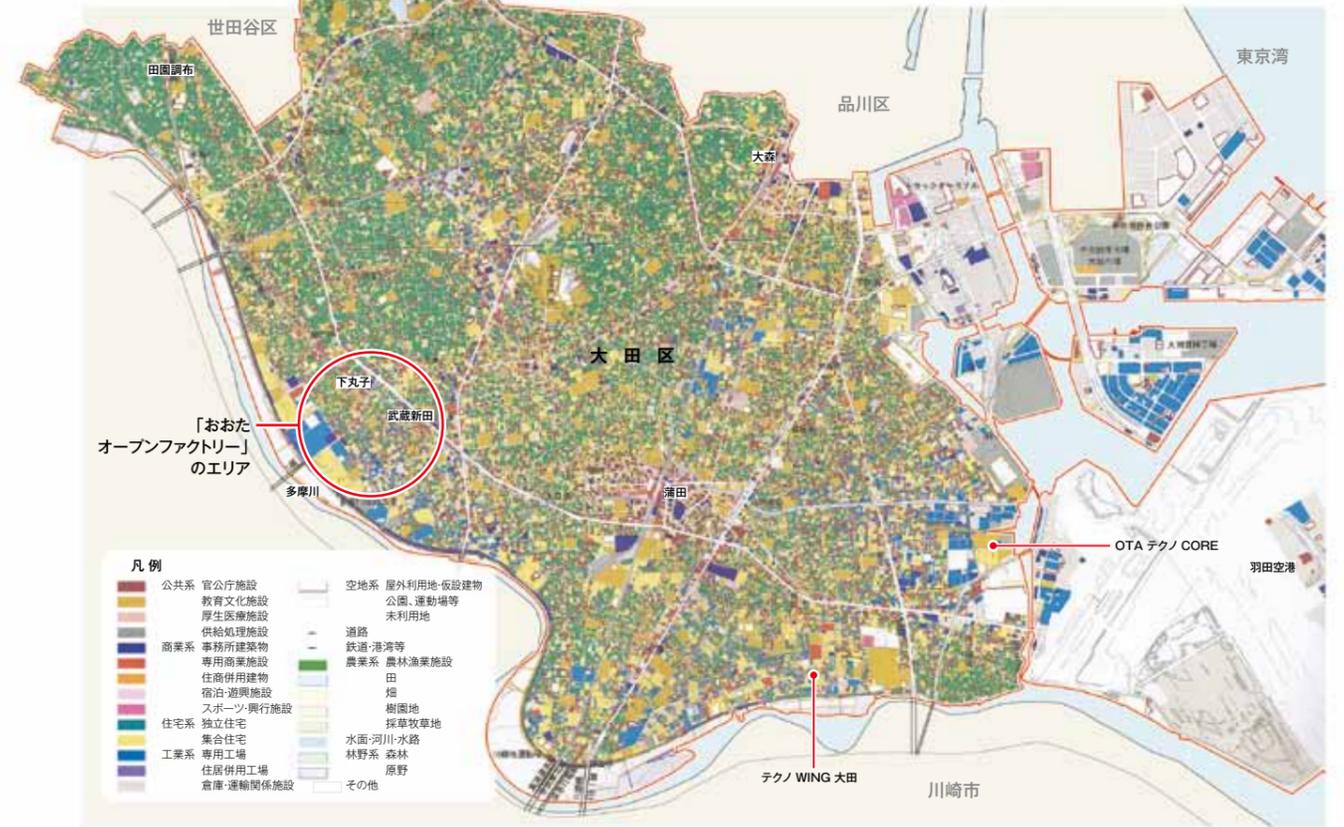
東京都の製造業実態—1

平成23年の数値は、平成24年経済センサス—活動調査の結果(工業統計相当集計結果)である。事業所数および従業者数は、平成23年以外各年12月31日現在の数値であり、平成23年は、平成24年2月1日現在の数値である。製造品出荷額等および付加価値額は、各年1年間の数値である。工業統計調査と平成24年経済センサス—活動調査とは、基準日、調査方法等に違いがあるため、比較には注意が必要である。

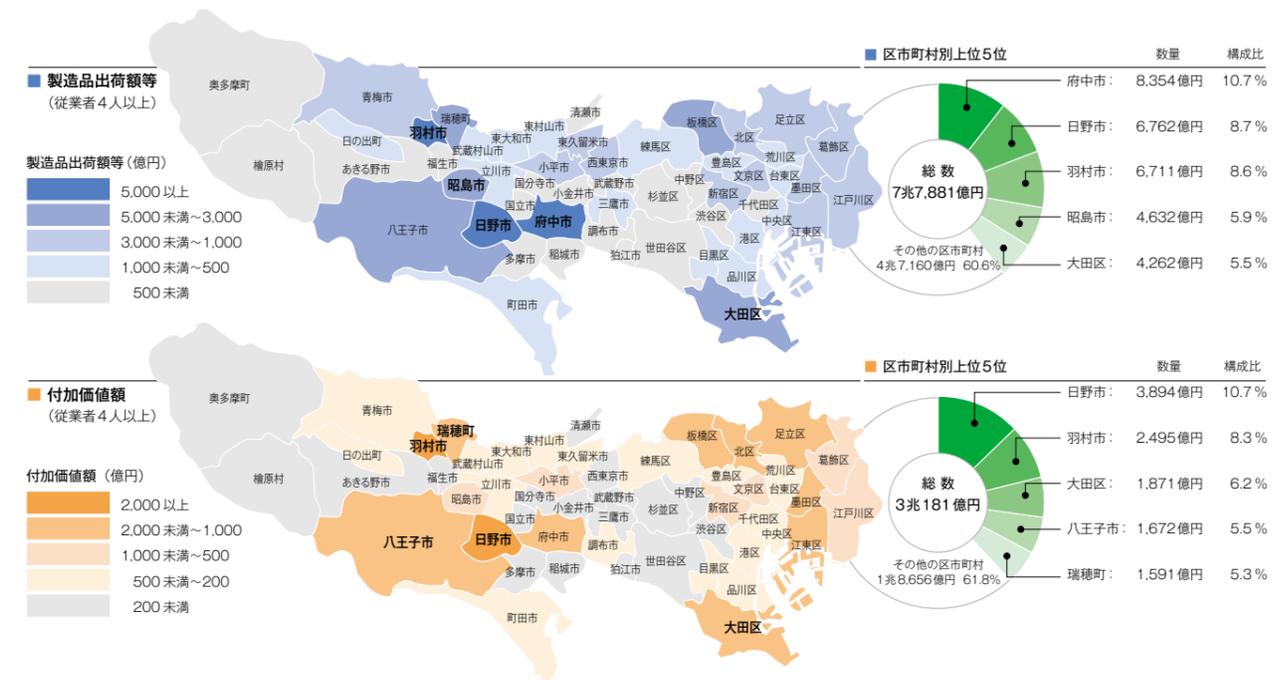
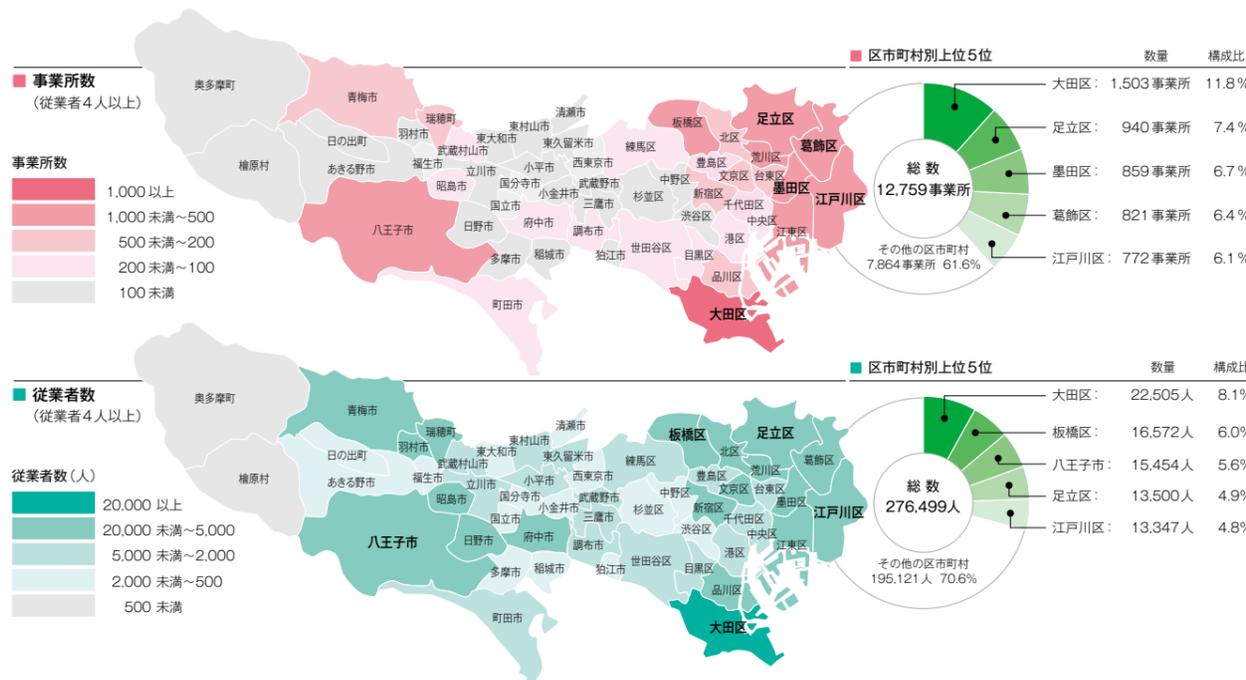


東京都土地利用現況図 (大田区部分)

平成23年度土地利用現況調査に基づき作成した「東京都土地利用現況図」より大田区を抜粋。色分けは建物用途別を示す。大田区では、羽田空港周辺と多摩川沿いに濃い青色が示す専用工場が集中し、内陸に向かって専用工場と住居併用工場が混在していく。



東京都の製造業実態—2



※東京都の製造業実態—1、2は「平成25年工業統計調査報告」のデータより編集室が作成

“煉瓦らしい煉瓦”の新しい遣い方

武井 誠
Makoto Takei

上州富岡駅は世界遺産、富岡製糸場の玄関口です。私はその駅舎に煉瓦を使うことをずっと躊躇していました。明治から残る製糸場の繭倉庫の煉瓦の圧倒的な存在感には、かなわないと思ったからです。妙義山から切り出された巨木で組まれた木骨の中に、フランス積みの煉瓦が真壁で納まっている木骨煉瓦積造。日本と西洋の建築技術の最先端の融合と、時代を経ても色あせることのない凛とした姿を前に私の不安は募るばかりでした。現代に生きる我々が煉瓦を積み上げていったとしても、煉瓦積み風の、それも製糸場のイメージを安易に引用した建物になってしまうのではないかと危惧していました。

煉瓦は世界最古のモジュール化された構造部材と言えます。例えば、古代のピラミッドのような単純な形態の建築を正確な寸法でつくる

ことが可能になったのも、煉瓦という小さな規格部材があったからです。そして、それらで出来た建造物が今なお地球上に残っているのは、他の建築素材よりも熱や湿気に強く耐候性に優れていたからであることは言うまでもありません。

日本では近代化に伴い富岡製糸場のように煉瓦建築が導入されたものの、関東大震災で多くの被害を出したことから、煉瓦を組積していく本物の煉瓦建築は姿を消していき、木造や鉄筋コンクリートに煉瓦風のタイルを張って煉瓦の表情を出すことが主流になりました。このように煉瓦は現代建築にとって扱うことが難しい材料なのです。

一歩遣い方を間違えると煉瓦のように見えたり、ノスタルジックな印象を醸し出すだけの素材になってしまいます。果たして、“煉瓦らしい煉瓦”で建築を構築することは可能なのでしょうか。

煉瓦の原料を調べていくうちに興味深いことに気がきました。煉瓦の焼き方が色と強度と吸水率といった単体の性質に影響し、同時に煉瓦1つの大きさや積み上げる壁の高さといった建築全体の形態と密接に関係するということでした。それは、まるで煉瓦の遺伝子を顕微鏡でのぞいているかのような感覚でした。

私は当初、赤い煉瓦ではなく、例えばデンマークのグルントヴィークス教会のような、もう少し明るく柔らかな肌色の表情を想像していました。一方で、煉瓦は昔から道路の舗装にも使われていたように、駅舎の壁に使うだけでなく、周辺の広場や街路の舗装ともつながっていくような遣い方をしたいとも考えていました。それは、まちの風景を仕上げる素材としても、保温性、保湿性のある煉瓦が有効だと思っていたからです。

焼き物には還元焼成と酸化焼成の2種類があり、今回の煉瓦は還元焼成でつくられてい



ます。初め、酸化焼成の黄色い煉瓦をつくってはみたものの、のっぺりとした均質な表情になってしまう気がしました。また、歩道の舗装でも使用することから透水性を確保したのですが、より汚れが付きやすいことも分かりました。吸水率が高いことが原因でした。そこで還元焼成で焼かれた吸水率の低い薄茶色の煉瓦を最終的に採用しました。汚れが目立ちにくくなった一方で、色ムラが以前より多くなったことが気になり出しました。同時に、煉瓦の中央に灰色の部分も出来てしまいます。しかし、それはフランス積みにすることで、人の目に触れない部分に灰色を隠しながら積むことが可能です。実は、煉瓦の色は不均質にした方が煉瓦積みをより自然に見せることができるらしいということをその時に知りました。煉瓦職人いわく、それは“いい加減”に積むのが一番良い具合になるのだそうです。一方、還元焼成にすることで、煉瓦の強度が増すことも重要でした。この建物は煉瓦に鉄筋を通し圧縮力をかけることで、控え壁を添えながら最大5m近くまで煉瓦壁を立ち上げています。締まった固い煉瓦が構造的にも必要でした。結果として煉瓦の吸水率は2%前後になり、凍害防止にも役立っています。煉瓦には鉄筋のための穴が2つ開けられ、それをフランス積みにすることで向きが交互に積まれた煉瓦に鉄筋が通り、編み物のようになっています。

煉瓦を組積すること、鉄筋にテンションをかけること、言ってみればローテックとハイテックを

併せ持つ上州富岡駅の構造は、鉄骨の柱とブレースに煉瓦が纏わり付くことで、地震に強い、鉄骨煉瓦積造になりました。このようにして富岡製糸場の構造の気概を現代に継承しようとしたわけですが、私はただ煉瓦を積むだけでなく、未来へどう振る舞わせるか、その遣い方が大事だと考えました。煉瓦を家の縁側のように腰掛けたり、寝そべったりする、誰もが自由に触れることのできる開かれた場にしようと思いました。それはベンチであり、ステージであり、掲示板であり、赤城おろしの北風を防ぐ防風壁です。一つひとつの煉瓦のサイズは、構造的に必要な最小限の寸法と、職人が手で運ぶことのできる最大限の重さ、そして、身体的なスケールに積み上げることのできる単位で決められています。

煉瓦は建物だけでなく橋梁やダムといった公共的な建造物にも使われてきました。柔らかさと強さを兼ね備えた仕上げ材でもあり、構造材なのです。建築の領域と土木の領域をつなぐ数少ない素材であることを確信した頃には、煉瓦に対する私の不安はすっかりなくなっていました。日本に18ある世界遺産のうち徒歩10分圏内に地方鉄道の駅がある場所は富岡が初めてだそうです。上州富岡駅の辺りに積まれた大地と建築をつなぐ一つひとつの煉瓦は、世界遺産の玄関口にふさわしい遺伝子を持った素材なのです。

上州富岡駅

1 煉瓦実験：煉瓦の目地に挟まっている平鋼ブレースの座屈拘束をするため、煉瓦に張力を入れた。事前に構造試験を行って安全性を確認している

2 酸化焼成煉瓦(左)と還元焼成煉瓦(右)：土の成分、焼き方、窯の温度、窯の中の煉瓦の置き方のほんの少しの違いによって、色が大きく変化する。明るい煉瓦にすることから、瀬戸の白を発色させる粘土を扱う愛知県蒲郡の煉瓦工場に何度も足を運んだ

3 最終色確認：舗装の煉瓦(穴なし)と壁の煉瓦(穴開き)の色目の確認。舗装の煉瓦のサイズは点字ブロックのモジュールに合っている

[写真1-3：TNA]

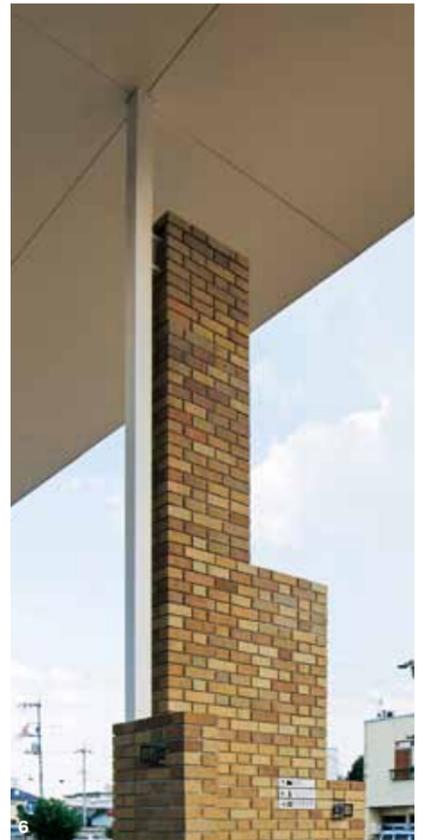
4 南面全景：地面から隆起した煉瓦に日陰や雨を遮る白い大屋根を架けた、開かれた場所。駅の立面をなくし、まちの風景そのものが駅のファサードになるようにした

5 交流スペースから見ると：利用者が駅に自然と寄り添うことのできるよう、煉瓦壁はさまざまな高さに掘り所がある。また、半屋外のスペースに耐え得る内外兼用の仕上げ材である

6 煉瓦壁ディテール：フランス積みの中に異なった積み方が浮かび上がる。煉瓦によって隠されている鉄骨のブレースの痕跡であり、この特有の煉瓦積み「富岡積み」と名付けた

[写真4-6：阿野太一]

たけい・まこと——建築家・TNA代表取締役／1974年生まれ。1997年、東京工業大学塚本由晴研究室研究生+アトリエ・ワン。1999-2004年、手塚建築研究所。2004年、鍋島千恵とTNA設立。主な作品：輪の家[2006]、カタガラスの家[2008]、森のとなり[2008]、方の家[2009]、カモ井加工紙第三機拵工場史料館[2012]、構の郭[2013]など。



TOPICS

ひとりにいい、みんなにいい。 「LIXILユニバーサルデザイン」



1 「国際福祉機器展(H.C.R.2014)」LIXIL出展ブース外観：門扉、玄関からトイレ・洗面・浴室・キッチンなど水まわり、リビング・階段・廊下などの建材、エクステリアまで、トータルに住まいのユニバーサルデザインを提案



2 「LIXILユニバーサルデザイン」のロゴマーク



3 LIXILユニバーサルデザイン方針

ス」は、従来のタンク式便器に対して、便器の奥行きをコンパクト化し、便器前のスペースや空間を広く使うことができます。また、便座の前に立つと自動で便フタが開閉する機能や、センサーが人を感知して便器内部・足元をほのかに照らす機能などのUDアイデアを形にしています。[4-9]

さらに、より多くの方が使いやすい製品を目指して、LIXILではユーザーによる検証を製品開発の過程で実施しています。例えば、入浴をサポートするアイテム「フラットサポートバー」、 「腰掛付保温フタ」は、片マヒの方、膝に疾患のある方、健常高齢者の方にご協力いただ

- 4 「シャワー・ド・バス」仕様のユニットバスルーム
- 5 「シャワー・ド・バス」シャワー噴出の様子
- 6 浴槽入浴と比較した「シャワー・ド・バス」温まりの様子
- 7 従来のタンク式便器と「サティス」とのサイズ比較(約140mmコンパクト化)
- 8 フルトート便座：便座の前に立つと自動で便フタが開閉。足腰の負担を軽減します
- 9 ほのかライト：センサーが人を感知して便器内部・足元をほのかに照らします

LIXILユニバーサルデザイン(UD)の取り組み

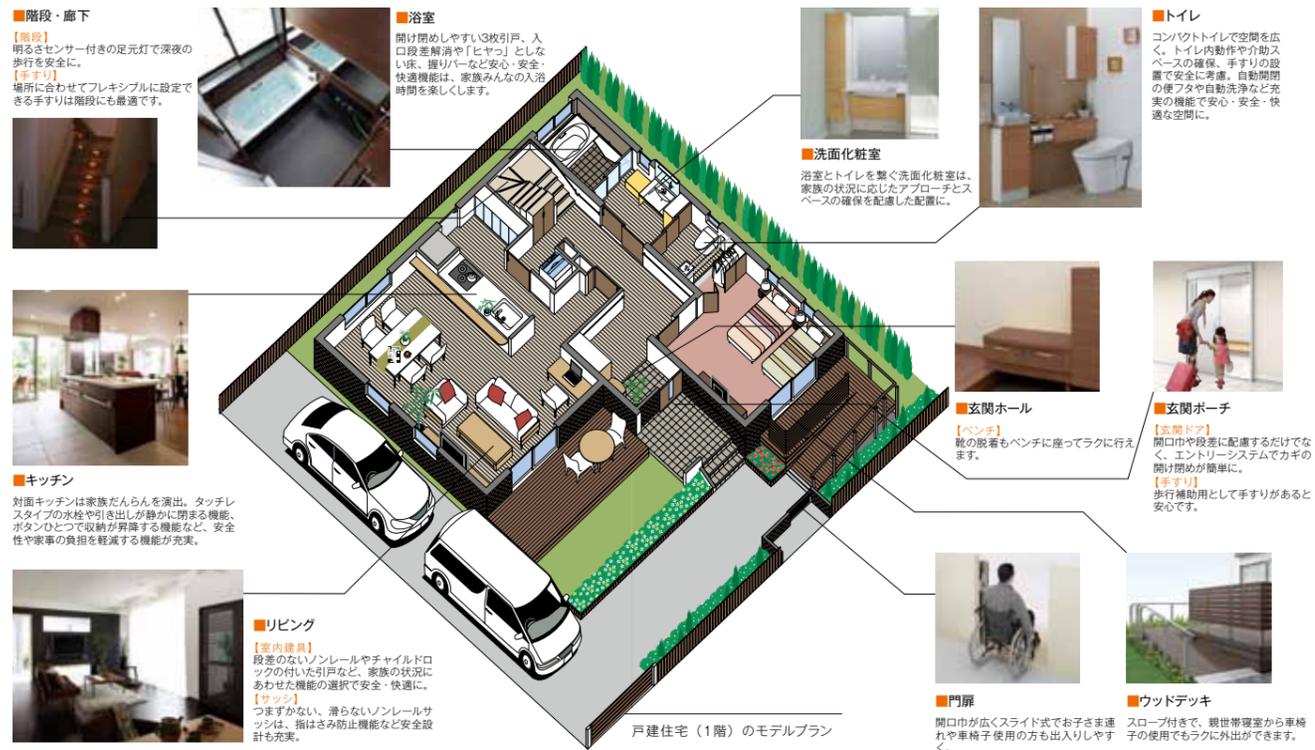
高橋邦長
Kuninaga Takahashi
(株)LIXIL 技術研究本部 生活価値研究所

はじめに
高齢社会の現在、子どもも大人も家族みんなが気持ち良く暮らしたい。さらに10年、20年先、いずれ年老いたり、けがをしたり、障がいを負ったりしても、いつまでも快適に過ごしたい、と誰もが願うものです。住まいは、家族みんなが使うもの。さまざまな身体状況への対応が求められます。
LIXILでは、「LIXILユニバーサルデザイン方針」を策定し、子どもからお年寄りまでの一人ひとりが豊かで快適な住生活を送るために、さまざまな視点からUDアイデアを取り入れ、また、「わかりやすい」、「使いやすい」、「安全が安心

に」、「愛着がわく」、製品・サービスの提供と、一人ひとりの変化に応じた空間づくりを目指しています。[2・3]
住まいのユニバーサルデザイン
住まいにおけるユニバーサルデザインでは、UDアイデアを盛り込んだ製品に加え、製品の取り付け位置や組み合わせ、空間の広さやスペースの取り方、動線などの計画を通して、暮らしそのものがユニバーサルデザインであることが大切だと考えています。LIXILは、門扉、玄関からトイレ・洗面・浴室・キッチンなどの水まわり、リビング・階段・廊下などの建材、エクステリアまで、住

まい全体について、トータルでユニバーサルデザインを考慮した空間を提案しています。[10]
ユニバーサルデザイン視点での製品の研究・開発
LIXILでは、ユニバーサルデザインの視点に立った製品の研究・開発を進めています。例えば、全身シャワー「シャワー・ド・バス」は、10カ所のノズルから細かい霧状のお湯を噴出。柔らかいシャワーが全身を包み込むように身体を温めます。忙しくて時間のない時や浴槽入浴に介助が必要な方にもおすすめです。また、タンクレストイレ「サティ





10 「住まいのユニバーサルデザイン」モデルプランと提案製品例

き、検証を繰り返して製品化に至りましたが、その際、次の3点にこだわりました。

①お湯を使うなど、実際の入浴に近いテスト環境とすること。②脱衣から洗体、入浴、退室まで、一連の動作を見ること。③ユーザーの動作に合わせてその場で試作をつくり変えていくこと。こうした検証の結果から生まれた、「一連の入浴動作をサポートする」という考え方を他の製品にも展開し、LIXILのシステムバスルームに「サポートバック」として同様の機能を盛り込んでいます。[11-14]

ユニバーサルデザイン空間への取り組み

ユニバーサルデザインの空間を考える取り組みのひとつとして、多様な検証ができる空間を設置し、提案や研究に活用しています。

1. ユニバーサルデザイン検証スペース

ユニバーサルデザイン検証スペースは、使用者の身体状況や建築・空間条件などを踏まえ、さまざまなサイズの空間や製品の設置位置を確認することができるスペースで、シミュレーションを通して使いやすさの確認や分析を行い、提案につなげています。また、そこで得

- 11 実際にお湯を使った入浴検証の様子
- 12 立ち座り検証の様子
- 13 動線をつなぐ「フラットサポートバー」
- 14 座って入浴できる「腰掛付保温フタ」



られた気づきやお客さまからのご意見・ご要望を製品の研究・開発に反映するよう取り組んでいます。[15]

2. 空間サイズの検証

検証スペースでは、さまざまな広さの空間を構成することができ、トイレ検証スペースでは、住宅、高齢者施設(居室・共用部)、公共トイレ(多目的トイレ・一般ブース)などの使い勝手をさまざまなシチュエーションで想定し、確認することができます。また、天井部に設置したカメラで空間の様子をモニタリングすることもでき、動作や動線を確認することで、状況把握を行い、プランに反映します。[16]

3. 製品設置位置や高さの検証

製品の設置位置を可変させながら条件・状況に応じた使いやすい設置位置を確認できます。製品単体の他に、製品と製品を組み合わせた時の状況や壁面と製品との距離感なども確かめることができます。

また、洗面検証スペースでは、洗面カウンターを昇降させることで、使用者の体格や身体状況、使用状況にあった高さを確認できます。[17・18]

お客さまとのコミュニケーション

LIXILは、ユニバーサルデザインを進め

る上で、お客さまとのコミュニケーションも大切にしたいと考えています。2001年から毎年出展している、国内最大の福祉展示会「国際福祉機器展」では、ユニバーサルデザインの取り組みの紹介、住宅・高齢者施設・公共トイレの空間・製品の展示などを行っています。また、お客さまとの意見交換を通じて得られたご要望を、研究や製品開発に活かしています。[1・19-21]

最後に

今回紹介したLIXILユニバーサルデザインの取り組み、住まいのユニバーサルデザイン空間計画・提案製品などの情報を、カタログ『LIXILユニバーサルデザイン(コンセプトブック)』、『住まいのUDガイドブック』として発行しておりますので、合わせてご活用ください。[22]



22 『LIXILユニバーサルデザイン(コンセプトブック)』(左)、『住まいのUDガイドブック』(右)



15 トイレ検証スペース
16 空間の広さ・レイアウト確認の様子
17 製品設置位置の確認の様子
18 実際の検証の様子

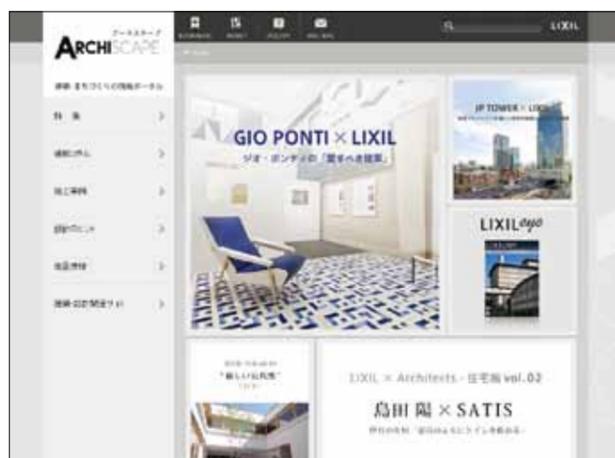


19-21 「国際福祉機器展(H.C.R.2014)」LIXIL出展ブースの様子

建築・まちづくりの情報ポータルサイト「アーキスケープ」のご案内

<http://archiscape.lixil.co.jp/>

LIXILのWEBサイト「アーキスケープ」のご案内です。「アーキスケープ」は建築やまちづくりに携わる専門家の方々のための情報ポータルサイトで、特集・連載コラム・施工事例などを紹介しています。特集では、最新の建築事例や話題のプロジェクトを取り上げ、その背景を詳しく解説するとともに、そこで使われた技術・製品をご紹介します。また連載コラムでは、LIXIL商品の施工事例をご紹介します。一方、興味のあるカテゴリーを登録することによって、最適な記事を表示するコンシェルジュ機能や、関連記事をすぐに参照できるレコメンドも搭載しています。LIXILの企業情報誌「LIXIL eye」のバックナンバーはすべてPDFデータでご覧いただけます。LIXIL独自の豊富な情報をタイムリーにお届けするWEBサイト「アーキスケープ」を、ぜひご利用ください。
<http://archiscape.lixil.co.jp/>



施工事例 index

<http://archiscape.lixil.co.jp/pickup/>

北國銀行新本店ビル

金沢のランドマークとして注目を集めている北國銀行新本店ビル。1階は北國銀行本店営業部と金沢中央支店、3階は各種ホール、4階は食堂や研修施設、上層階は会議室やオフィスで構成されています。外観は、純白の格子を基調とし、アクセントには明るい茶色のテラコッタルーバー。金沢の風土と「ものづくり」の大切さを反映し、駅西口の存在感の向上にも貢献しています。



■建築概要■

所在地：石川県金沢市広岡2-12-6 | 規模：地上11階、塔屋1階(ただし、11階は機械室のみ) | 構造：S造、一部SRC造・基礎免震 | 工期：2013.6-2014.10 | 設計：三菱地所設計 | 施工：清水建設

湯崎浜広場

湯崎浜広場の漁業振興施設「フィッシャーマンズワーフ白浜」は、漁業と観光の振興と地域の活性化を目的とした施設です。海の近くの通路には、利用者が過って転落しないよう、アルミの防護柵PNIが設置されています。縦の格子はソーントンカラーで、波をイメージさせるデザインが施されています。



■建築概要■

所在地：和歌山県西牟婁郡白浜町34 | 施主：白浜町

大宮JPビルディング

LED照明や壁面緑化など環境に配慮し、建築物の環境性能を総合的に評価する「CASBEE さいたま」にて、最高位のSランクをさいたま市大宮区で初めて取得した建物です。トイレ・洗面は節水型の最新機器を使用。小便器は電源不要の自己発電方式を採用しています。その他、特注仕様のアンダーカウンターを設置し、より多くの人々が利用できるように設計されています。



■建築概要■

所在地：埼玉県さいたま市大宮区桜木町1-11-20 | 規模：地上20階 | 構造：S造 | 工期：2013.4-2014.8 | 設計監理：日本郵政(実施設計・工事監理協力：山下設計) | 施工：戸田建設

多世代交流館いきいき

高齢者ボランティア活動室などを備えたこの施設は、世代間交流の促進と「生きがいづくり」を目的に開設。建物のアプローチ部分の階段、スロープには、ユニバーサルデザインのサポートレールUDを設置し、来訪者が安全に利用できるよう配慮されています。



■建築概要■

所在地：愛知県尾張旭市稲葉町1-41-1 | 施主：尾張旭市役所

LIXILからのご案内

2014年度グッドデザイン賞を受賞



左上から右へシステムキッチン「サンヴァリエ (アレスタ)」 | エアクリーニングウォール「エコカラットプラス」 | 窓枠「カーテンレール付窓枠」 | 室内建具「グランドライン ラフィス」

本年度は、「お手入れ、収納・作業性、デザイン」というキッチン3大価値を進化させたシステムキッチン「サンヴァリエ (アレスタ)」、季節を問わず快適な湿度に調湿し、気になるニオイや有害な物質も低減、さらに清掃性も向上したエアクリーニングウォール「エコカラットプラス」、業界で初めて窓枠とカーテンレールを一体化した「カーテンレール付窓枠」、建具枠を最小限にし、シンプルで上質なデザインを追求した室内建具「グランドライン ラフィス」が2014年度グッドデザイン賞を受賞しました。



GOOD DESIGN
AWARD 2014

LIXIL出版 新刊案内

<http://www1.lixil.co.jp/publish/>



LIXIL BOOKLET「科学開講! 京大コレクションにみる教育事始」
執筆：永平幸雄、田中智子(ほか)
定価：1,800円 [税別、好評発売中]



現代建築家コンセプトシリーズ19
「藤村龍至 | プロトタイプビニング—模型とつづやき」
執筆：藤村龍至、五十嵐太郎、ケン・タダシ・オオシマ
定価：1,800円 [税別、好評発売中]



「伊東豊雄 子ども建築塾」
執筆：伊東豊雄、村松伸、太田浩史、田口純子
対談：鷲田清一、為末大
定価：2,300円 [税別、好評発売中]

上—LIXIL BOOKLET「科学開講! 京大コレクションにみる教育事始」 | 中—現代建築家コンセプトシリーズ19「藤村龍至 | プロトタイプビニング—模型とつづやき」 | 下—「伊東豊雄 子ども建築塾」

10+1 WEB SITE <http://10plus1.jp/>
建築・都市を巡るサイトです。建築写真アーカイブ、建築関連書籍、イベントの紹介、特集などを毎月更新しています。

10+1 DATABASE <http://db.10plus1.jp/>
雑誌「10+1」の全記事について検索できます。

ギャラリー+イベント

<http://www1.lixil.co.jp/culture/>

LIXILギャラリー | 東京

巡回企画展

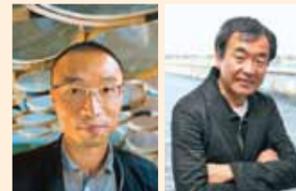
科学開講! 京大コレクションにみる教育事始展
会期：3月5日[木]-5月23日[土]
幕末から明治における科学教育の黎明期を、京都大学の前身である旧制第三高等学校で使用された実験道具や標本などのコレクションを通してひも解きます。



ウィムズハースト静電高圧発生装置
[1908年 | 所蔵：京都大学総合博物館 | 撮影：益永研司]

建築・美術展

「クリエイションの未来展—第3回隈研吾監修」
岡博大展—ぎんざ遊映坐
会期：3月12日[木]-5月23日[土]
銀座に3か月限定でモバイルミニシアターを開館。映画作家・岡博大氏が、建築家・隈研吾氏らの創作の智慧に迫るドキュメンタリーを上映します。



左—岡博大 | 右—隈研吾

LIXILギャラリー | 大阪

巡回企画展

金沢の町屋
—活きている家作職人の技展
会期：3月6日[金]-5月19日[火]
建築における伝統技術がいかに保存、継承されているのか。その実例を金沢の町屋から探ります。



「左官の鏡」
[所蔵：中村康 | 撮影：尾鷲陽介]

INAXライブミュージアム

土・水・火、ものづくりと生活文化をつなぐ企画展

雨と生きる住まい—環境を調節する日本の知恵
会期：開催中、3月22日[日]まで
会場：「土・どろんご館」企画展示室
入館料：共通入館料で企画展も観覧可
降水量の多い日本列島では、人々は雨を意識し、うまく付き合いながら楽しむ術を体得してきました。絵画や言葉に見られる雨の表現を通し、日本人の雨への慈しみを見ていくと共に、雨と上手に付き合ってきた日本家屋の知恵と工夫を考察します。



[LIXILギャラリー | 東京]

所在地：東京都中央区京橋3-6-18
東京建物京橋ビル LIXIL: GINZA 2階
Tel: 03-5250-6530
開館時間：10:00-18:00
休館日：水曜日

[LIXILギャラリー | 大阪]

所在地：大阪府大阪市北区大深町4-20
グランフロント大阪南館タワーA 12階
Tel: 06-6733-1790
開館時間：10:00-17:00
休館日：水曜日

[INAXライブミュージアム]

所在地：愛知県常滑市奥栄町1-130
Tel: 0569-34-8282
開館時間：10:00-17:00
(入館は16:30まで)
休館日：第3水曜日(祝日の場合は翌日)
共通入館料：一般：600円、
高・大学生：400円、
小・中学生：200円

の間の路地的空間を歩くことを楽しみに出かけた。そして、箱の間は通り抜ける小道であるというよりも、各住戸の専用庭としてつくられ、それぞれの住まい手に任されている空間だと初めて知った。六つの箱は巧みな距離感で配置され、その配置関係で変化のある庭空間がつくられている。森山さんの庭のトネリコは大木になり、柿やみかんがたわわに実をつけて鳥がやってきていた。少しぶつさらばうに植木鉢を置いた庭や白い壁沿いにカラフルな椅子を並べた細長い庭、テーブルと椅子を出してお茶でも飲むような庭の配置が多様さをつくっている。

住戸の内部に入ると、それぞれ丁寧につくられていてひとつひとつみんな違う。隣接する箱との関係で階高や開口が決められ、大ガラス面から桜やトネリコ

の枝が見えて気持ちが良い。それぞれの住み手の中で自分らしい生活をしている様子を拝見させてもらった。森山さんは21世紀美術館の上に突き出している箱がこの家だと笑う。美術館と住宅という規模も機能も違う空間になる形式があり、それは緑豊かで親密な集合住宅的空間になったり散策できる美術館空間になったりする。

多木浩二さんに「多様性と単純さ」「インテリア」一九七七年六月号」という私の初期の住宅設計について批評してくれたテキストがある。一九七〇年代の住宅はいずれも同世代の友人や知人のローコスト住宅で、壁を一枚斜めに入れるだけ、三角のフレームを組み上げて中がらんどう、という単純極まりないものであったが、多木さんはその単純な構成の中に生まれる多様性を評価してください

たのであった。私が目指していた単純な構成とは、建築家の作品性としての形態ではなく、生きていくことに関わる複雑さや曖昧さと絡み合ったところから必然のように出てくる形式に近いものであった。森山邸でも21世紀美術館でも単純な構成が多様性を生み出している。箱の離散がつくり出す隙間の多様さが快適さの源泉であるように感じています。

森山邸の私の感想はいかがですか？

二〇一四年十二月一日

長谷川逸子

はせがわ・いつこ——建築家／菊竹清訓建築設計事務所勤務、東京工業大学篠原一男研究室を経て、1979年、長谷川逸子・建築計画工房設立、主宰。早稲田大学、東京工業大学、九州大学などの非常勤講師、米国ハーバード大学の客員教授などを務め、1997年、王立英国建築協会名誉会員。2001年、ロンドン大学名誉学位。2006年、アメリカ建築家協会名誉会員。主な作品：大島町絵本館[1994]、新潟市民芸術文化会館[1998]、珠洲市多目的ホール[2006]、ふじのくに千本松フォーラム[2013]など。

長谷川逸子様

こんにちは、西沢立衛です。昨年末はお忙しい中、森山邸までお越し下さりまして、またたいへん興味深い批評を頂きました。ありがとうございます。「箱

の離散がつくり出す隙間の多様さが快適さの源泉」という指摘には、設計当時の僕らのスタディの内実に迫る鋭さを感じました。今も覚えているのは、当時何かのインタビューで「森山邸を一言で言う」と？と質問され、とっさに「ぎゅぎゅぎゅ詰め」と言ってしまったことがありました。この「ぎゅぎゅぎゅ詰め」を建築として成り立たせるために、各棟

のばらけ方や隙間の多様さ、風景的な調和というようなことを、ずっとスタディしていたのです。森山邸では建築全体として、「使い方」というものが決まっていらない建築を目指していたように思います。建築の自由さ、開放感というものに、僕は興味がありました。建築を見に来た人が、建築のありようを見て、また建築と庭を使う

人々の風景を見て、これは学校に使えるとか、こういう仕事場もいいなとか、自分だったらどう使おうか考え始めるような建築というのでしょうか。人間の想像力を動かすような建築をつくりたいと思っていました。

議論の中で森山さんが、ローン返済の進み具合に合わせて、住人達に行ってもらって、徐々に自分の住まいを広げていき、最終的には全部を自分の家にしたとおっしゃったことがありました。建築が集合住宅からスタートして、時間をかけて森山邸になっていく風景を僕は想像して、おもしろく感じました。森山さんがぎゅぎゅ詰め案の模型を見てそういう使い方を思いついたのか、もしくは自分の家を広げていくアイデアに触発されてぎゅぎゅ詰め案が出て来たのか、順序は覚えていませんが、僕はその発想を聞いて、建築を使うということは創造的なことなんだと感じました。

ヨーロッパの街では、何百年も前の古い建築が今も使われています。今の人間の事情に合わせて建築をつくるのではなくて、既にある建築に人間のほうが合わせて、住んでいます。貴族の邸宅がいま寄宿舎になっていたり、大きな宮殿が美術館になったりと、事例はさまざまですが、時代を超えて生き続ける建築群に人間が張り付き、使いこなす風景に、僕は

人間の生のダイナミズムや、生きることの創造性を感じています。人間が建築にどう挑むかということが、もうひとつの創造になっているように思えるのです。

長谷川さんがおっしゃった「特殊解でなくいろんな建築を解くことができる形式」というのは重要な問題だと思います。たとえば日本ではビルディングタイプという言葉で、建築を用途別に分類していますが、ヨーロッパの建築類型（タイポロジー）は用途別ではなく形態別で、クーポラ、ロτζジア、ポルティコなど、建築の形の個性に名前を与えて、建築を分類しています。ロτζジアもポルティコも、その用途・使い方は、極端にいえば何でも良く、バシリカは主に教会に使われますが、集会所などに使われた例もあるようです。建築の使い方は、時が経てば変わっていくものですが、しかし建築物の形のおおまかなところは変わらずそのままなので、それに名前をつけるのだろうと思います。ここでは建築が人間や時代よりも長く存在し続けるということが、建築の条件の一つになっているように思えます。

「いろんな建築を解くことができる形式」という言葉から僕は、建築の歴史、時間ということ、思いました。分棟とかストライプという建築形式が、単一用途に限定されず使えることには、建築の



最近の森山邸

西沢立衛

にしざわ・りゅうえ——建築家・横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA教授／1966年生まれ。1990年、横浜国立大学大学院修士課程修了、妹島和世建築設計事務所入所。1995年、妹島和世とSANAA設立。1997年、西沢立衛建築設計事務所設立。主な作品：金沢21世紀美術館[2004]、森山邸[2005]※、ROLEXラーニングセンター[2009]、豊島美術館[2010]※、ルーヴル・ランス[2012]など（※以外はSANAA）。

箱の離散がつくり出す

隙間の多様さが快適さの源泉

西沢立衛様

一九九七年にバリでの私の展覧会をベ
ルリンにも巡回し、やや小規模にして開
催した。その時、ドキュメントX展を見
にセセッション館へと足を伸ばした。会
場には「動く家（カプセルハウス）」など
の装置と一緒に、延々と連なるフラット
な住戸プランが展示されており、結局誰
によってつくられたのか知らないままな
のだが、とても興味深かった。図形の連
なりとしか思えないその集合住宅の図面
を見ながら、レム・クールハースのラ・
ヴィレット公園コンペ案（一九八二）を連
想した。あのさまざまな場のイメージが
短冊状に平行配置された図面は美しかっ
た。さまざまな場面を切り出し無機質な

までに平行に配置していくそのパターン
は、その後多くの建築に影響を与えた。
つまり、クールハースがラ・ヴィレット
公園で提案したものは、特殊解ではな
く、いろんな建築を解くことができる形
式であった。

SANAAや西沢さんの仕事の中にも、
形式のようなものが見られるように思
う。金沢21世紀美術館は長谷川裕子さん
の案内で見学し、次はスタッフ達と訪
れ、そして今年はボンビドーの展覧会と
三回訪問して、そのたびに居心地良さを
感じている。21世紀美術館は箱の並べ方
で生まれるいろいろな場づくりにトライ
している。この美術館がもつ快適さは、
内部の光庭の配置やさまざまな広がり
の通路がつくり出す多様さにあるように感
じる。西沢さんは21世紀美術館のほかに
も、白い箱をいくつも配置する模型を繰
り返しつくっているようだ。森山邸を維

誌で見かけた時には、スケールもビル
ディングタイプも全く異なるのに、ここ
に丸い床と屋根をかぶせると21世紀美術
館になるとつさに思った。

森山邸は金沢21世紀美術館とどう異な
るのか、どう同じなのか。それを体験し
たいと考えて先日見学させていただい
た。私は大通りの建築の大きな壁の前を
歩くより、その裏の盆栽なんかを並んで
いるところを歩く癖がある。森山邸の箱



森山邸にて